高岡市埋蔵文化財調査概報第68冊

市内遺跡調査概報XIX

―― 平成20年度、瑞龍寺遺跡・鎮守堂址の調査他 ――

2010年２月

高岡市教育委員会

高岡市埋蔵文化財調査概報第68冊

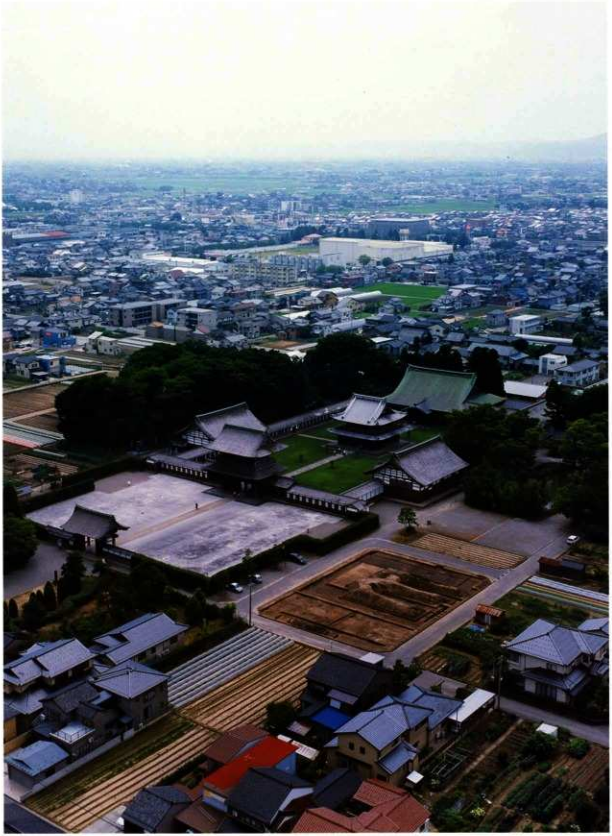
市内遺跡調査概報XIX

―― 平成20年度、瑞龍寺遺跡・鎮守堂址の調査他 ――

2010年２月

高岡市教育委員会

表紙カット：瑞龍寺遺跡出土、巴紋軒丸瓦・軒平瓦想定模式図（1／4）
大扉カット：瑞龍寺遺跡出土、巴紋軒丸瓦想定復元写真（1／3）

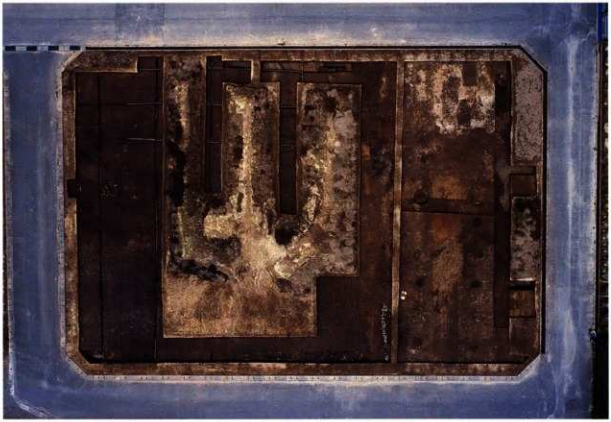


瑞龍寺遺跡富山不動産地区　遠景（北東）

※中央に瑞龍寺伽藍、中央やや右下が調査地区。

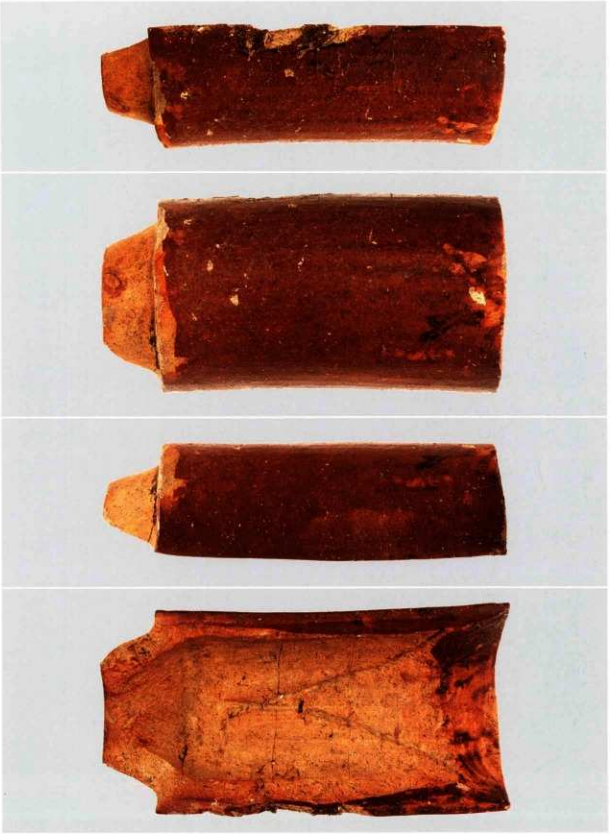
1．瑞龍寺遺跡富山不動産地区　遠景（北東）

※上方左側に瑞龍寺総門、上方中央に山門、回廊を経て大庫裏、その背後に仏殿・法堂が見える。



2．瑞龍寺遺跡富山不動産地区　全景（直上）

※写真上方が北側。



瑞龍寺遺跡富山不動産地区　瓦溜りＳＵ05出土　赤釉薬丸瓦「1325」（１／３）

序

高岡開町の祖・前田利長の菩提寺である国宝・瑞龍寺には、かつて白山神を祀る鎮守堂が存在しました。

そのことは、富田景周の著した『瑞龍閣記』に「鎮守神廟」の記述があることや、瑞龍寺に「万治四年（1661）三月」銘の鎮守堂の勧請札が残されていることからも窺われます。

ちなみに、高岡市赤祖父に所在する赤祖父神社の本殿は、この鎮守堂を明治初頭に移築したものとする伝承があります。

このたび、現在の瑞龍寺伽藍の北東に宅地造成の計画がなされ、試掘調査を実施することになり、その結果、鎮守堂址やこれに向かう参道址が検出されました。長い時を経て、再びこれらが姿を現したのです。

本書では、この瑞龍寺遺跡をはじめ、開発行為にともない実施した平成20年度の発掘調査成果を収録いたしました。郷土における歴史探求や学術研究にご活用いただければ幸いです。

末尾になりましたが、発掘調査の実施にご協力いただきました関係各位、地元の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成22年２月

高岡市教育委員会
教育長　氷見　哲正

例　言

1．本書は富山県高岡市において、高岡市教育委員会が平成20年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。

2．当調査は各種の開発工事に対応して実施したものである。

3．現地調査は平成20年度国庫補助金、報告書作成は平成21年度国庫補助金の交付を受けて、高岡市教育委員会が実施した。

4．本書で報告する遺跡ならびに調査地区は、12遺跡17箇所である。

5．調査方法は、井口本江遺跡栗林地区が本発掘調査で、これ以外は試掘調査である。

6．調査関係者は以下のとおりである。

［高岡市教育委員会］

文化財課長：東保英則（平成20年度）、大巻宏治（平成21年度）

〔埋蔵文化財担当〕

総括専門員：大村友則（平成21年度）

主幹：岡山哲朗（平成20年度）、副主幹：山口辰一

主査：荒井隆（平成20年度）、根津明義（平成21年度）、主任：栗山雅夫

7．当調査は、山口が担当した。

8．現地調査・報告書作成において、以下の各氏の御教示・御援助を得た。（順不同、敬称略）

上野幸夫、上原真人、越前慶祐、大橋康二、垣内光次郎、黒崎直、小島俊彰、杉山晋重子

中西常雄、西井龍儀、宮田進一、関清

高岡山瑞龍寺（四津谷道昭住職）

9．本書の編集は山口が行った。

凡　例

1．遺構記号は以下の通りである。

ＳＡ：構址、ＳＢ：神社址・掘立柱建物址、ＳＤ：溝、ＳＦ：道路址、ＳＫ：土坑、ＳＮ：畝状遺構、ＳＳ：根石・集石、ＳＵ：瓦溜り、ＳＸ：その他の遺構

2．遺物番号は以下の通りである。

1000番台：瑞龍寺遺跡富山不動産地区　　4000番台：中曽根西遺跡区画整理地区

2000番台：東木津遺跡古岡地区　　5100番台：東木津遺跡巻端地区

3000番台：井口本江遺跡栗林地区　　5200番台：井口本江遺跡ア・ライズ地区

目　　次

巻首図版
序
例　言
凡　例
目　次

1．瑞龍寺遺跡、富山不動産地区 …… 1
　Ⅰ 序 説 …… 8
　Ⅱ 遺 構 …… 7
　Ⅲ 遺 物 …… 12
　Ⅳ 結 語 …… 15

2．東木津遺跡、吉岡地区 …… 25
　Ⅰ 序 説 …… 27
　Ⅱ 遺 構 …… 30
　Ⅲ 遺 物 …… 36
　Ⅳ 結 語 …… 39

3．井口本江遺跡、栗林地区 …… 45
　Ⅰ 序 説 …… 47
　Ⅱ 遺 構 …… 49
　Ⅲ 遺 物 …… 50
　Ⅳ 結 語 …… 51

4．中曽根西遺跡、区画整理地区 …… 55
　Ⅰ 序 説 …… 57
　Ⅱ 遺 構 …… 60
　Ⅲ 遺 物 …… 63
　Ⅳ 結 語 …… 64

5．その他の遺跡・調査地区 …… 65

図 面 目 次

図面01～36　遺構実測図
図面37～56　遺物実測図

図 版 目 次

巻首図版01　瑞龍寺遺跡富山不動産地区　遠景（北東）
巻首図版02　瑞龍寺遺跡富山不動産地区
　1．遠景（北東）
　2．全景（南上）
巻首図版03　瑞龍寺遺跡富山不動産地区　瓦溜りＳＵ05出土　赤釉薬丸瓦「1325」（1／3）

図版01～38　遺構写真
図版39～54　遺物写真

挿 図 目 次

第1図　瑞龍寺遺跡位置図［1］（1／15万）…… 1
第2図　瑞龍寺遺跡位置図［2］（1／5万）…… 2
第3図　瑞龍寺遺跡と周辺の遺跡（1／2万5千）…… 3
第4図　瑞龍寺と関連施設の概略位置図（1／1万5千）…… 4
第5図　瑞龍寺遺跡、富山不動産地区と既往の調査地区（1／5,000）…… 5
第6図　瑞龍寺遺跡富山不動産地区　トレンチ拡張工程図（1／400）…… 6
第7図　瑞龍寺遺跡富山不動産地区　遺構概略図（1／400）…… 9
第8図　瓦の部分名称 …… 13
第9図　素描、瑞徳寺と調査地区 …… 15
第10図　瑞龍寺伽藍配置と調査地区図（1／1,000）…… 16
第11図　瑞龍開記の記述 …… 18
第12図　鎮守堂の位置 …… 19
第13図　赤祖父神社 …… 19
第14図　赤祖父神社本殿平面図・想定図（1／50）…… 20
第15図　神社址関連遺構図（1／200）…… 21
第16図　鎮守堂復元配置図（1／200）…… 21
第17図　瑞龍寺外堀・内堀範囲想定図　（1／5,000）…… 22
第18図　瑞龍寺北東側内堀推定ラインと伽藍中軸線直交・平行論　（1／1,600）…… 23
第19図　東木津遺跡位置図［1］　（1／15万）…… 25
第20図　東木津遺跡位置図［2］　（1／5万）…… 26
第21図　東木津遺跡吉岡地区位置図（1／5,000）…… 27
第22図　東木津遺跡吉岡地区　基本層序（1／20）…… 28

第23図　東木津遺跡吉岡地区　周辺の調査地区（1／2,000）…… 29
第24図　東木津遺跡吉岡地区　掘立柱建物址概略図［1］（1／200）…… 30
第25図　東木津遺跡吉岡地区　掘立柱建物址概略図［2］（1／200）…… 31
第26図　東木津遺跡吉岡地区　畝状遺構検出状態（1／600）…… 33
第27図　東木津遺跡吉岡地区　層位別土器分類（1／8、1／10）…… 35
第28図　東木津遺跡　既往の主な調査地区（1／1,000）…… 40
第29図　東木津遺跡における道路・土地区画想定模式図（1／1,000）…… 41
第30図　東木津遺跡吉岡地区　鍛冶関連遺物分布図（1／600）…… 44
第31図　東木津遺跡における礎板が検出された掘立柱建物址（1／400）…… 44
第32図　井口本江遺跡位置図［1］（1／15万）…… 45
第33図　井口本江遺跡位置図［2］（1／5万）…… 46
第34図　井口本江遺跡栗林地区位置図（1／5,000）…… 47
第35図　井口本江遺跡栗林地区　遺構図（1／200）…… 48
第36図　井口本江遺跡での調査位置及び遺跡範囲（1／5,000）…… 51
第37図　富山県出土の弥生時代石製収穫具一覧表（1／6）…… 53
第38図　中曽根西遺跡位置図［1］（1／15万）…… 55
第39図　中曽根西遺跡位置図［2］（1／5万）…… 56
第40図　中曽根西遺跡区画整理地区位置図（1／5,000）…… 57
第41図　区画整理事業区域と周辺の遺跡（1／1,000）…… 58
第42図　中曽根西遺跡区画整理地区　基本層序（1／20）…… 59
第43図　中曽根西遺跡区画整理地区　構址ＳＡ01実測図（1／80）…… 60
第44図　中曽根西遺跡区画整理地区　道路址ＳＦ01構築工程模式図 …… 64
第45図　中曽根館遺跡位置図（1／5万）…… 67
第46図　中曽根館遺跡・中曽根区画２地区位置図（1／5,000）…… 67
第47図　石名瀬A遺跡位置図（1／5万）…… 68
第48図　石名瀬A遺跡西本地区位置図（1／5,000）…… 68
第49図　中曽根北遺跡位置図（1／5万）…… 69
第50図　中曽根北遺跡能登地区位置図（1／5,000）…… 69
第51図　守護町遺跡位置図（1／5万）…… 70
第52図　守護町遺跡山本地区位置図（1／5,000）…… 70
第53図　下老子笹川遺跡位置図（1／5万）…… 71
第54図　下老子笹川遺跡長沢地区位置図（1／5,000）…… 71
第55図　下老子笹川遺跡長沢地区　全体図（1／800）…… 71
第56図　東木津遺跡位置図（1／5万）…… 72
第57図　東木津遺跡巻端地区位置図（1／5,000）…… 72
第58図　東木津遺跡巻端地区　基本層序（1／40）…… 72
第59図　東木津遺跡巻端地区・町田地区　全体図（1／400）…… 73
第60図　東木津遺跡巻端地区　出土遺物（1／3）…… 73
第61図　東木津遺跡位置図（1／5万）…… 74
第62図　東木津遺跡町田地区位置図（1／5,000）…… 74
第63図　越中国府関連遺跡位置図（1／5万）…… 75
第64図　越中国府関連遺跡魚川地区位置図（1／5,000）…… 75
第65図　越中国府関連遺跡位置図（1／5万）…… 76

第66図　越中国府関連遺跡鳥地区位置図（1／5,000）…… 76
第67図　石塚江之戸遺跡位置図（1／5万）…… 77
第68図　石塚江之戸遺跡尾山地区位置図（1／5,000）…… 77
第69図　石塚江之戸遺跡尾山地区　全体図（1／400）…… 77
第70図　井口本江遺跡位置図（1／5万）…… 78
第71図　井口本江遺跡ア・ライズ地区位置図（1／5,000）…… 78
第72図　井口本江遺跡ア・ライズ地区　全体図（1／200）…… 78
第73図　赤丸古村遺跡位置図（1／5万）…… 79
第74図　赤丸古村遺跡八幡地区位置図（1／5,000）…… 79

挿表目次

第1表　東木津遺跡吉岡地区　層位別土器出土量 …… 34
第2表　東木津遺跡吉岡地区　遺構・層位別鍛冶関連遺物出土量 …… 43
第3表　井口本江遺跡栗林地区　石製品計測表 …… 50
第4表　富山県出土の弥生時代石製収穫具一覧表 …… 54
第5表　その他の遺跡・調査地区一覧表 …… 66

別表目次

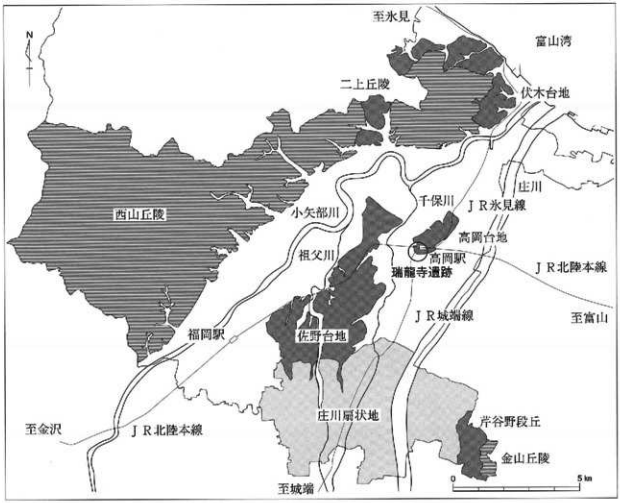
別表　土器類観察表 …… 80～85

調査参加者名簿

発掘　安藤誠吾、石田敬行、大橋欣次、上子将祐、宮岡雅光、川越香奈子
河原康弘、北村智之、久保只貴英、黒田貴之、小板達郎、小林央
斉藤俊祐、沢山和明、清水不二雄、新室秀次、高岡誠一、高嶋輝雄
竹内喜三、田中邦章、富田幸吉、中山賢富、畠山行男、馬道弘一
平井健之、深田力、松木雄祐、松本真由美、山口忠男、山崎一男
山田依里佳、山田誠晃、渡辺克己

整理　安藤誠吾、大野紗恵子、大村南津子、岡本仁志、木村宏次、黒田香里
小島智子、小林央、作田芳、曽谷万須美、杉忠理子、高土友希、竹部光希
民野加奈子、野唯貴、宮野美重子、森本舞子、柳瀬香奈

1．瑞龍寺遺跡、富山不動産地区



第１図　瑞龍寺遺跡位置図〔１〕（１／15万）

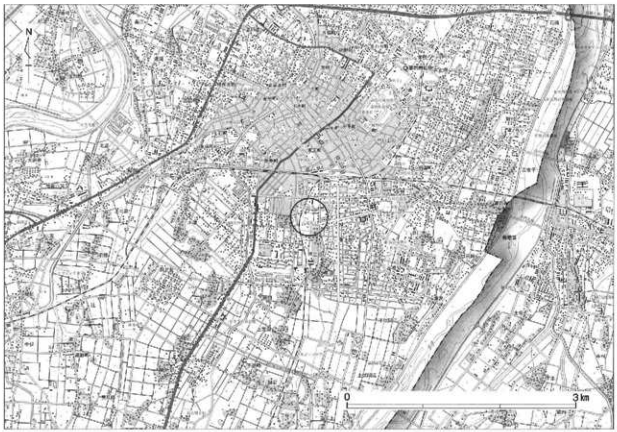
瑞龍寺遺跡富山不動産地区、目次

Ⅰ 序　　説 ……3
　1．遺跡概観 ……3
　2．調査概観 ……5

Ⅱ 遺　　構 ……8
　1．神社址 ……8
　2．瓦溜り ……8
　3．土　坑 ……10
　4．溝 ……10
　5．根石・集石 ……11
　6．その他の遺構 ……11

Ⅲ 遺　　物 ……12
　1．陶磁器類 ……12
　2．瓦 ……12
　3．鉄製品（鍛冶関連遺物） ……14
　4．銅製品 ……14
　5．石製品 ……14
　6．ガラス製品 ……14

Ⅳ 結　　語 ……15
　1．瑞龍寺の歴史 ……15
　2．調査の状況 ……17
　3．鎮守堂 ……18
　4．神社址 ……20
　5．堀と溝 ……22
　6．瓦溜り ……24



第２図　瑞龍寺遺跡位置図〔２〕（１／５万）

Ⅰ 序　説

1．遺跡概観

瑞龍寺遺跡の位置

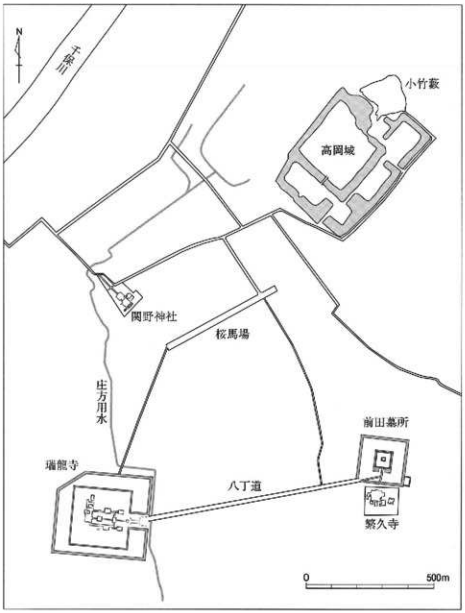
当遺跡は、ＪＲ高岡駅の南西約750mに位置し、旧瑞龍寺（伽藍瑞龍）の境内にあたる東西365m×南北330mが遺跡範囲である。当遺跡の中央西寄りをＪＲ城端線が南北方向に走る。遺跡の西方では千保川が、遺跡の東方では庄川がそれぞれ北流している。現在の庄川本流は、寛文10年（1670）から正徳４年（1714）にかけて加賀藩による河川改修によって固定され、それまでは千保川筋が庄川本流であった。

当遺跡は高岡台地の南西端に位置する。高岡台地は標高約15mを測り南西～北東方向に延びる。当地には後期旧石器時代の古定塚遺跡、縄文時代の中川遺跡・小竹藪遺跡・大手口遺跡があり、中川遺跡・小竹藪遺跡からは古墳時代前期の土器も出土している。慶長14年（1609）に加賀藩２代藩主前田利長が隠居城としてこの高岡台地上に高岡城を築造し、現在の高岡市街地の基礎を造った。

高岡城の南西側に位置するのが瑞龍寺であり、慶長19年（1614）に利長が逝去した後は菩提寺となった。元和元年（1615）の一国一城制により高岡城は廃城となるも、高岡城下は商工業の町として残された。正保２年（1645）からは利長の菩提寺の大改造も行われ、現在の瑞龍寺に直接繋がる伽藍と寺地が整備された。瑞龍寺の東北東約１kmには利長の壮大な廟所（前田墓所遺跡）が営まれ、これらを結ぶ参道・八丁道（八丁道遺跡）も設置された。

1．瑞龍寺遺跡
2．前田墓所遺跡
3．八丁道遺跡
4．高岡城跡
5．古定塚遺跡
6．入定塚遺跡
7．中川遺跡
8．小竹藪遺跡
9．大手口遺跡
10．赤祖父羽座岡遺跡
11．井口本江遺跡

第３図
瑞龍寺遺跡と周辺の遺跡
（1／2万5千）



第４図
瑞龍寺と関連施設の
概略位置図
（１／１万５千）

瑞龍寺遺跡の変遷

瑞龍寺遺跡は「伽藍瑞龍」の想定される境内地、すなわち外堀ラインをもって遺跡範囲として設定したものである。これは瑞龍寺に直接かかわる遺跡としたものではあるが、その後調査の進展により、これ以前の遺構も検出されている。当遺跡は、文献資料・石造文化財・絵図、そして考古資料から以下のように時期区分できる。

Ⅰ期：瑞龍寺以前、古代～中世である。古代については、土器類の細片が出土しているのみで、遺構は確認していない。中世については濠を検出しており、珠洲等の遺物も出土している。当地は高岡台地の末端であり、周囲と比べて微高地である。寺院建立以前に一般の集落跡の所在地としても立地可能な所である。当期は細分して、Ⅰ－１期＝古代とⅠ－２期＝中世としたい。

Ⅱ期：瑞龍寺草創期、伽藍瑞龍以前の法円寺ないし瑞龍院の時代である。江戸時代初期である。

Ⅲ期：伽藍瑞龍期、広大な寺地と壮大な伽藍が整備・建設され維持された段階。江戸時代前期・1645年以降から明治維新頃までである。延享３年（1746）に浴室より出火し、山門・七間浄頭・禅堂、及

び伽藍東輪の回廊が焼失した。この火災を境に２区分し、Ⅲ－１期＝延享３年以前、Ⅲ－２期＝延享３年以後とする。

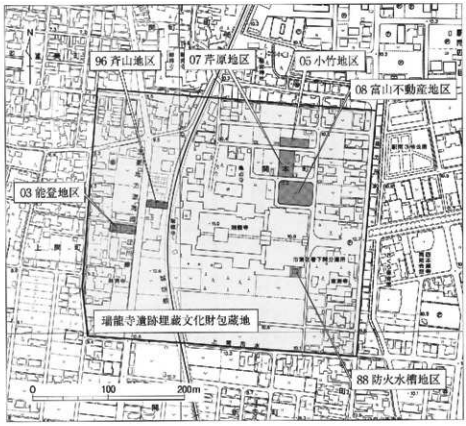
Ⅳ期：近代瑞龍寺期、加賀藩から援助が途絶えた瑞龍寺境内縮小期である。明治維新以降現在までである。明治42年（1909）は東宮（後の大正天皇）の北陸巡行を契機に前田墓所や八丁道が復元整備されることになった年である。近代瑞龍寺期はこの明治末頃を境に区分され、さらに戦後を一つの段階とする、すなわちⅣ－１期＝明治維新～明治末、Ⅳ－２期＝大正初め～昭和戦前、Ⅳ－３期＝昭和戦後～現代と３区分が可能である。

２．調査概観

調査に至る経緯

平成20年３月６日、富山不動産ビューローより当該地の開発に伴う埋蔵文化財の取り扱いの問い合わせがあり、協議を行った。開発計画は、瑞龍寺伽藍の北東側の３筆の畑地を造成して、６区画の宅地分譲地を形成する内容であった。当該地（高岡市関本町86・121・122）は旧瑞龍寺境内で、２重の堀で囲まれていたとされる瑞龍寺の内堀の内側と推定され、遺構の検出や遺物、特に瓦の多量な出土が確実な所であった。瑞龍寺の建造物、総門・山門・回廊等と至近の地点でもある。手続きや取り扱い、及び試掘調査後の処置等を説明し、当該地の重要性、また試掘調査実施となった場合は通常より丁寧に行う必要があるので、このことに関しての理解と協力を求めた。

平成20年３月26日に発掘の届出が提出され、施主の富山不動産ビューロー、地主の蔵野忠之氏、今井由美子氏、村田沙智子氏の承諾を得て、平成20年５月12日より試掘調査を開始した。



第５図
瑞龍寺遺跡、富山不動産地区と既往の調査地区
（１／5,000）

調査経過

調査経過は以下のとおりである。

1．南北方向に幅２ｍのトレンチ（試掘坑）を７条（第１～７トレンチ）設定した。重機により掘削し精査を行った。第２トレンチで礫層と硬化面を確認し、第７トレンチでは瓦溜りを確認した。また、すべてのトレンチから瀧ノ瓦・釉薬瓦が出土した。

2．調査地区東側の第１トレンチから第３トレンチを繋ぐ形で掘削範囲を拡幅した。第２トレンチと第３トレンチの間は土層観察用ベルトを残した。礫層が東西方向に続き、方形状の地形址（ＳＢ01－ｓｂ01）を確認した。また南北方向に続く硬化した粘土面の道路址（ＳＢ01－ｓｔ01）、それを挟んで対称に並ぶ掘え方列（ＳＢ01－ｓａ01・ｓａ02）等の構築物と関連施設（ＳＢ01）を検出した。さらに何らかの土台に使われていたと思われる根石（ＳＳ02）を確認した。

3．調査地区西側の第６トレンチと第７トレンチを繋ぎ、北、西、南方向へ掘削範囲を拡幅した。２つの瓦溜り（ＳＵ01・02）を確認した。また北側と南側で異なる整地土層を確認した。

4．調査地区東側の第３トレンチ南西側を拡幅し、さらに調査地区南端部を東西に通した形で掘削範囲を広げた。瓦溜り（ＳＵ05～07）と炭化物の層を確認、古い鉄釘、鬼瓦の一部が出土した。また集石（ＳＳ01）も確認した。

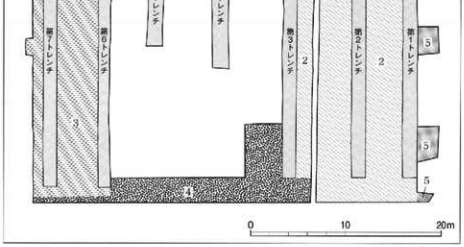
5．調査地区東側の第１トレンチ東側で３箇所の拡幅を行い、部分的な掘削と精査を行った。北西～南東方向に走る溝（ＳＤ08）を確認した。

6．調査地区中央の第４トレンチ北側において、東側は第３トレンチと繋ぐ形、西側は一部ベルトを残して第５トレンチと繋ぐ形で拡幅し、調査地区北端部を東西に通した形にした。方向の異なる２条の溝を確認した。西側の溝（溝ＳＤ02）は北西～南東方向に走り、東側の溝（溝ＳＤ05）はほぼ南北方向に走り、覆土上方には瓦を多く含んでいることを確認した。

7．７月５・６日に現地説明会を実施した。

8．道路址と掘え方の断ち割りを行った。掘え方の堆積、石に囲まれた土坑を含む２基の土坑（ＳＫ02・03）を確認した。また輪形溝等の鉄製品が出土した。

9．遺構及び遺物確認部を山砂で覆った後、重機による埋め戻しを行った。



第６図
瑞龍寺遺跡
富山不動産地区
トレンチ拡張工程図
（１／400）

調査概要

調査地番：高岡市関本町86、121、122

現地調査期間：平成20年５月12日～７月16日

調査面積：調査対象面積1,327㎡　発掘調査面積750㎡

基本層序

基本層序は以下のとおりである。

第Ⅰ層　褐色粘質土（耕作土）20cm

第Ⅱ層　明灰褐色粘質土（旧耕作土）約10cm

第Ⅲ層　整地層　約15～25cm

第Ⅳ層　基盤層

遺構名について

方形の地形址と周囲の硬化面等を、神社（瑞龍寺鎮守堂）址とその関連施設址と推定し、これらを大きく１つの遺構＝神社址としてＳＢ01とした。各遺構については、それぞれ各部門を構成するものとして枝番を付す形で示した。

検出遺構

神社址１棟（ＳＢ01）

地形址１箇所（ＳＢ01－ｓｂ01）、道路址１条（ＳＢ01－ｓｔ01）

掘え方列２条（ＳＢ01－ｓａ01・ｓａ02）

瓦溜り７箇所（ＳＵ01～07）

土坑５基（ＳＫ01～05）

溝８条（ＳＤ01～08）

集石・根石２箇所（ＳＳ01・02）

その他の遺構：炭化物の焼１箇所（ＳＸ01）、凹地１箇所（ＳＸ02）

ピット６基

出土遺物

土器類：中世－土師器・珠洲・中国産青花、近世－肥前陶磁器、瀬戸美濃、越中瀬戸等。

瓦：近世瓦－燻し瓦・釉薬瓦。

鉄製品（鍛冶関連遺物）：鉄釘・環金具・鉄滓（椀型滓）。

銅製品：飾り金具・銭・銅釘・銅銭（洪武通寶）。

石製品：細形棒状品。

ガラス製品：瓶。

グリッド

調査地区のグリッドは世界測地系の平面直角座標系の第Ⅶ座標系（原点は北緯36° 00′ 00″、東経137° 10′ 00″）に合わせた。東西をＸ軸とし、南北をＹ軸とした。グリッドの左下隅の数値がそのグリッドを表す。Ｘ＝１、Ｙ＝１の地点は、原点より、西へ13.875km、北へ81.665km向かった位置である。一辺５m四方を一区画とし、グリッドを割り付け、メッシュを表示した。

調査後

富山不動産ビューローの開発計画により試掘調査を実施し、これにより「富山不動産地区」と称してきた当地区は、重要性が関係者に認識され、その後宗教法人瑞龍寺により買収され、当寺院の敷地の一部となっている。

Ⅱ 遺　　構

1．神社址

神社址ＳＢ01

調査地区の東側（７～10，１～７）区で検出した。地形址、道路址、据え方列からなる遺構で、文献資料や絵図で記された鎮守堂址であると推定している。また、据え方列の間に黒色土を主体とした径0.5～1.0mほどのピットを６基確認した。神社址に関連する遺構となる可能性も考えられるが、性格が不明確で神社址との直接な関係が不明なため、神社址の中には含めなかった。

地形址ＳＢ01－ｓｂ01

調査地区の北東隅（７～10，５～７）区で検出した。規模は南北約10m、東西７m以上を測り、礫塊を中心とした方形の地形（＝地築、じぎょう）址である。北東側はカクランに切られ、北側は調査地区外へ延びる。東端での土層確認から厚さ15cmほどの礫層の下に鉄分を帯状に含む硬化した砂質と粘質の混土層が10cmほど堆積している。地固めとしてまず混土層を固め、さらに礫を敷いて固めているものと考える。方形の中心部は大きい礫、周辺は細かい礫を使用している。

道路址ＳＢ01－ｓｔ01

調査地区の東側（８・９，１～５）区で検出した。幅2.5～３m、長さ20mにわたり確認した。粘土を敷き、踏み固められた硬化面が南北方向に延びる。西側と南西側はカクランに切られる。北側は地形址に取り付く形で、南側は調査地区外へ延びる。南北端ともに粘土面の残存状態は良くないが、中央部は鉄分を含んだ粘土面が残っている。中央部で一部掘削を行い、７cmの粘土の厚さを確認した。神社址の参道と考える。

据え方列ＳＢ01－ｓａ01・ｓａ02

調査地区の東側（８・９，２～６）区で検出した。径1.5～2.0mほどの方形で、中心部分の黒色土を細礫を含んだ土が囲んでいる。確認した据え方列は２条で、道路址の東端と直端に４基ずつ並列する。東側列（ｓａ01）・西側列（ｓａ02）ともに据え方は心心間5.4mを測り、東側列と西側列の幅は5.4mを測る。規則正しく並列するため、灯籠等の基礎部分であると推測する。掘削は北側からそれぞれ２番目（ｓａ01－Ｐ２・ｓａ02－Ｐ２）の南側のみとし、２基の基礎部分は50～60cmの深さまで確認した。

2．瓦溜り

瓦溜りＳＵ01

調査地区の西端中央（２，５）区で検出した。規模は南北約0.8m、東西約0.5mで焼し瓦と釉薬瓦が混在する。調査地区西側一帯に拡がる明治期の整地層検出面で確認した。瓦溜りの周囲に1.4×1.1m範囲の整地層を掘り込んでいると思われるプランがみられることから、明治時代ないしは以降に掘られた穴に瓦を埋めたものと推定する。出土遺物は焼し瓦、釉薬瓦である。

瓦溜りＳＵ02

調査地区の西側（２，５）区、ＳＵ01から東側約２m、明治期の整地層検出面で確認した。規模は南北約1.5m、東西約1.8mで径2.2m範囲の円形プラン中で確認した。燻し瓦と釉薬瓦が混在しており、ＳＵ01と同時期のものである。出土遺物は近世陶磁器、燻し瓦、釉薬瓦である。

瓦溜りＳＵ03

調査地区の中央西側（５・６，５・６）区、４トレンチで検出した。ＳＤ03の覆土で東西ともに調査地区外へ延びる。確認した範囲は南北約1.5m、東西約1.5mである。燻し瓦と釉薬瓦が混在する。出土遺物は近世陶磁器、燻し瓦、釉薬瓦、胴製品である。図示遺物は図面37－1104、図面43－1502・1505・1508である。

瓦溜りＳＵ04

調査地区の中央北側（６・７，７）区で検出した。確認した範囲は南北1.1m、東西1.5mで、南北側ともに調査地区外に延びる。燻し瓦と釉薬瓦が混在し、近世陶磁器もみられる。南北溝ＳＤ05の上面に位置し、溝を埋める際に廃棄した瓦と推測する。確認した瓦の堆積は最大厚36cmを計る。出土した遺物は近世陶磁器、燻し瓦、釉薬瓦で、図示遺物は図面37－1203・1204・1217、図面38－1311、図面40－1318・1319、図面41－1324・1330、図面42－1326である。

瓦溜りＳＵ05

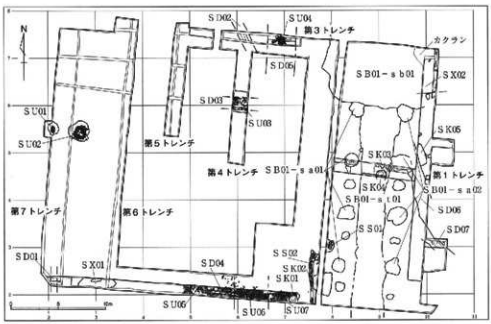
調査地区の中央南側（４・５，１・２）区の明治期の整地層下で検出した。確認した範囲は南北1.1m、東西5.2mで、南北側ともに調査地区外に延びる。燻し瓦と釉薬瓦が混在し、東側に隣接する瓦溜りＳＵ06を一部覆う形で確認した。瓦溜りＳＵ04とほぼ同時期のものであると推測する。出土遺物は近世陶磁器、燻し瓦、釉薬瓦で、図示遺物は図面41－1307・1330、図面42－1325である。

瓦溜りＳＵ06

調査地区の中央南側（５・６，１・２）区の明治期の整地層下で検出した。確認した範囲は南北1.1m、東西3.6mで、南北側ともに調査地区外に延び、東西は瓦溜りＳＵ05、07に切られる。ほかの瓦溜りとは違い燻し瓦のみで構成される瓦溜りである。瓦とともに粘土を混ぜて整地されている。出土遺物は燻し瓦で、図示遺物は図面38－1310・1312、図面40－1316である。

瓦溜りＳＵ07

調査地区の中央南側（６・７，１・２）区の明治期の整地層下で検出した。確認した範囲は南北1.1m、東西2.0mで、南北側ともに調査地区外に延びる。燻し瓦と釉薬瓦が混在し、瓦溜りＳＵ06の一部を覆う形で確認した。東端を土坑ＳＫ01に切られる。溝ＳＤ05の南側延長線上に位置するため、ＳＵ04と同じ遺構の可能性も考えられる。出土遺物は近世陶磁器、燻し瓦、釉薬瓦である。図示遺物は図面44－1701である。



第７図
瑞龍寺遺跡
富山不動産地区
遺構概略図
（１／400）

3．土坑

土坑ＳＫ01

調査地区の中央南側（7．1）区、明治期の整地層下で検出した。平面形は楕円形で、規模は長軸0.75m、短軸0.7m以上、深さ22cm以上を測る。西側で瓦溜りＳＵ07を切り、南側は調査地区外へ拡がる。遺物は出土していない。

土坑ＳＫ02

調査地区の南東側（7．1・2）区で検出した。黒褐色を主体とした楕円形で規模は長軸2.35m、短軸1.9mを測る。西側は集石ＳＳ01に切られる。神社地での検出のため神社との関連が考えられるが、性格は明確ではない。遺物は出土していない。

土坑ＳＫ03

調査地区の東側中央（9．4）区、道路址ＳＢ01－ｓｔ02の下で検出した。平面形は楕円形で規模は長軸0.5m、短軸0.3m以上を測る。北側は調査地区外へ拡がる。南側には土坑ＳＫ03が隣接する。遺構の掘削は行っていない。遺物は出土していない。

土坑ＳＫ04

調査地区の東側中央（8・9．4）区、道路址ＳＢ01－ｓｔ02の下で検出した。平面形は楕円形で、規模は長軸1.05m、短軸0.75m以上、深さ13cm以上を測る。遺構外周に10cmほどの礫を確認、礫の並び方から意図的に置いたものと推測する。一部掘削の結果焼土を確認した。しかし部分的な確認に止めたため性格は明確ではない。南側は調査地区外へ拡がる。北側にＳＫ03が隣接する。遺物は出土していない。

土坑ＳＫ05

調査地区の東側中央（9．4・5）区、神社址の硬化面30cmほど下で検出した。平面形は方形で、南側を溝ＳＤ07に切られ、西側は調査地区外へ拡がる。規模は長軸0.45m以上、短軸0.20m以上を測る。遺構掘削は行っていない。遺物は出土していない。

4．溝

溝ＳＤ01

調査地区の南西端（1・2，2）区、江戸後期～明治初期頃の整地層下で検出した。ほぼ南北方向に走る溝である。規模は長さ0.7m以上、幅0.8m、深さ33cm以上を測る。南北側ともに調査地区外に延びる。ＳＤ05と平行し瑞龍寺中軸線に直交して走るため、瑞龍寺に関連する溝の可能性が考えられる。また覆土からは鬼瓦の一部が出土した。出土遺物は燻し瓦で、図示遺物は図面39－1304・1306である。

溝ＳＤ02

調査地区の中央北側（5・6，7）区で検出した。北西～南東方向に走る溝である。規模は長さ0.7m以上、幅1.0m、深さ36cmを測る。北西側、南東側ともに調査地区外へ延びる。平成19年度調査芹原地区の斜行溝ＳＤ06の延長線上に位置するため、同一の溝であると推測する。遺物は出土していない。

溝ＳＤ03

調査地区の中央西側（5・6，5・6）区、第4トレンチの明治期の整地層下で検出した。ほぼ東西方向に走る溝である。規模は長さ1.4m以上、幅0.6mを測る。東西ともに調査地区外へ延びる。遺構上面に瓦溜りＳＵ03があり、溝中央を暗渠に切られる。遺物は出土していない。

溝ＳＤ04

調査地区の中央南側（５，２）区で検出した東西方向に走る溝である。規模は長さ4.3m、幅0.3～0.4m、深さ10cmを測る。瓦溜りＳＵ05、06を切る。遺物は出土していない。

溝ＳＤ05

調査地区の中央北側（６・７，７）区で検出した。ほぼ南北方向に走る溝である。規模は長さ0.8m以上、幅3.8m、深さ78cmを測る。南北側ともに調査地区外に延びる。瑞龍寺中軸線に直交し、神社址ＳＢ01に沿って走る。溝の位置や規模などから神社地を区画する堀址及び「瑞龍院二百回忌法事絵図」にみえる浴室の東側より北へ向かう溝の可能性が考えられる。出土遺物は近世陶磁器、燻し瓦、釉薬瓦で、図示遺物は図面37－1205・1210・1218、図面38－1303、図面39－1305、図面41－1328、図面42－1326である。

溝ＳＤ06

調査地区の東側中央（９，３）区、第１トレンチ内で神社址の硬化面30cmほど下より検出した北西～南東方向に走る溝である。規模は長さ3.7m以上、幅1.7mを測る。北西、南東方向ともに調査地区外へ延びる。ＳＤ07の北西側に位置するが、軸線のずれや土層観察から別の溝と判断した。遺物は出土していない。

溝ＳＤ07

調査地区の東端中央南（10，２・３）区、第１トレンチ拡張部で検出した。北西～南東方向に走り、北端で西北西方向に少し曲がる溝である。規模は長さ0.9m以上、幅は0.5m、深さ26cmを測る。北西、南東方向ともに調査地区外へ延びる。瑞龍寺中軸線に斜行し、出土遺物から中世のものと考える。北西側にＳＤ06が位置するが別の遺構と判断した。出土遺物は土師器、珠洲であるがいずれも細片である。

５．根石・集石

根石ＳＳ01

調査地区の南西側（７・８，２・３）区で検出した。花崗岩と藪田石で構成され、いずれも扁平な形をしている。神社区内での確認のため神社に関連する遺構の可能性が考えられるが、性格は明確ではない。

集石ＳＳ02

東側調査地区の南西側（７，１・２）区で、幅30cmほどの溝の中に長さ5.5m以上にわたり検出した。径５～20cm程の川原石を並べた列石である。排水溝としての役割も考えられるが、性格は明確ではない。

６．その他の遺構

炭化物の層ＳＸ01

調査地区の南西側（２・３，２）区、明治期の整地層下で幅約7.5mにわたり検出した。部分的な確認で遺構の掘削は行っていないため形状、性格は明確ではない。10m南側に瑞龍寺の浴室があり、延享３年（1746）の火災により焼失していることから、位置的に何らかの関連が考えられる。出土遺物は近世陶磁器、燻し瓦、鉄製品で、図示遺物は図面40－1319である。

凹地ＳＸ02

東側調査地区北東側の第１トレンチ内（10，６）区、地形址の硬化面30cmほど下で検出した。カクランに切られ、南側以外は調査地区外へ拡がる。北側へ自然に下がるため凹地とした。遺物は出土していない。

Ⅲ 遺　物

1．陶磁器類

土器・陶磁器類は中世から近代に至るまで261点出土した。図面37に図示したのは中世のもの4点（1101～1104）、近世のもの18点（1201～1218）の合計22点である。1101・1102は土師器皿で鎌倉時代頃のものである。1103は珠洲の壺の肩部片である。1104は中国景徳鎮の青花皿である。15世紀頃とした。近世陶磁器類は、肥前陶磁器・瀬戸美濃・越中瀬戸、そして福岡産・関西産のものがある。1201～1206は肥前陶器である。1203は壺の蓋としたものである。1207は福岡産、1208は関西系の陶器である。1209・1210は瀬戸美濃、1211～1214は越中瀬戸である。1216～1218は肥前磁器染付碗である。

2．瓦

今回出土した瓦は、近世瓦で瑞龍寺所用の瓦としているものである。

瓦溜りが7個所確認され、当調査地区内には多量の瓦が埋蔵しているが、今回の調査は現状保存を考慮し、取り上げた瓦は少量である。

瓦は焼成・釉薬の違いにより、燻し瓦と釉薬瓦があり、後者は釉薬の違いにより、「黒釉瓦」と「赤釉瓦」に区分している。この違いは、「赤釉瓦」が本来のもので、焼成不良等により「黒釉瓦」が存在するとの見方もあるが、このように区分して報告する。

瓦の部分名称については、佐原真氏のもの（「平瓦桶巻作り」）を前提とした上で、上原真人氏に指導を得た名称を使用することにした。行基式丸瓦と平瓦はほぼ同様の名称となる。玉縁付丸瓦については、玉縁部以外の丸瓦本体をどのように呼ぶかが問題であるが、上原氏の「筒部」に従ったのをはじめ、端面については「小口」を使用した。

燻し瓦

軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・菊丸瓦・輪違瓦・鬼瓦である。

軒丸瓦：図面38－1301は巴紋軒丸瓦で、周囲に珠紋が廻る三巴紋軒瓦である。頭から尾へ流れるとした場合、左回り（左巻き）である。尾は約半周する長いものである。珠紋は16個付くものに復元できる。面径は16.0cmとなる。図面38－1302は外周部の破片である。

軒平瓦：図面38－1303は均整唐草紋軒平瓦の中央部の破片である。

丸瓦：図面39－1304～1309。玉縁付の丸瓦である。丸瓦部凸面はヘラナデが丁寧に行われている。玉縁部凸面は横ナデである。

平瓦：図面38－1310～1314。凹凸面とも丁寧にナデられている。

菊丸瓦：図面40－1315～1321。瓦当部分を中心とする破片である。1315は丸瓦部が半分程度残存している。1316は瓦当部がほぼ全体残存している。断面図は残存状態が良好な他の資料を参考に復元的に示した。大きさより、瓦当径約10cmの1315と瓦当径約7～8cmの1316～1321に区分される。紋様は8弁の菊花紋である。瑞龍寺遺跡では間弁が付く型式のものもあるが、今回のものはすべて間弁は付かない。瓦当部と丸瓦部との接合方法については、1315・1317において双方を接着させる「芋付け方」が確認できる。

輪違瓦：図面40－1322・1323。全体の形態が不明ではあるが輪違い瓦としたものである。菊丸瓦の丸瓦部

の可能性もある。

鬼瓦：図面41－1324。鬼瓦としたがどの部分かは不明である。

刻印：図面41－1307・1310・1314。丸瓦・平瓦で紹介したものの中に刻印が付くものがある。1307は丸瓦後部段に角印「上」が付く。1310は平瓦狭端面に角印「上」が付く。1314は平瓦端面に角印「丁」が付く。

釉薬瓦

黒釉瓦と赤釉瓦としている２者である。前者は黒色を基本とする釉薬が掛かり芯部は灰色である。後者は赤茶色・赤紫色・暗紫色を基本とする釉薬が掛かり芯部は明赤褐色である。本瓦葺きの丸瓦と平瓦で、丸瓦は玉縁付きのものである。

丸瓦：図面42－1325～1327。1325は別に記述する。1326・1327は赤釉薬で玉縁部側の破片である。1326は暗紫色、1327は赤紫色の釉薬が付く。

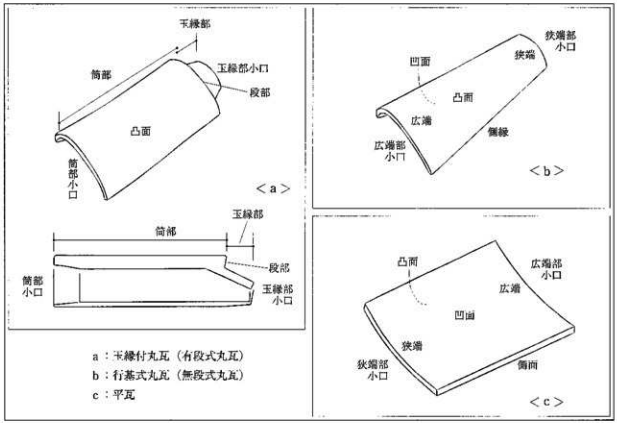
丸瓦1325：赤釉瓦のほぼ完存品である。瓦溜りＳＵ05からの出土である。

［規模］全長23.0cm、筒部長20.1cm、玉縁部長2.9cm、筒部小口幅11.6cm、段部幅11.4cm、玉縁部基部幅9.2cm、玉縁部小口幅（推定値）6.0cmとなる。

［成形・調整手法］筒部：凹面は「コビキＢ」による切断痕及び糸切痕が付く。凸面はヘラナデが丁寧に行われている。玉縁部：凹面は縄目で、凸面は横ナデである。

［胎調］胎土は明黄褐色を呈する。

［釉調］釉薬は褐色を呈する。筒部凸面全体に掛かるが、段部近くは無釉である。



第８図　瓦の部分名称

平瓦：図面41－1328～1330。1328・1329は黒釉瓦、1330は赤釉瓦である。1328は厚さ10～11㎜で、芯部は灰色である。黒褐色の釉薬が凹面側に付く。1329は厚さ７～８㎜で、芯部は灰色である。黒色の釉薬が凹面側に付く。1330は厚さ８～９㎜で、芯部は灰褐色である。広端側の破片であり、凹面側の茶褐色の釉薬の端がみえる。凸面には櫛目が付く。

３．鉄製品（鍛冶関連遺物）

鉄製品及び鍛冶関連遺物を図面43・44に示した。鉄釘・環金具・用途不明品・鉄滓である。

鉄釘：図面43－1401～1412。錆化が進んでおり、また欠損品であり本来の形態が不明なものである。ここで鉄釘としたものは、釘と推定されるもの、及び釘類似品である。1401・1402は頭部叩き出し折り曲げている頭巻である。1403・1404は頭部を平に切ってある切釘とした。1405～1407は近代の洋釘（丸釘）の可能性がある。1408～1412は釘になる可能性がある釘類似品である。

環金具：図面44－1413・1414。1413は両方に環状部が付く、環相互は直交する位置である。1414は片方に環状部が付き、他方は尖っている。

用途不明品：図44－1415・1416は鉄製品の破片で、用途不明である。

鉄滓：図面44－1418は鍛冶関連の鉄滓である。椀型滓で内面には木炭痕がみられ、外面には小礫が付着している。

４．銅製品

銅製品を図面43・44に示した。飾り金具・銅釘類・銅銭である。

飾り金具：図43－1501は用途不明の小品である。

銅釘類：図43－1502～1510。鋲1502～1504と釘1505～1510に区分した。

銅銭：図44－1511は洪武通寶と推定される。

５．石製品

細形棒状品で図面44－1601・1602である。クレバス型石器に類似した形態である。1601が安山岩、1602が凝灰岩である。

６．ガラス製品

図面44－1701。近代のガラス製品である。小型瓶でいかり肩の形態である。ガラス内には気泡がみえる。

Ⅳ 結　　語

1．瑞龍寺の歴史

瑞龍寺伽藍

高岡山瑞龍寺は曹洞宗の寺院で、総門・山門・仏殿・法堂（大方丈）が東面して中軸線上に並ぶ伽藍配置となっている。山門両脇から出た回廊が大方丈前側に繋がり、仏殿は独立している。七堂伽藍は、山門・仏殿・大方丈と浄頭（七間浄頭）・浴室・大庫裏・禅堂である。南北の回廊に禅堂・大庫裏が相対して配置されている。山門から東側に延びた回廊の左前方に浴室、右前方に浄頭が配置されている。浴室・浄頭は建物が焼失した後、現在のところ復元はされていない。しかし、その位置は明確である。今回の調査地区は、この浴室址地の北側至近の所である。

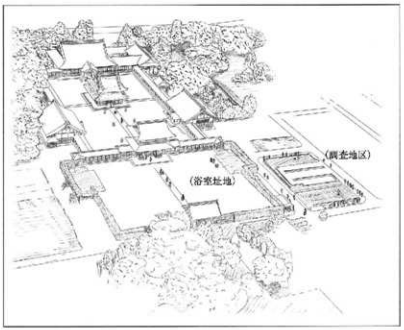
瑞龍寺の草創

現在の瑞龍寺「伽藍瑞龍」は加賀藩３代藩主前田利常が前藩主前田利長の菩提を弔うため整備したものである。利長の33回忌を翌年に控えた正保２年（1645）に起工され寛文３年（1663）頃に竣成したとされる。寛文３年は50回忌にあたる。

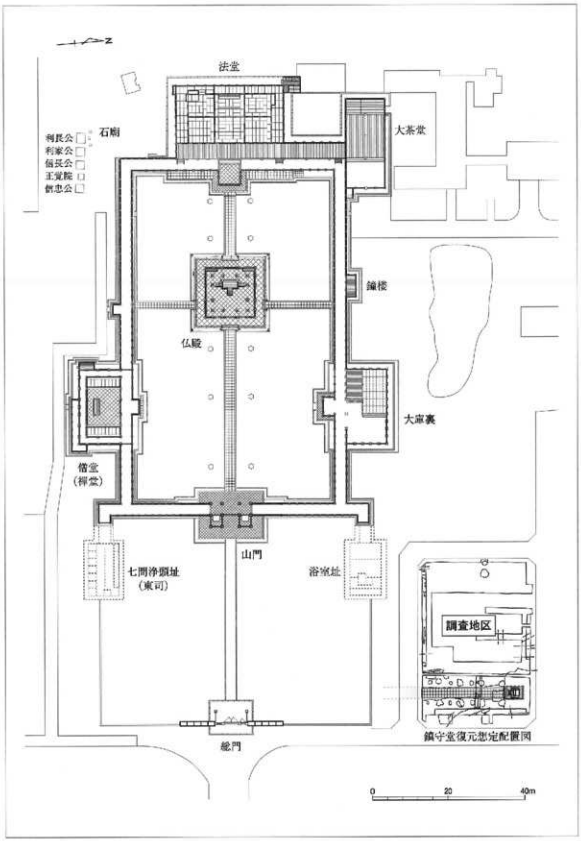
瑞龍寺の起源は加賀藩前田家が菩提寺としてきた宝円寺である。天正３年（1575）に前田利家・利長親子は越前府中に封ぜられて、同地にあった宝円寺に帰依した。その後、能登七尾、金沢に移封されるに伴い宝円寺が建てられた。慶長10年（1605）前田利長は隠居し居を構え、宝円寺も移転した。さらに富山城の火災により、慶長14年（1609）高岡に築城し居を移した。慶長18年（1613）に宝円寺も高岡に移り「法円寺」となった。法円寺は慶長19年（1614）に高岡で逝去した利長の菩提寺とした際に、利長の法名から「瑞龍院（瑞龍寺）」と改称され、さらに正保２年からの伽藍整備に伴い「瑞龍寺」となり、その壮大な伽藍より「伽藍瑞龍」と呼ばれるようになった。伽藍瑞龍以前の法円寺～瑞龍院（瑞龍寺）時代の様相については、瑞龍寺境内や周囲に今も残る石廟をはじめ正保２年以前の銘がある石燈籠等の石造物が伝えている。

近代の瑞龍寺

藩政期が終焉を迎え、明治維新、そして明治４年（1871）に廃藩置県があり前田家による保護や援助が途絶えたため、建物が荒廃し寺地を失っていった。明治29年（1896）の中越鉄道（現在の城端線）敷設時に伽藍西方が売却された。第２次世界大戦後の農地解放では、周囲の寺地がなくなり縮小がさらに進んだ。



第９図　素描、瑞龍寺と調査地区



※「【国宝】高岡山瑞龍寺」瑞龍寺伽藍配置図を基に編集・トレースを行った。

第10図　瑞龍寺伽藍配置と調査地区図（1／1,000）

瑞龍寺の指定と修理

明治30年（1897）に「古社寺保存法」が制定され、わが国における文化財保存行政が本格的に始まった。この法律により、瑞龍寺においては、明治42年（1909）に仏殿、昭和３年（1928）に総門と法堂が国宝に指定された。「古社寺保存法」は昭和４年（1929）に「国宝保存法」に発展し、これに基づく建造物の保存が進められることになった。昭和10年（1935）から13年（1938）にこれら国宝建物３棟の修理工事が実施された。戦後昭和25年（1950）に「文化財保護法」が制定され、旧法の国宝は、新法の重要文化財へ引き継がれた。昭和50年（1975）代に近世寺社建物の保存への流れのなかで、瑞龍寺の山門等５棟が重要文化財に指定された。昭和60年（1985）10月より平成８年（1996）３月まで昭和・平成の大修理が実施され、これを契機として、平成９年（1997）12月、山門・仏殿・法堂が現在の文化財保護法の国宝に指定された。

２．調査の状況

調査の進展

調査区に対して南北に幅２ｍの試掘坑を設定して、東側から掘削を始めた。最初と２番目の試掘坑で整地されたような礫層や硬化面を確認した。これと時を同じくして、瑞龍寺の昭和・平成の大修理を指揮された上野幸夫氏から当地が鎮守堂址地であるとの指摘があった。

この鎮守堂の址地を解明すべく、東側地区は周囲を拡幅して調査を続けた。一方、第６・７試掘坑では、整地された状況であったので、この西側地区も拡幅した。このように東側では鎮守堂址の、西側では整地層の解明を中心とした調査を行った。また、北端部と南端部はそれぞれ遺構や土層を東西に通しては把握することで拡幅や掘り下げを行った。

鎮守堂址（東側調査地区）

鎮守堂本体の址としたのは、東西約12mにわたる地業の址である。北側は調査地区外となるが東側はほぼ端部近くまで検出したと判断し、神社建物の規模として妥当なものと考えた。ここから南側へ延びる道路状の硬化面がみられ、神社の参道とした。この左右からは、据え方列がみられ、これも参道脇に設置された石灯籠のようなものの址とし、神社関連のものとした。地業址・参道址・据え方址を神社すなわち鎮守堂関連の遺構と捉えた。

整地層（西側調査地区）

西側地区はほぼ全面が整地層といえるものであった。この地区は南端部以外深くは掘り下げていない。第Ⅱ層の旧表土の下からは整地された状況が検出された。精査を繰り返したが、土坑状の瓦溜り（ＳＵ01・02）以外、遺構は確認されなかった。明治時代頃数回の整地が行われたものと理解した。

瓦溜り

多量で重量がある瓦は、火災・破損・葺き替え等により廃棄される場合、手近い所に捨て置かれるものと想像される。今回の調査地区は、瑞龍寺の主要建物と至近の場合であり、瓦の出土は十分に予想された。瓦溜りとした所は７個所である。南端部中央は明治期頃の整地層を掘り下げ、その下から瓦溜りが検出された。これらを３つの群に区分し、西より瓦溜りＳＵ05・06・07とした。西側と東側の瓦溜りは軒瓦が含まれるのに対して、中央の瓦溜りＳＵ06は燻し瓦のみの瓦溜りである。この瓦溜り群は東西への拡がりは約12mを測り、北側と南側へは拡がる状況である。深さやどのような所に形成されたかは、上面での確認に止め、掘り下げを行っていないので不明である。瓦溜りＳＵ03・04は、溝の上に形成されたものである。両者とも軒瓦が含まれている。瓦溜りＳＵ01・02は、土坑のような掘り込みのなかへ廃棄された状況である。

溝

主要な溝はＳＤ02・03・05～07の５条である。瑞龍寺中軸線と直交ないし平行するのがＳＤ03・05の２条であり、斜行する溝がＳＤ02・06・07の３条である。

３．鎮守堂

瑞龍寺鎮守堂の資料

瑞龍寺に鎮守堂が存在したことについて、『高岡町図之弁』では「浄願、回廊、鎮守堂、浴室、禅堂、裏門、楼門等は寛文年中に出来と云伝」と記述されており、伽藍瑞龍創建期より存在していたことが窺われる。『瑞龍閣記』には「右折四十歩抵鎮守神廟」と記され、総門より右に曲がって40歩（約72m）で鎮守の神廟すなわち鎮守堂に至ることが読み取れる。瑞龍寺関係の絵図では、延享３年（1746）の火災以前の状況を伝えているとされる享和元年（1801）の「高岡城併瑞龍寺図」や火災以後の状況とされ、文化10年（1813）の「瑞龍院二百回忌法事絵図」等に鎮守堂に該当する建物が描かれている。瑞龍寺には万治４年（1661）３月銘の鎮守堂歓請札が残されている。

鎮守堂と白山神

護法護伽藍を祀るものに土地堂と鎮守堂がある。鎮守堂の祭神は開山やその寺と関係の深い神が祀られ、

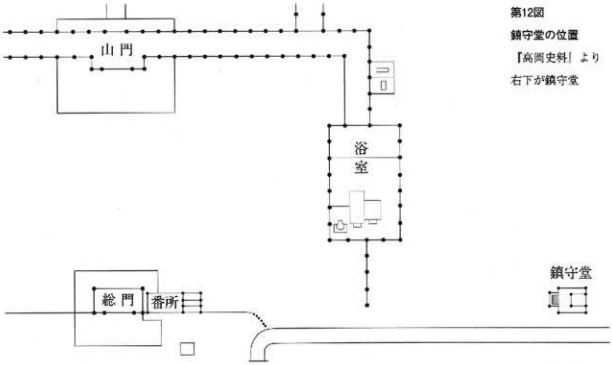
右折四十歩抵鎮守神廟玉牓四繚一華表
屹千其頭所謂霊観之一天皇廟秦楽題
句是也自揔門直入亦四十歩低山門

右折四十歩にして鎮守の神廟にいたる。玉牓四もに繚り、一華表其の前頭に屹だつ。いはゆる霊観の一たり。「天皇廟奏楽」の題句是れなり。惣門より直に入ること亦た四十歩にして山門にいたる。

○霊観その一（鎮守神廟）―天皇廟奏楽―総門から右折して行くこと四〇歩で鎮守様の神廟に至る。玉垣が廟の四周をめぐって設けられ、一基の鳥居がその前面にそば立っている。いわゆる霊観の第一である。「天皇廟奏楽」―当山鎮守の白山妙理大権現さま、われはイザナギノミコトなり、日域男女の元神なりと白山に示現し、道元禅師の入寂にも影随したもうた権現さま）のご廟から、妙なる楽の音が流れてくる。この楽の音に身心ともに浄められて、これから当山諸堂にお参りする―という題句は、ここの総門からまっすぐにまた四〇歩進むと山門に達する。

第11図　瑞龍閣記の記述

左：小島威彰氏による口訳　中：小島威彰氏による訓記　右：瑞龍閣記（瑞龍寺原本より）

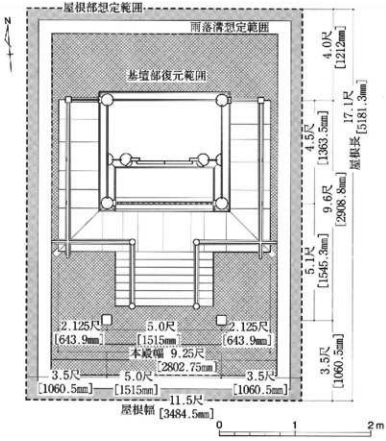


第12図
鎮守堂の位置
『高岡史料』より
右下が鎮守堂

第13図　赤祖父神社（上：神社正面、南西より。下：本殿、北北西より）

越前永平寺をはじめ曹洞宗寺院の鎮守堂には祖師道元と関係の深い白山妙理大権現が祀られることが多く、瑞龍寺の鎮守堂も同様である。また鎮守堂は山門鎮護の神として総門から山門付近に、また裏鬼門方向を封じるため寺院の北東側に設置されるのが通常とされている。

白山は石川・福井・岐阜の3県にまたがって聳えている。この山に対する信仰は6世紀には始まり、仏教・道教等の影響があり、修験場へと発展していった。白山には泰澄が養老元年（717）に開山したとの伝承があり、平安時代中頃から語り出されたようである。白山の主峰・御前峰（標高2702m）がイザナミ神で白山妙理大菩薩と号し、本地仏は十一面観音とする信仰があり、白山神に対する信仰が広まり、各地に白山社が建



第14図　赤祖父神社本殿平面図・想定図（1／50）

※上野幸夫氏の資料提供及び指導により作成

立されるに至った。

赤祖父神社本殿

赤祖父神社は高岡市赤祖父333に所在している。ＪＲ高岡駅より南東側1.2kmの地点である。以前はここから南へ200mの所にあったものである。地元では瑞龍寺の鎮守堂を明治初期に移築したものと言い伝えられている。

上野幸夫氏は、この赤祖父神社本殿について次のような所見を出されている。

総欅造りの一間社流造りで、間口1.53m、奥行身舎1.36m、向拝1.54m、屋根は現在銅板葺きになるが、当初は柿葺きであったものと考えられる。平面は室内を内外陣の二室に分け、正面と両側面に縁を設け、縁の背後に脇障子を付ける。当初は正面に階段と登り高欄及び縁高欄が付いていたものである。軸部は身舎柱が円柱で、向拝柱は切面取りの角柱で面取り幅も大きく古式である。柱間装置は当初は引違格子戸であったと考えられる。室内の内外陣境は方立に両開き板扉とし、欅の一枚板扉には豪華な八葉の鍍金具を中央に、召合せ部には七宝焼を施した戸締り金具が付く。両側面と背面は幅広の横板壁になる。組物は一間社流造りであるため身舎四隅柱で出組の連三斗になり、中備は蟇股で、正面と両側面に付く。

上野幸夫氏は、赤祖父神社本殿が江戸時代初期の建築様式であること、瑞龍寺の建築や意匠との類似性等の建築学上の所見に、伝承や文献資料・絵図等の知見を加え、瑞龍寺鎮守堂が神仏分離令により、移築されたものであるとされている。解体せずに曳家により移築したので、建築当時の様式をそのまま残しているものとされる。第14図として、上野氏から資料提供と指導を得た赤祖父神社本殿の平面図と基壇部や屋根等の想定規模図を示した。神社の規模はほぼ幅3.5m、奥行き5.2mとなる。

4．神社址

神社本体

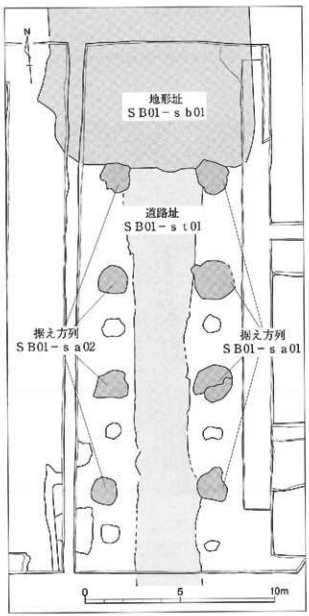
方形の地形址を神社の基礎部分とした。規模は幅（東西）約10m、奥行き（南北）７m以上となる。神社の復元規模に比べて極めて大きい基礎部分である。『瑞龍閣記』には「玉墻四繞」と記されている。玉垣が四周にめぐって設けられている状況を示している。神社の周囲の玉垣等の施設も含んでいると理解される。

参道

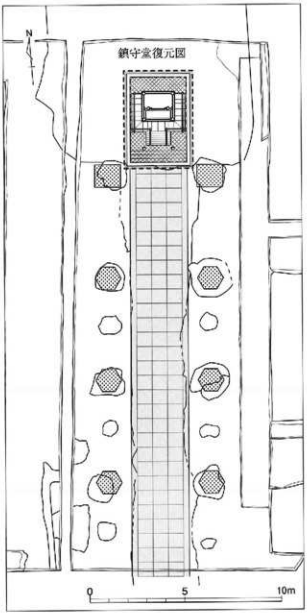
神社本体の地形址に取り付く形で道路状の硬化面を検出している。神社の参道としたものである。検出できたのは基礎部分で、上方に石敷きの参道があったものと考えた。現在の瑞龍寺には山門と仏殿を結び法堂へ至る石敷きの参道がある。幅３ｍで、両脇には耳石（袖石）がありこの間には３枚の方形の敷石がおかれている。耳石の１個の幅は30cm、敷石１個の幅は80cmである。基礎部分とした硬化面は幅３ｍと復元可能なのでこのような石敷きの参道があった蓋然性は高いと考えられる。第16図として、遺構図の上に神社と石敷参道の復元図を載せてみた。

据え方

参道の両脇からは、据え方とした土質の違う部分が各４個所等間隔に検出された。心心間は5.4ｍで、左右の間隔も5.4ｍである。また据え方の中間地点では、小ピットが検出されている。参道の脇であり、燈籠・狛犬・鳥居等があり、その基礎部分を検出したと考えられる。



第15図　神社址間遺構図（１／200）



第16図　鎮守堂復元配置図（１／200）

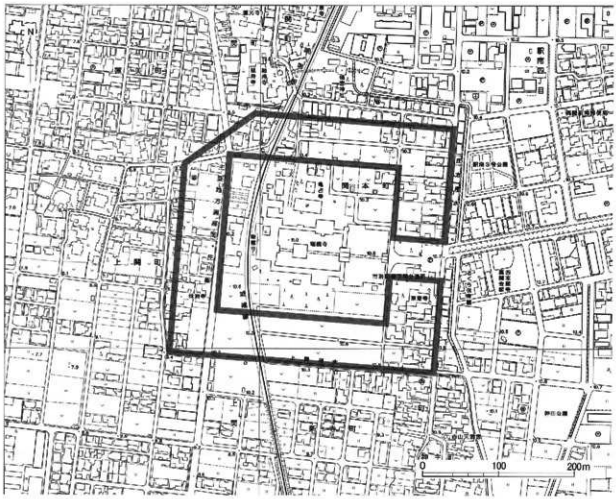
5．堀と溝

外堀

瑞龍寺（伽藍瑞龍）は二重の堀（塹）で囲まれていたことが絵図や各資料より判明する。広大な敷地は外堀のラインで区画されたものとしてよいだろう。『瑞龍閣記』では、33,643歩（坪）と記されている。1歩を約3.3㎡として約11.1haとなる。瑞龍寺の外郭区画は現在もその痕跡を留めている。北側は用水が東西に走る。南側から西側にかけては上関用水がL字状に走り、南側と西側の外郭といえる。東側については、総門の両脇付近から内堀に延び、総門の東側に行馬門がみえ、『瑞龍閣記』に外門から総門に至ることが記されており、この外門＝行馬から外堀が南北に拡がっている。外門推定地よりやや東側に庄方用水が南北に延びている。絵図でも外門のさらに外側に堀が描かれており、これが庄方用水に該当するとしてよいだろう。このように外郭の区画を比定すると、南北約325m、東西360mとなり、これに囲まれる敷地は117,000㎡（11.7ha）となり、北西隅部が斜めに区画されることからこの部分の想定面積4,000㎡を減少させると、敷地は113,000㎡（11.3ha）となり『瑞龍寺閣記』の111,000㎡に極めて近い数値となる。

総門からの距離

『瑞龍寺閣記』には、総門とその他の建物との距離が記されている。その記述と現在想定される各建物と



第17図　瑞龍寺外堀・内堀範囲想定図（1／5,000）

第18図　瑞龍寺北東側内堀推定ラインと伽藍中軸線直交・平行溝（1／1,600）

の距離を比較してみる。1歩は1.8 mとした。

外門～総門：①瑞龍寺開記50歩（90 m）、②現在想定地70 m

総門～鎮守堂：①瑞龍寺開記40歩（72 m）、②現在想定地70 m

総門～山門：①瑞龍寺開記40歩（72 m）、②現在想定地55 m

総門から東側90 mの所は庄方用水となり、この内側に外門を想定した場合、50歩は大き過ぎる数値である。総門・鎮守堂間の距離は、現在の総門の中心部と発掘調査で検出された鎮守堂の中心部までの距離は、瑞龍寺開記の40歩は妥当なものである。総門・山門間はそれぞれの門扉の距離は30歩である。

内堀

内堀については地表に名残を留めていなく、外堀に比べて明確ではない。今回の調査地区（「富山不動産地区」）の北側に平成19年度調査の「芹原地区」があり、さらに北側には平成17年度調査の「小竹地区」がある。それぞれの境をなす道路敷き部分の調査は実施していないが、これらの南北に連なる調査地区の結果からは、東西に延びる溝で、内堀になる可能性がある溝は「芹原地区」南西部で検出されたＳＤ08である。

関口欣也氏の説では、北側の内堀は外堀より南へ約60 mの所とされており、「小竹地区」と「芹原地区」の間の道路がほぼ該当する。「芹原地区」のＳＤ08ではやや内側に入りすぎ、この溝を西側に延長すると、大茶盆北側の書院に至るものである。この溝については、寛政9年の絵図には載っていない内堀内の区画にかかわるものや、草創期の瑞龍寺にかかわる溝の可能性があるといえる。またこの溝と直行する方向で検出されたのが、今回の「富山不動産地区」のＳＤ05である。

南側の内堀については、絵図より南西側にある塔頭の一つである林洞庵の位置が、内堀の延長線より北側

に位置していることにより、外堀より北へ約60mの所としてよいであろう。

西側内堀については、林泉庵の位置や西側の伽藍・大方丈の背後に一定の敷地をとるとすれば、外側より約70m内側、現在の主要地方道高岡・庄川線付近に想定されよう。総じて、南北の内堀は外堀より約60m内側、東西の内堀は外側より約70m内側に設定されたこととなる。歩に換算すれば、南北が35歩内側、西側が40歩内側、東側が35歩ないし40歩内側で設計されたともされよう。なお、東側については、総門の南北線よりどの程度外側に離れるかにより、数値が違ってくるのでやや幅を持たせた。

浴室と溝

文化10年（1813）の「瑞龍院二百回忌法事絵図」には、浴室の東側より北へ向かう溝が描かれており、この溝は鎮守堂の北西側で曲がり、内堀へ達している。浴室の排水にかかわる溝の可能性がある。今回検出の南北溝ＳＤ05はこの溝に該当する可能性がある。

6．瓦溜り

瑞龍寺の瓦

瑞龍寺の近世瓦は燻し瓦と釉薬瓦の２種類である。燻し瓦は本瓦葺きの基本的瓦の軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦と菊丸瓦・輪違い瓦・鬼瓦等の役瓦が出土している。釉薬瓦で現在まで確認しているものは、丸瓦と平瓦のみである。このことより、近世の瑞龍寺では燻し瓦が主体で葺かれ、その後釉薬瓦が加わったと理解している。

軒丸瓦には梅鉢紋と巴紋の両者がある。軒平瓦は唐草紋が主体であるが、中心飾りに梅鉢紋を配置するものがある。

瓦溜りの新旧

今回検出の瓦溜りは７個所であり、これらは３時期に区分される。

１．Ⅲ期：伽藍瑞龍期。瓦溜りＳＵ06、燻し瓦のみで構成されているものである。
　江戸時代後期頃と推定される。

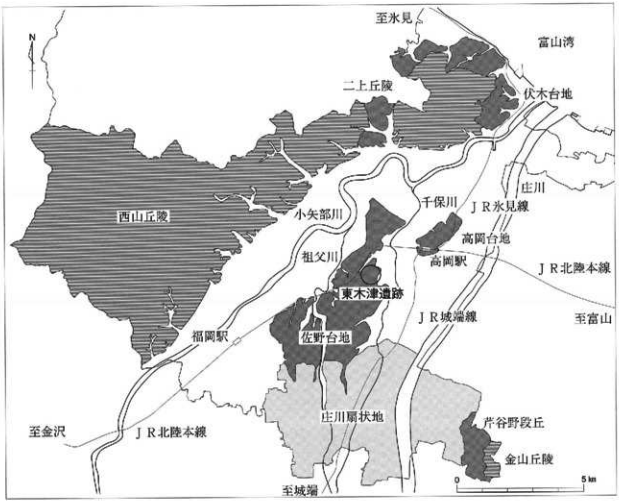
２．Ⅲ～Ⅳ期：伽藍瑞龍期～近代瑞龍寺期。瓦溜りＳＵ03・04・05・07、燻し瓦と釉薬瓦の両者からなるものである。明治時代の整地層の下から検出されたもので、江戸時代末期～明治時代初期頃に形成されたと推定している。

３．Ⅳ期：近代瑞龍寺期。ＳＵ01・02、燻し瓦と釉薬瓦の両者からなるものである。明治時代の整地層を掘り込んで形成されており、Ⅳ期でもⅣ－２期＝大正初め～昭和戦前期頃と推定している。

瓦の廃棄

瑞龍寺において多量に瓦が廃棄された時期として次の２時期が想定される。延享３年（1746）に浴室から出火した火災により、山門・禅堂・浄頭等が焼失した時、そして文久３年（1863）に総門・法堂が柿葺きに替えられた時である。前記の「１」は延享４年に、「２」は文久３年に関係する可能性がある。

2．東木津遺跡、吉岡地区



第19図　東木津遺跡位置図〔1〕（1／15万）

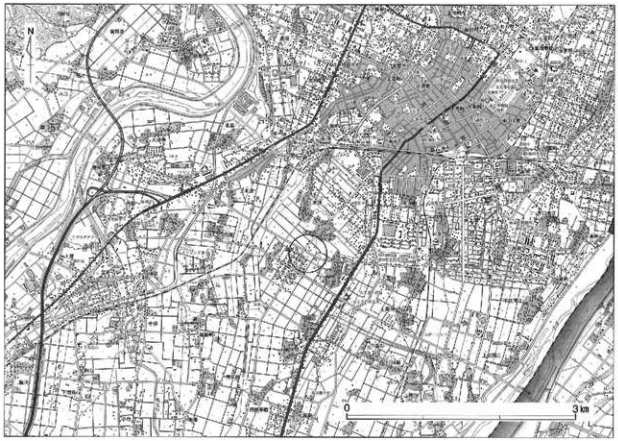
東木津遺跡吉岡地区、目次

Ⅰ 序　　説 ……27

Ⅱ 遺　　構 ……30
1．掘立柱建物址 ……30
2．土坑 ……31
3．溝 ……31
4．畝状遺構 ……33
5．鍛冶関連遺構 ……34
6．遺物包含層 ……34

Ⅲ 遺　　物 ……36
1．古墳時代の土器類 ……36
2．奈良・平安時代の土器類 ……36
3．中世の土器類 ……37
4．近世の陶磁器 ……37
5．木製品 ……37
6．土製品 ……37
7．鍛冶関連遺物 ……38
8．石製品 ……38
9．植物遺存体 ……38

Ⅳ 結　　語 ……39



第20図　東木津遺跡位置図〔2〕（1／5万）

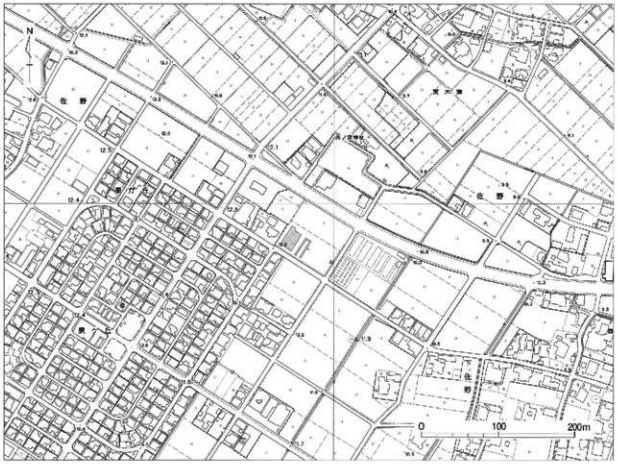
Ⅰ 序　　説

遺跡概観

東木津遺跡は、庄川扇状地の扇端部に位置し、千保川、祖父川の侵食によって段丘化した佐野台地の北東端部に立地する。遺跡周辺の標高は10～11mを測る。

佐野台地は、弥生時代中期～平安時代前期の遺跡が集中する地域で、多くの墳墓や集落跡が検出されている。本遺跡から北西約１kmに位置する石塚遺跡「91林地区」「97都市計画道路地区」では古墳時代初頭の前方後方墳を中心とする石塚古墳群が検出されている。本遺跡では、「07今井１地区」で古墳時代前期を主体とする土坑群が検出されており、土器の良好な一括資料が得られている。

奈良・平安時代については、整然とした建物配置や、土器に占める食膳具の比率の高さ、木簡・墨書土器・漆紙文書など文字資料の多さから官衙的性格が指摘されている。集落内を流れる溝では、人形・馬形・鳥形・琴柱形・刀子形・斎串などの木製祭祀具を使用した律令祭祀が行われている。また、近年の調査では建物址など居住に関わる遺構以外に、「06市道拡幅地区」で検出された木製祭祀具の工房址や、「07今井地区」以南で検出されている多数の畝状遺構など生産に関わる遺構が発見されている。畝状遺構については、切り合いや軸方位によって３期の変遷が考えられており、集落内における畑の占有面積が時間を経るにつれて徐々に拡大していく様子が明らかになってきている。



第21図　東木津遺跡吉岡地区位置図（１／5,000）

調査に至る経緯

吉岡四良氏所有の高岡市佐野891－1の水田が２筆に分割され、開発工事が計画された。吉岡氏及び仲介の関口不動産と協議して、計画が具体化した地区から順次試掘調査を実施するに至った。

１．吉岡１地区、高岡市佐野891－３、店舗建設、調査対象面積499㎡、発掘調査面積108㎡

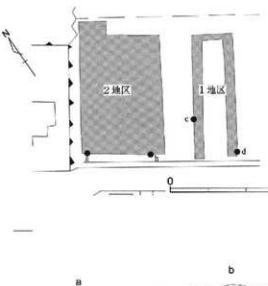
２．吉岡２地区、高岡市佐野891－１、店舗建設、調査対象面積929㎡、発掘調査面積475㎡

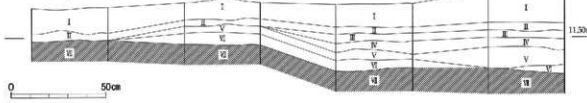
調査経過

調査は平成20年４月２日から実施した。調査地区名は東から、１・２地区とした。調査は遺構確認を原則とし、土坑ＳＫ20、溝ＳＤ14・15・20など主要な遺構は一部掘り下げを行った。また、両地区とも重機を用いて表土のみを掘削し、それ以下の層については人力による掘り下げを行った。１地区から調査を行い、Ⅰ～Ⅶ層までの層位があることを確認した。１地区の現地調査は４月16日で終了した。２地区の調査は６月４日から開始した。２地区では５ｍ×５ｍのグリッドに即して、一部を掘り残し掘削を進めることとした。最後に航空写真撮影を行い、７月４日に現地における調査を終了した。

基本層序

第Ⅰ層から第Ⅶ層を検出した。第Ⅰ層は表土で、現代の水田耕作土である。第Ⅱ層は灰色砂質土で、現代の水田の床土である。第Ⅲ層は褐灰色土で少量の砂が混じる。遺構は検出されなかったが、中・近世の遺物が少量出土した。第Ⅳ層は黒褐色土で少量の炭化物を含み、大量に奈良時代～平安時代前期の遺物が出土した。その他、古墳時代、中世の遺物も少量出土している。第Ⅴ層は褐灰色土で、第Ⅳ層と同様、奈良時代～平安時代前期を中心とした土器類と共に鍛冶関連遺物が多く出土した。また、古墳時代の土師器が少量出土している。第Ⅵ層は黒褐色土で、第Ⅶ層ブロックを多量に混入する。第Ⅶ層へと至る漸移層と考えられる。第Ⅶ層は黄色砂質土で地山層と考えられる。本調査地区の地形は第22図に示すように、東に行くにつれ標高が低くなる。ａ～ｄ地点で共通して検出された第Ⅶ層については最大で30㎝の高低差が認められた。１地区では全域でⅢ～Ⅶ層が検出されたのに対し（基本層序ｃ・ｄ）、２地区の西側では表土直下で第Ⅶ層（基本層序ａ）が検出されている。そのほか、２地区では東側で一部第Ⅳ層が検出されているほかは表土直下で第Ⅴ層（基本層序ｂ）が検出されている。旧地形の高低差により層位の遺存状態における差が生じていると推測される。遺構は近世については第Ⅲ層から第Ⅳ層、それ以前については第Ⅵ層で検出された。





第22図　東木津遺跡吉岡地区　基本層序（１／20）

検出遺構

検出遺構は掘立柱建物址５棟（ＳＢ05～09）、土坑189基（ＳＫ20～26）、溝20条（ＳＤ13～25）、畝状遺構（ＳＮ02・03）、鍛冶関連遺構（ＳＸ01）１基、ピット77基である。遺構番号は今井地区からの通番を付した。各地区の遺構数は次のとおりである。

〔１地区〕土坑９基（ＳＫ20・21）
溝10条（ＳＤ13～17）
畝状遺構（ＳＮ03）
鍛冶関連遺構１基（ＳＸ01）
ピット９基

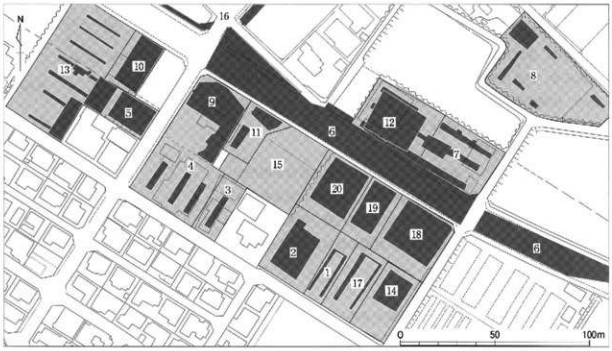
〔２地区〕掘立柱建物址５棟（ＳＢ05～09）
土坑180基（ＳＫ22～26）
溝10条（ＳＤ18～25）
畝状遺構（ＳＮ02・03）
ピット68基

出土遺物

土器類：土師器、須恵器、珠洲、近世陶磁器
土製品：円面硯、鞴羽口、土錘
木製品：部材、板状品、棒状品
鉄製品：釘
鍛冶関連遺物：椀形滓、鍛冶滓、炉壁、鍛造剥片、再結合滓、粒状滓
石製品：石硯、棒状石製品、砥石
植物遺存体：炭化米

グリッド

調査地区のグリッドは世界測地系の平面直角座標系（原点は北緯36° 00′ 00″、東経137° 10′ 00″）に合わせた。東西をＸ軸とし、南北をＹ軸とした。グリッド左下隅の数値がそのグリッドを表す。Ｘ＝１、Ｙ＝１の地点は、原点より西へ15.575km、北へ80.915km向かった位置である。一辺５ｍ四方を一区画とし、グリッドを割り付けメッシュを表示した。



第23図　東木津遺跡吉岡地区　周辺の調査地区（１／2,000）

1．08吉河１地区　2．08吉岡２地区　3．08町田地区　4．08魯橋地区　5．97丹波地区　6．98都市計画道路地区　7．98月宮地区　8．99黒井地区　9．99チックタック池区　10．99セーブオン池区　11．00丹波地区　12．00山崎地区　13．02島宇地区　14．03岡口地区　15．04第一住建地区　16．06市道拡幅地区　17．06泉が丘内科クリニック地区　18．07今井１地区　19．07今井２地区　20．07今井３地区

Ⅱ 遺　構

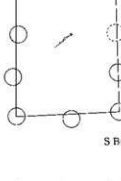
1．掘立柱建物址

2地区において5棟の掘立柱建物址を検出した。これらの建物址はいずれも調査地区内において標高の高い位置（11.40～11.48m）に立地することで共通する。ＳＢ05～07は主軸方位が一致しており、既往の調査で検出された掘立柱建物址ともほぼ一致する。ＳＢ08・09については主軸方位がそれらとは異なっている。

掘立柱建物址ＳＢ05

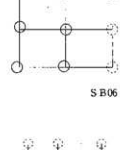
2地区で検出された。溝ＳＤ21と重複し本遺構が新しい。桁行3間、梁間2間の側柱建物で、主軸方位はＮ－50°－Ｗを示す。柱穴は隅丸長方形、不整円形を呈し、規模は70cm×55cm～1.62m×94cm、柱間距離は桁行2.50m～2.80m、梁間2.24m×2.96mである。

Ｐ4・Ｐ6について掘削を行ったところ、両ピットとも柱の抜き取り痕が断面において観察された。Ｐ4の深さは39cm、Ｐ6は64cmである。Ｐ6については、底面から板状品・部材・棒状品（2501～2505）が折り重なった状態で出土した。これら木製品の出土位置がセクションにおける柱痕の位置とほぼ一致することから礎板として使用したものと考えられる。そのほかＰ6では、底面から須恵器蓋が、覆土中から土師器甑（2205）が出土した。



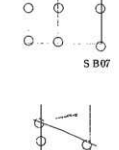
掘立柱建物址ＳＢ06

2地区で検出された。調査地区外にかかるため全容は不明だが、桁行3間、梁間2間の総柱建物と考えられる。主軸方位はＮ－50°－Ｗを示す。柱穴は隅丸長方形を呈し、規模は73cm×45cm～95cm×55cmで、柱間距離は桁行1.9m～2.0m、梁間2.4mである。Ｐ4・5から須恵器杯（2216・2219）が出土した。



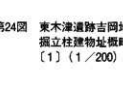
掘立柱建物址ＳＢ07

2地区で検出された。調査地区外にかかるため全容は不明だが、桁行4間、梁間1間の側柱建物と考えられ、南西側に庇を有する。主軸方位はＮ－50°－Ｗを示す。柱穴は不整円形、不整四角形を呈し、規模は45cm×45cm～50cm×45cm、柱間距離は桁行で1.95m～2.0m、梁間2.35mを測る。



掘立柱建物址ＳＢ08

2地区で検出された。掘立柱建物址ＳＢ05と重複し本遺構が新しい。調査地区外にかかるため全容は不明であるが、桁行2間以上、梁間1間の側柱建物と考えられる。主軸方位はＮ－75°－Ｗを示す。柱穴は隅丸長方形、不整円形を呈し、規模は45cm×35cm～65cm×40cmである。柱間距離は桁行で1.2m、梁間2.45mである。

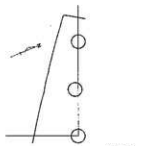


第24図　東木津遺跡吉岡地区
掘立柱建物址概略図
〔1〕（1／200）

掘立柱建物址ＳＢ09

2地区で検出された。調査地区外にかかるため全容は不明である

が桁行３間以上、梁間１間以上の掘立柱建物と想定される。主軸方位はＮ－66°－Ｗを示す。柱穴は隅丸長方形、不整円形を呈し、規模は45cm×40cm～65cm×60cmである。柱間距離は桁行で1.6m～1.7mである。



ＳＢ09

第25図　東木津遺跡吉岡地区掘立柱建物址概略図（2）（1／200）

2．土坑

190基の土坑を検出したが、主要な７基について記す。土坑ＳＫ23は第Ⅴ層、ほかの６基は第Ⅵ～Ⅶ層で検出された。

土坑ＳＫ20

１地区２号トレンチで検出された。土坑ＳＫ21と重複し、本遺構が古い。長軸90cm以上、短軸59cmの隅丸長方形を呈すると考えられる。深さは27cmである。長軸方位はＮ－93°－Ｗを示す。覆土中からは土師器、須恵器杯（2127・2132）・蓋（2137）のほか、輪羽口（2701・2702）や椀形滓といった鍛冶に関連した遺物が多く出土している。また、廻設土を洗浄したところ、鍛造剥片や粒状滓（図版47）を検出した。そのほか、炭化米（図版47）等、植物の種子も検出されている。

土坑ＳＫ21

１地区２号トレンチで検出された。土坑ＳＫ20と重複し、本遺構が新しい。長軸66cm、短軸56.5cmの楕円形を呈する。長軸方位はＮ－79°－Ｗを示す。底面付近から土師器杯、須恵器蓋（2139）が出土している。

土坑ＳＫ22

２地区の北東部で検出された。長軸82cm、短軸60cm以上の不整円形を呈すると考えられる。深さは18cmで、長軸方位はＮ－13°－Ｅを示す。遺物は確認面から長さ４cm～17cmほどの木炭が出土している。また、覆土中から須恵器杯・杯蓋・甕が出土している。

土坑ＳＫ23

２地区の北東部で検出された。長軸78cm以上、短軸38cm以上の不整長方形を呈すると考えられる。深さは２cm～３cmである。底面からは18cm×12cmの範囲で焼土が確認された。遺物は覆土中から土師器甕が出土している。

土坑ＳＫ24

２地区の北端部で検出された。長軸46cm以上、短軸42cmの方形を呈すると考えられる。未掘削のため深さは不明である。遺物は確認面から須恵器杯（2215）が出土している。

土坑ＳＫ25

２地区の南部中央付近で検出された。溝ＳＤ20と重複し、本遺構が古い。長軸1.23m以上、短軸86cm以上の不整長方形を呈すると考えられる。未掘削のため深さは不明である。遺物は確認面から須恵器杯（2210）が出土している。

土坑ＳＫ26

２地区の中央部東側で検出された。長軸1.56m、短軸1.03mの長方形を呈する。長軸方位はＮ－60°－Ｅを示す。未掘削のため深さは不明である。遺物は確認面から灰釉陶器皿（2243）が出土している。

3．溝

20条の溝を検出したが、主要な13条について記す。溝ＳＤ13～16及び、溝ＳＤ17・21・22は走行方向が

ほぼ一致していることから併走すると思われる。また、溝ＳＤ13～15については２号トレンチにおいて遺構プランが検出されなかったことから、途中で終息するか折れ曲がるものと推測される。

溝ＳＤ13

１地区１号トレンチで検出された。Ｎ－59°－Ｗの方位に走向し、規模は上幅48cm～50cmである。深さは未掘削のため不明である。

溝ＳＤ14

１地区１号トレンチで検出された。Ｎ－57°－Ｗの方位に走向し、上幅72cm、下幅34cm、深さ44cmである。断面形状は箱形を呈する。土師器甕（2102）、須恵器杯（2105・2113・2116～2118）・蓋（2135・2140）・瓶（2149）が出土した。

溝ＳＤ15

１地区１号トレンチで検出された。Ｎ－60°－Ｗの方位に走向し、上幅1.55m～1.66m、下幅68cm、深さ42cmである。断面形状は弧状を呈する。

溝ＳＤ16

１地区１・２号トレンチで検出された。鍛冶関連遺構ＳＸ01と重複し本遺構が古い。また、Ｎ－54°－Ｗの方位に走向し、２号トレンチにおいて溝ＳＤ17と直交する。両溝に新旧関係は認められず、底面の標高も11.24m～11.28mとほぼ一致することから同時期に機能していたと考えられる。深さは26cmである。

溝ＳＤ17

１地区２号トレンチで検出された。Ｎ－26°－Ｅの方位に走向し、上幅80cm、下幅44cm、深さ29cmである。断面形状は弧状を呈する。須恵器杯（2124）が出土している。

溝ＳＤ18

２地区の北東部で検出された。Ｎ－28°－Ｗの方位に走向し、上幅73cm～84cm、下幅24cm、深さ34cmである。断面形状は逆台形を呈する。遺物は須恵器杯（2233）・壺（2242）が出土している。

溝ＳＤ19

２地区の南東端部で検出された。南北方向から東西方向へ屈曲し、その屈曲部から北西へ５mほどいったところで再び南北方向に屈曲する。上幅74cm～1.16m、下幅28cm、深さは32cmである。断面形状は弧状を呈する。遺物は土師器壺・甕、須恵器杯・杯蓋・甕が出土している。

溝ＳＤ20

２地区の南端部で検出された。Ｎ－32°－Ｅの方位に走向する。上幅56cm～1.04m、下幅36cm、深さ52cmである。断面形状は逆台形を呈する。遺物は須恵器杯（2226）が出土している。

溝ＳＤ21･22

２地区の南西部に位置し、1.9m～2.9mの間隔を保って併走する２条の溝である。溝ＳＤ21はＮ－21°－Ｅの方位に走向する。掘立柱建物址ＳＢ07・08と重複し、本遺構が古い。上幅55cm～62cm、下幅24cm、深さ16cmである。断面形状は逆台形を呈する。また、溝ＳＤ23と直交し平面プランで切り合い関係が認められなかった。このことから溝ＳＤ21と溝ＳＤ23は同時に機能していた可能性が考えられる。溝ＳＤ22はＮ－16°－Ｅの方位に走向する。溝ＳＤ24と重複し、本遺構が古い。上幅54cm～70cm、下幅50cm、深さ12cmである。断面形状は弧状を呈する。遺物は溝ＳＤ21からは土師器甕、須恵器甕・瓶が、溝ＳＤ22からは製塩土器（2206）のほか、須恵器杯などが出土している。

溝ＳＤ23

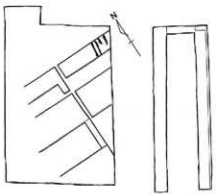
２地区の南西部をＮ－65°－Ｗの方位に走向し、溝ＳＤ21に直交する。上幅は86cmである。未掘削のため深さは不明である。遺物は出土していない。

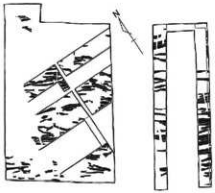
溝ＳＤ24・25

２地区の南西部から北東部にかけて検出された２条の溝である。25cm～1.23mの間隔を保って併走する。Ｎ－17°－Ｅの方位に走向し、調査区北側でＮ－68°－Ｗの方位へ向きを変える。溝ＳＤ24は溝ＳＤ22、掘立柱建物址ＳＢ05・06と重複し、本遺構が新しい。上幅78cm～1.26m、下幅50cm、深さ17cmである。断面形状は弧状を呈する。溝ＳＤ25は掘立柱建物址ＳＢ06と重複し、本遺構が新しい。上幅56cm～1.06m、下幅76cm、深さ12cmを測る。断面形状は弧状を呈する。掘削した範囲において、少なくとも溝ＳＤ24は６回、溝ＳＤ25は４回の部分的な掘り直しが認められる。堆積土は両溝とも自然堆積で、流水の形跡が認められた。また、溝底面の標高は東へ行くにつれて11.43m～11.26mと低くなっており、南西から東へ向かって流水があったと考えられる。遺物は両溝から奈良・平安時代、中世、近世の遺物が多量に出土している。溝ＳＤ24からは土師器鍋（2203）、緑釉陶器（2244）、珠洲（2302・2310）、越中瀬戸（2401）が、また、溝ＳＤ25からは須恵器杯（2229・2230）が出土しているほか、肥前磁器など近世陶磁器が多く出土している。

４．畝状遺構

北側に接する「07今井地区」の報文では、検出された遺構の変遷についてその切り合い関係から４段階の変遷案が示されている。畝状遺構については、最も古い段階のものを北東から南西方向に走行する畝状遺構ＳＮ01、次の段階を南北方向に走行する畝状遺構ＳＮ02、最終段階を北西・南東方向に走行する畝状遺構ＳＮ03とし、畝の走行方向の相違と切り合い関係から３段階の変遷（ＳＮ01→02→03）を経ることが指摘されている。今回の調査では、畝状遺構ＳＮ02・03に相当する畝状遺構が検出された（第26図）。畝状遺構ＳＮ02と畝状遺構ＳＮ03での切り合いは検出されなかったが、ここでは前に示された変遷案と同様の変遷を経ることを前提としている。なお、畝状遺構ＳＮ01については今回の調査では検出されていない。





第26図　東木津遺跡吉岡地区
畝状遺構検出状態　（１／600）

畝状遺構ＳＮ02

２地区北東部で検出された。南北方向に走行し、幅は12cm～40cm、長さ1.1m～2.5m以上である。溝ＳＤ18と重複し本遺構が古い。遺構の規模は「07今井地区」と比較すると小規模であるが、畝の走行方向からＳＮ02と判断した。遺物は須恵器杯・杯蓋・壺・甕が出土している。

畝状遺構ＳＮ03

１・２地区の広い範囲で検出されている。特に標高の低い箇所に多く検出され、逆に標高の高い箇所ではあまり検出されない傾向がある。北西・南東方向に走行し、溝の規模は幅10cm～50cm、長さ60cm～5.4mである。遺物は須恵器杯（2213・2223～2225・2228）、杯蓋（2235）などが出土している。

5．鍛冶関連遺構

鍛冶関連遺構ＳＸ01

１地区１号トレンチ南西部で検出された。溝ＳＤ16と重複し本遺構が新しい。調査区外に範囲が及ぶため全容は不明である。長軸4.3m以上、深さ24.0cmである。埋没土中に炭化物を大量に含んでいる。鉄滓が出土したため、遺構覆土を洗浄したところ、鞴羽口の小片と、少量の鍛造剥片が検出された。そのほか、土師器杯・甕、須恵器杯（2112・2115・2121）、杯蓋・甕などが出土している。

6．遺物包含層

１～２地区において古代の遺物が大量に出土する層（基本層序第Ⅲ～Ⅵ層）を検出した。当遺跡ではこれまでの調査成果から、当地区で検出されたような層が堆積している箇所があることが判明しており、遺構の多くがこれらの層より下で検出されている。１地区では全域で第Ⅲ～Ⅵ層が検出された。１号トレンチ北側と３号トレンチはⅣ層上面まで、ほかはⅦ層まで掘削を行っている。２地区では表土直下でⅤ～Ⅶ層を検出した。本調査地区でⅤ層が検出された箇所については公共座標に即した５ｍ×５ｍのグリッドを原則とし、南北に５ｍ毎に掘削を行った。層位別の土器分類については第27図に、器種別の出土量については第１表に重量で示した。なお、第27図の「○」は出土遺物有り、「－」は出土遺物無しを示す。また、Ⅵ～Ⅴ・Ⅵ～Ⅳ・Ⅴ～Ⅳ・Ⅳ～Ⅲ層については各層位間で接合したものも含む。

器種 / 単位	杯Ａ	杯Ｂ	杯	杯蓋	皿盤	甕・壺・鉢類	土師器	古墳時代土師器	中世陶器
Ⅵ層	593	162	102	133	506	2172	1916	500	－
Ⅵ～Ⅴ層	954	251	616	95	354	1975	2490	179	－
Ⅵ～Ⅳ層	159	28	〃	〃	〃	333	〃	〃	〃
Ⅴ層	1220	385	354	883	740	4330	2479	1011	106
Ⅴ～Ⅳ層	205	18	147	386	81	167	466	112	－
Ⅳ層	929	1002	726	2396	70	4133	1744	1789	685
Ⅳ～Ⅲ層	－	－	5	24	－	131	22	14	102
Ⅲ層	689	26	26	21	－	24	86	135	40

第１表　東木津遺跡吉岡地区　層位別土器出土量（単位：g）

Ⅵ層：黒褐色土でⅦ層ブロックを多く含む。東木津遺跡で検出される遺構の多くは本層位における検出となる。Ⅳ・Ⅴ層と同様に古代の遺物が大量に出土した。そのほか、古墳時代の遺物や鍛冶関連遺物、石硯（2801）が１点出土しているほか、パステル形石製品に類似した滑石製の棒状品（2802・2803）が２点出土している。中世の遺物は本層位から出土していない。

Ⅵ～Ⅴ層：出土状態がⅥ～Ⅴ層にまたがるもの及び、Ⅵ層とⅤ層で接合関係にあるものを示す。本層位間での接合率が最も高い。

Ⅵ～Ⅳ層：Ⅵ～Ⅳ層出土のもので接合したものを示す。甕（2152）は他の土器との接合関係から比較すると広範囲から出土している。

Ⅴ層：褐灰色土で２地区の標高11.45m～11.56m付近より低い箇所で検出された。Ⅳ層と同様、古代の遺物が大量に出土しているほか、珠洲が１点出土している。珠洲が出土するのは本層位までで、これ以下の層では１点も出土していない。ただし、本層位からの出土も１点のみであるため、遺構覆土に紛れた混入品の可能性も考慮される。そのほか、鞴羽口や鉄滓など鍛冶関連遺物が多く出土している。

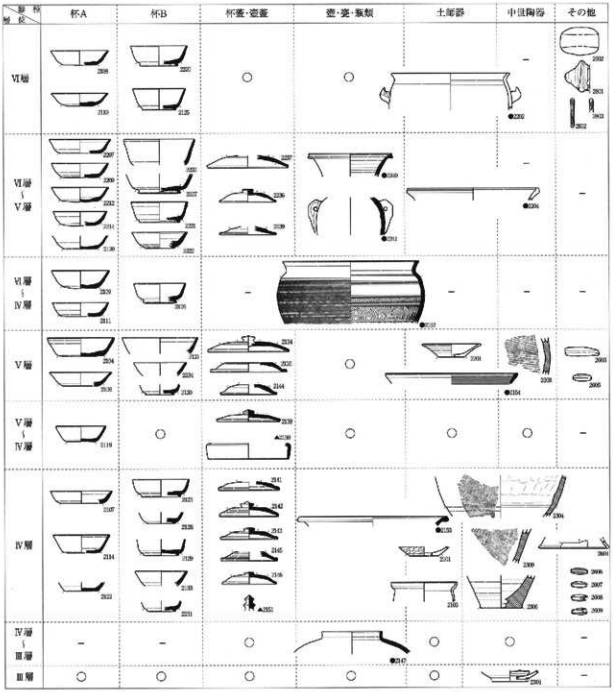
Ⅴ～Ⅳ層：出土状態がⅤ～Ⅳ層にまたがるもの及び、Ⅴ層とⅣ層で接合関係にあったものを示す。

Ⅳ層：黒褐色土で少量の炭化物を含む。１地区では全域で、２地区では北東部のみで検出された。古代の遺物が大量に出土しているほか、古墳時代の土師器、珠洲などが出土している。珠洲の出土量は本層位

が最も多い。そのほかⅤ・Ⅵ層と同様、鉄滓など鍛冶に関連した遺物が少量出土している。また、円面硯(2601)や土錘（2606～2609）といった土製品も本層位から最も多く出土した。

Ⅳ～Ⅲ層：出土状態がⅣ～Ⅲ層にまたがるもの及び、Ⅳ層とⅢ層で接合関係にあったものを示す。図示していないが、珠洲が２点出土している。

Ⅲ層：褐灰色土で若干の砂が混じる。１地区では全域で検出されたが、２地区では検出されていない。Ⅳ～Ⅵ層と比較すると量的に少ないが、古墳時代、古代の遺物が出土している。そのほか、中・近世の遺物(2301)も出土している。近世の遺物に関しては、遺構出土のものを除けば本層位のみの出土である。



第27図　東木津遺跡吉岡地区　層位別土器分類（１／８、●は１／10、▲は壺蓋）

Ⅲ 遺　　物

1．古墳時代の土器類

Ⅲ～Ⅵ層及び遺構覆土から古墳時代の土師器が出土している。いずれも小片で図示していない。器種は高杯、鉢、壺、器台、甕である。

2．奈良・平安時代の土器類

土師器

図面45・47－2101～2103、2201～2205。計８点を図示した。１地区は杯１点、甕１点、鍋１点を図示した。杯（2101）は内外面を赤彩している。体部は手持ちヘラ削り、底部は回転ヘラ削りである。2102は甕で頸部外面にカキ目、2103は鍋で内外面横ナデを施す。２地区は皿１点、甕１点、鍋２点、甑１点を図示した。2201は体部が直線的に開き、底部は回転糸切り無調整である。2202は甕で把手が付く。2203・2204は鍋である。2203は内外面にカキ目を施す。2204は内外面とも横ナデを施す。2205は胴部下位から底部が残存しており、その形状から甑とした。底部は外側へ裾拡がりの形態となる。底部中央から末端部は不明であるが、底部中央に大きく穴が開く形態と想定した。胴部下位の内面は刷毛目、外面は粗いカキ目状の調整痕が確認できる。

製塩土器

図面47－2206。溝ＳＤ22から出土した。被熱しており表面がもろい。底部は尖底と考えられる。体部外面はナデ調整で指圧痕が見られる。内面は縦位の刷毛目調整である。

須恵器

計87点を図示した。器種は杯、杯蓋、瓮蒸、甕、瓶、甕がある。

杯Ａ：図面45・47－2104～2122、2207～2218。杯Ａは31点を図示した（１地区19点、２地区12点）。口径は14.0cm（2104）～10.4cm（2119）である。底部はヘラ切り無調整を原則とする。2122・2217の底部は回転糸切り無調整である。2118は口縁端部に油煙が付着している。2112・2117・2118・2122は胎土に骨針を含む。

杯Ｂ：図面45～48－2123～2133、2219～2234。杯Ｂは27点を図示した（１地区11点、２地区16点）。口径は15.8cm（2131）～10.8cm（2126・2133）である。2230は稜杯である。底部はヘラ切り無調整が大半を占めるが、2227は手持ちヘラ削り調整、2229はヘラ削り調整を施す。2227は底部内面にナデ調整を施す。2229は体部に手持ちヘラ削り調整を施す。2130・2228の内面には漆が付着している。2234のL1縁端部には油煙が付着している。2120は胎土に骨針を含む。

杯蓋：図面46・48－2134～2146、2235～2239。杯蓋は18点を図示した（１地区13点、２地区５点）。口径は17.0cm（2134）～11.0cm（2238）である。摘みは2138・2142・2143・2146・2235が宝珠形、2139・2236がボタン状である。天井部はヘラ切りが大半を占めるが、2134は回転ヘラ削り調整、2141・2142・2237・2238はヘラ削り調整を施す。天井部内面にナデを施すのは2134・2135・2143・2237である。また、細片のため図示でいなかったが端部に返りのある蓋が３点、体部外面にヘラ書きのある蓋が１点出土している。

壺：図面46・48－2147～2149、2240～2242。壺は６点を図示した（１地区３点、２地区３点）。2147は短頸壺の口縁部から胴部、2148は甕の口縁部、2149は甕もしくは瓶の口縁部である。2241は凸帯付双耳瓶の胴部、2242は脚台部である。2147は外面に、2240は内面、2148は内外面に自然釉が付着している。

壺蓋：図面46－2150・2151。2150は天井部下端に１条の沈線が巡る。2151は二重宝珠の摘みである。

甕：図面46－2152～2154。甕は３点を図示した。いずれも１地区からの出土である。2152は口縁部～体部片で屑部外面には４条の沈線が巡る。内面はカキ目による調整を施す。2153は大型の甕の口縁部である。2154は内面にカキ目を施す。

灰釉陶器：図面48－2243。土坑ＳＫ26から出土した１点を図示した。器種は皿で底部はヘラ削り後ナデ調整を施している。内面には重ね焼き痕が見られる。灰釉は内面にのみ施釉する。

緑釉陶器：図面48－2244。溝ＳＤ24から出土した。遺構に伴うものではなく、混入品と考えられる。器種は皿で焼成は軟質である。

３．中世の土器類

中世の土器は11点を図示した（１地区５点、２地区６点）。2301以外は全て珠洲である。

白磁：図面49－2301。遺物包含層第Ⅲ層から出土した皿である。見込みには重ね焼き痕が見られる。底部外面には墨書が見られる。13世紀の所産である。

珠洲：図面49－2302～2311。2302・2303は擂鉢である。2304・2305は壺の胴部、2306は壺の底部である。2307～2311は甕で、2307は口縁部、他は胴部である。また、2304・2306・2308・2310・2311は胎土に骨針を含む。

４．近世の陶磁器

溝ＳＤ24・25及び基本層序第Ⅱ層から肥前陶磁器、越中瀬戸などが出土している。

図面49－2401・2402。近世の陶磁器は溝ＳＤ24から出土した２点を図示した。いずれも越中瀬戸で、外面及び見込みの体部上半に鉄釉が施釉されている。2402は底部外面に煤が付着している。

５．木製品

図面50－2501～2505。掘立柱建物址ＳＢ05のＰ６から出土した礎板と考えられる木製品である。「98都市計画道路地区（ＳＢ09・10）」、「02烏字地区（ＳＢ６）」でも礎板と考えられる板状の木製品が掘立柱建物址の柱穴から出土している（第31図）。2501～2503は板状品で両端の加工痕が顕著である。また、2501・2502については幅が24.4cmと同じであることから同一の木材を切って使用したものと考えられる。2504は側面に加工痕が顕著で、その形状から柱などの建築部材を礎板として転用した可能性が考えられる。2505は棒状品で両端部に加工痕が見られる。それぞれ大きさは2501が39.7cm×24.4cm×5.2cm、2502が33.5cm×24.4cm×4.3cm、2503が35.2cm×15.7cm×8.6cm、2504が15.2cm×14.8cm×7.0cm、2505が34.3cm×4.4cm×4.2cmである。

６．土製品

円面硯：図面51－2601。円面硯の脚台部である。透かしの幅は７cm以上で、外面には自然釉がかかっている。

土錘：図面51－2602～2609。1・2地区の基本層序第Ⅳ～Ⅵ層から出土している。法量は2602が6.2cm×4.4cmで孔径1.7cm、重量96ｇ、2603が5.5cm×1.4cmで孔径0.35cm、重量12ｇ、2604が4.1cm×1.2cmで孔径0.45cm、重量5ｇ、2605が2.95cm×1.1cmで孔径0.35cm、重量3ｇ、2606が2.6cm×0.95cmで孔径0.3cm、重量2ｇ、2607が2.5cm×0.95cmで孔径0.4cm、重量2ｇ、2608が2.6cm以上×1.0cmで孔径0.4cm、重量2ｇ、2609が2.4cm以上×1.05cmで孔径0.4cm、重量2ｇである。これらは法量から大型品（2602）、中型品（2603・2604）、小型品（2605～2609）に分類される。

7．鍛冶関連遺物

土坑ＳＫ20、鍛冶関連遺構ＳＸ01及び、1・2地区の基本層序第Ⅳ・Ⅴ層から鍛冶関連遺物が出土している（第30図・第2表）。土坑ＳＫ20及び鍛冶関連遺構ＳＸ01については覆土を採取し水洗いを行った。土坑ＳＫ20では鍛造剥片1ｇ、再結合滓1ｇ、粒状滓2ｇ、輸羽口（2701・2702）2点以上（712ｇ）、炉壁574ｇが検出された。また、炉壁（図版47）はガラス質化が著しく、石英などの鉱物を大量に含む。鍛冶関連遺構ＳＸ01では輸羽口の小片（12ｇ）、椀形滓1点（118ｇ）が出土した。そのほか、基本層序第Ⅳ～Ⅵ層から鍛冶滓345ｇ、椀形滓（2703～2706）4点（162ｇ）、輸羽口3点以上（195ｇ）、炉壁（図版47）133ｇが出土している。

輸羽口：図面51－2701・2702。土坑ＳＫ20の覆土から出土している。法量は2701が残存部で7.4cm×8.4cmで孔径は3.8cm、重量215ｇである。全体的にガラス質化が著しい。先端部には木口状の工具の痕が見られる。2702は残存部で8.0cm×7.4cmで孔径は2.6cm、重量169ｇである。先端部は黒色化が著しい。また、熱変性による色調の違いからおよそ83°の角度で炉体に装着されていたことが想定される。

椀形滓：図面52－2703～2706。1・2地区の遺物包含層第Ⅳ・Ⅴ層からの出土である。いずれも炉底の形状を良好に留めている。2703は7.8cm×5.8cm×2.75cmで重量は83ｇ、2704は7.1cm×5.45cm×3.1cmで重量119ｇ、2705は4.8cm×4.7cm×2.6cmで重量55ｇ、2706は4.4cm×3.2cm×2.3cmで重量26ｇである。

8．石製品

石硯：図面52－2801。遺物包含層第Ⅵ層から出土している。法量は残存部で5.1cm×4.1cm×2.0cmで重量29ｇである。

棒状石製品：図面52－2802・2803。基本層序第Ⅵ層から出土している。形態的には縄文時代などに出土例がみられるパステル形石製品に類似する。石材は2点とも滑石製である。2802は4.6cm×0.5cm×0.5cmで重量3ｇ、2803は欠損しており、残存部で1.85cm×0.6cm×0.5cmで重量1ｇである。

砥石：図面52－2804・2805。1・2地区の基本層序第Ⅳ層から出土している。砥石、もしくは磨り石と考えられる。2804は被熱している。3面残存しており、全ての面が平滑である。法量は残存部で6.7cm×5.4cm×3.7cmで重量163ｇである。2805は表裏2面が平滑である。両面とも磨痕が多く見られる。法量は残存部で5.0cm×3.8cm×1.0cmで重量28ｇである。

9．植物遺存体

土坑ＳＫ20の覆土を洗浄した際に大量の炭化物に混ざって炭化米（図版47）が30粒出土した。

Ⅳ 結　　語

1．道路址について

道路址の形態

これまでの調査成果に近年の調査成果を加えて（第28図）検討したところ、すでに確認されているものも含めて合計7条の道路址（道路1～7）と考えられる箇所が検出された（第29図）。これらの道路址は後述する区画に沿うように走向している。道路址の形態は、両側に側溝をもつもの（道路1）、溝とピット列によって区画されるもの（道路2・5・6）、ピット列のみで区画されるもの（道路4）、区画溝とピット列、またそれに沿うようにして一定幅で当該期の遺構が検出されないもの（道路3・7）など様々である。

道路1（98都市計画道路地区、98月安地区、07今井1地区）

集落の東限と考えられる南北方向の道路である。少なくとも3回の掘り直しが確認されている。道幅は1.8m～2.8mである。道路2と交差する箇所でN－15°－EからN－45°－Eへ方向が変わる。

道路2（98都市計画道路地区）

A区画とB区画の間をN－65°－Wの方位に走向する。道幅は2.6m～3.3mである。南側の側溝の西側11mはピット列によって区画されている。

道路3（99チックタック地区、00丹波地区、07今井1～3地区）

集落を東西に走向する道路と考えられる。区画溝1を境に西ではN－62°－W、東ではN－54°－Wの方位に、またチックタック地区・丹波地区ではN－48°－Wの方位に走行する。溝とピット列により区画され、道幅は3.0m～4.2mである。

道路4（98都市計画道路地区、00山崎地区）

E区画とF区画の間をN－54°－Wの方位に走向する。両側をピット列によって区画され、道幅は5.4mである。

道路5（98都市計画道路地区、07今井3地区）

F区画とG区画の間をN－48°－Wの方位に走向する。溝とピット列によって区画され、道幅は3.2mである。「98都市計画道路地区」で木製祭祀具が多量に出土した橋梁護岸施設を伴う溝へ通じる道路と考えられる。

道路6（07今井3地区）

H区画の北東部をN－32°－Eの方位に走向する道路である。区画溝1とピット列によって区画され、道幅は2.4m～3.0mである。SN03に切られていることから、その段階ではすでに道路としての機能を失っていたと考えられる。

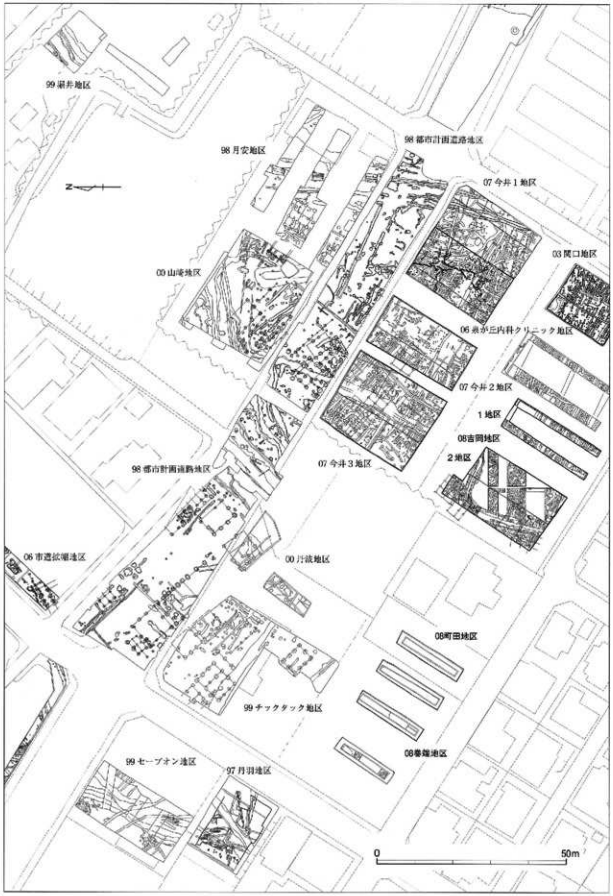
道路7（98都市計画道路地区）

J区画とK区画の東側をN－47°－Eの方位に走向する道路である。溝によって区画され、道幅は2.4m～3.0mである。

2．区画について

区画案

東木津遺跡における区画については「98都市計画道路地区」の報文中で触れられている。それによると木

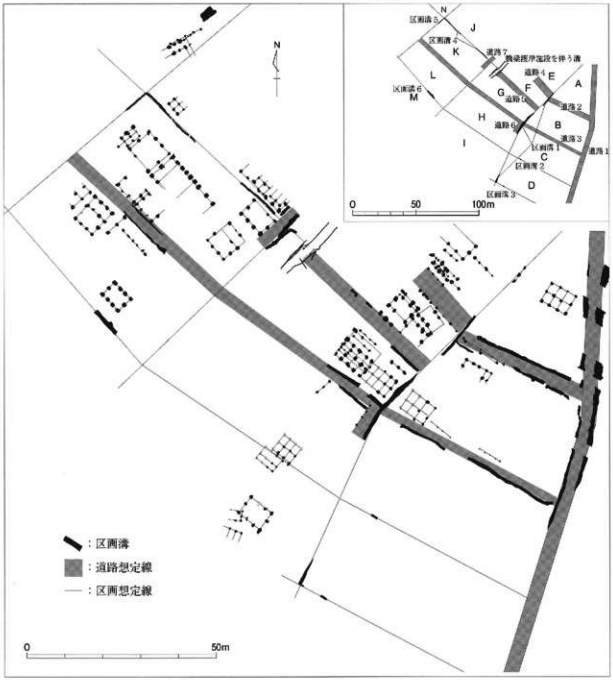


第28図　東木津遺跡　既往の主な調査地区（1／1,000）

製祭祀具が出土した橋梁護岸施設を伴う溝や、道路１及び道路２に伴う溝以外に、北東～南西及びこれに直交する状態で北西～南東方向に走向する比較的小規模な溝があることに注目し、概ねＮ－45°－Ｗの方位に約52m間隔の区割りがあったという可能性を指摘している。本調査地区で検出された溝ＳＤ13・16・17を始めとし、近年の調査ではこれらの溝と同規模の溝が多数検出されている。それらの溝と道路址による区画を勘案すると、東西に52m～54m、南北に24m～25mごとに区割りを設けている可能性が新たに考えられる。なお、区画内で検出された遺構についてＳＮ01～03は第Ⅱ章４節にある祭祀遺構を指す。

Ａ区画（98都市計画道路地区、98月安地区、00山崎地区）

東を道路１、西を区画溝１とピット列、南を道路２によって区画される。北側は未調査のため不明である。



第29図　東木津遺跡における道路・土地区画想定模式図（１／1,000）

区画内には総柱の掘立柱建物址が1棟検出されている。

B区画（98都市計画道路地区、07今井1・2地区）

東を道路1、西を区画溝1、南を道路3、北を道路2によって区画されている。区画内にはSN01～03、総柱の掘立柱建物址及び東に庇を有する掘立柱建物址がそれぞれ1棟検出されている。区画内における遺構変遷は、東に庇を有する掘立柱建物址→SN01→総柱の掘立柱建物址・SN02→SN03の順と考えられる。SN01・02が最も多く検出されている区画である。

C区画（03岡口地区、06泉が丘内科クリニック地区、07今井1・2地区）

東を道路1、西を区画溝1、北を道路3、南を区画溝2によって区画されている。区画内にはSN01・03が多数検出されている。未調査の箇所があるが現段階では建物址などは検出されていないため、当初から畑として使用されていた可能性が高い。

D区画（03岡口地区、06泉が丘内科クリニック地区、08吉岡1地区）

東を道路1、西を区画溝1、北を区画溝2、南を区画溝3によって区画されている。SN03がほぼ全面にわたって検出されている。「06泉が丘内科クリニック地区」ではSN03に切られるピット列が検出されているが、建物になるかどうかは不明である。

E区画（00山崎地区）

東を区画溝1とピット列、西を道路7あるいは橋梁護岸施設を伴う溝、南は道路4によって区画されている。北側は未調査のため不明である。側柱の掘立柱建物址1棟と、多数のピット列が検出されている。

F区画（98都市計画道路地区）

東を区画溝1、西を道路7あるいは橋梁護岸施設を伴う溝、南を道路5、北を道路4によって区画されている。側柱の掘立柱建物址2～3棟と、数条のピット列が検出されている。

G区画（07今井3地区）

東を区画溝1、西を道路7あるいは橋梁護岸施設を伴う溝、北を道路5、南を道路3によって区画されている。西に庇を有する掘立柱建物址1棟、総柱の掘立柱建物址2棟、3条のピット列が検出されているほか、SN03が検出されている。区画内における遺構変遷は、庇を有する掘立柱建物址→総柱の掘立柱建物址→SN03の順で変遷すると考えられている。

H区画（07今井3地区、08吉岡2地区）

東を道路6及び区画溝1、北を道路3によって区画されている。西は道路7に伴う溝の延長線上、南は区画溝2及び6の延長線上に推定される。区画内には総柱の掘立柱建物址1棟、ピット列1条、SN03が検出されている。区画内の変遷は総柱の掘立柱建物址・ピット列→SN03の順が考えられる。

I区画（08吉岡2地区）

東を区画溝1、西は道路7に伴う溝の延長線上、南は区画溝3の延長線上、北は区画溝2と6の延長線上に推定される。区画内には南に庇を有する掘立柱建物址、側柱の掘立柱建物址が各1棟とSN02・03が検出されている。区画内の変遷は、掘立柱建物址・SN02→SN03の順が考えられる。

J区画（98都市計画道路地区）

東を道路7、西を区画溝5の延長線上、南を区画溝4に想定される区画である。北は未調査のため不明である。区画内には4棟の掘立柱建物址が検出されている。

K区画（98都市計画道路地区、99チックタック地区、00丹波地区）

東を道路7、西を区画溝5、南を道路3、北を区画溝4によって区画されている。区画内には北に庇を有する掘立柱建物址1棟、側柱の掘立柱建物址7棟、ピット列1条が検出されている。

L区画（99チックタック地区、00丹波地区）

東を道路7に伴う溝の延長線上、西を区画溝5の延長線上、北を道路3、南を区画溝6に想定される区画である。区画内には掘立柱建物址が3棟検出されており、内1棟は北側に庇を有する。ピット列は道路3に平行するピット列及び直交するピット列がそれぞれ1条ずつ検出されている。

M区画（99チックタック地区、08巻端地区）

東を道路7の延長線上、西を区画溝5の延長線上、北を区画溝6によって想定される区画である。南は未調査のため不明である。区画内ではSN03が検出されている。

N区画（98都市計画道路地区、06市道拡幅地区）

東を区画溝5の延長線上、南を区画溝4の延長線上に想定される区画である。西及び北は未調査のため不明である。区画内には、宗教的施設の可能性が指摘されている掘立柱建物址や、斎串製作のための木製品の工房址と考えられる竪穴建物址1棟が検出されており、他の区画とは様相を異にしている。

区画の比較と利用方法

各区画で検出された遺構を基準に、区画された土地の利用方法について比較すると、建物のみで構成される区画、畝状遺構のみで構成される区画、建物址から畝状遺構へと変遷する区画、工房址や宗教施設が想定される建物がある区画の4種類に分類される。A・E・F・J～L区画は建物のみで構成されている。特にA区画を除いた区画は偏在の掘立柱建物址のみが検出されている。木製祭祀具などが多量に出土した橋梁護岸施設を伴う溝を中心として居住域が展開していたことが想定される。C・D・M区画では畝状遺構のみが検出されている。また、B・G～I区画は掘立柱建物址と畝状遺構が検出されている。C区画ではSN01～03が検出されていることから、当初C・D区画のみであった畑の規模を徐々にB・G・I区画へと拡大していったことが想定される。最終的に集落の南から南西にかかる区画（B～D・G・I区画）は畑として利用されていたことが考えられる。このことはC区画以南の区画溝1及び道路6がSN03により切られており、SN03が展開していく段階では、すでに区画溝や道路としての機能を失っていたことからも推測される。そのほか、N区画で検出された木製祭祀具の工房址のような手工業生産に関する遺構については現段階では検出例が少なく不明な点が多い。

計画集落

東木津遺跡は、出土した遺物から8世紀後半～9世紀前半の約100年間という限定された期間に営まれた集落であるといわれている。また、集落の存続した期間が初期荘園の存続する期間と一致することから荘園の経営に関わる集落であったとの指摘がある。それらのことを踏まえると、限られた期間に計画的に造営された集落であるといえ、土地の区画とその利用の仕方に関しても極めて計画的に行われていたことが窺える。

3. 鍛冶関連遺物について

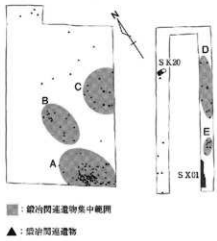
今回の調査では土坑SK20を始め、調査区内から多くの鍛冶関連遺物が出土している（第2表）。出土した遺物には椀形滓、鍛造剥片、粒状滓などが見られることから小鍛冶に関連したものと考えられる。土坑SK20は鍛冶関連遺物の廃棄土坑と考えられる。覆土中からは大量の炭化物に伴い鞴羽

	鞴羽口	炉壁	鍛冶滓	鍛造剥片	粒状滓
SK20	712	574	578	1	2
SX01	12	−	319	1	−
第Ⅵ層	49	45	139	−	−
第Ⅴ層	146	19	150	−	−
第Ⅳ層	−	−	56	−	−
合　計	919	638	1242	2	2

第2表　東木津遺跡吉岡地区　遺構・層位別
鍛冶関連遺物出土量（単位：g）

口、炉壁、鍛冶滓、鍛造剥片、粒状滓などが出土している。出土した炉壁の中にはガラス質化が顕著なものが多く含まれており、かなりの高温で小鍛冶が営まれていたことが想定される。また、この炉壁には石英などの鉱物が大量に含まれていることから炉を構築する際に石英などを混入、あるいは敷き詰めていた可能性がある。

そのほか、基本層序第Ⅳ～Ⅵ層において鍛冶関連遺物が出土している。これらの遺物は掘り込みを伴う遺構から出土しておらず、平地にばら撒かれたような状態で出土した。これらはその出土状態からA～Eにグルーピングできる(第30図)。グループAでは数点の鍛冶滓・炉壁と、多量の鞴羽口が、グループB・Cでは鍛冶滓・炉壁・鞴羽口が、グループD・Eでは鍛冶滓・鞴羽口が数点ずつ出土している。グループ間で遺物の種類に差は見られないが、量的に差が生じている。特にグループAではまとまった量の出土が見られる。この鍛冶関連遺物が部分的に集中して出土する状態は小鍛冶を行った際に、不要になったものを廃棄したことにより生じた結果と推測される。鍛冶関連遺物は土坑ＳＫ20・鍛冶関連遺構ＳＸ01を除くと基本層序第Ⅳ～Ⅵ層で出土しており、特にⅤ・Ⅵ層で多く出土している。このことはⅤ層以下で検出される畑址よりも、鍛冶関連遺物の廃棄が時期的に新しいことを示している。畑などの有機的生産の場から鉄製品生産のために小鍛冶を行う手工業生産の場へと土地の利用方法が推移していった様子が窺える。



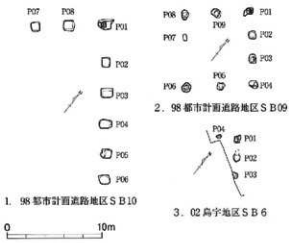
第30図　東木津遺跡吉岡地区
鍛冶関連遺物分布図（1／600）

4．礎板を伴う掘立柱建物址について

東木津遺跡ではこれまでの調査で、当地区で検出された掘立柱建物址ＳＢ05を含めて４棟の礎板を伴う掘立柱建物址が検出されている（第31図・図面20）。

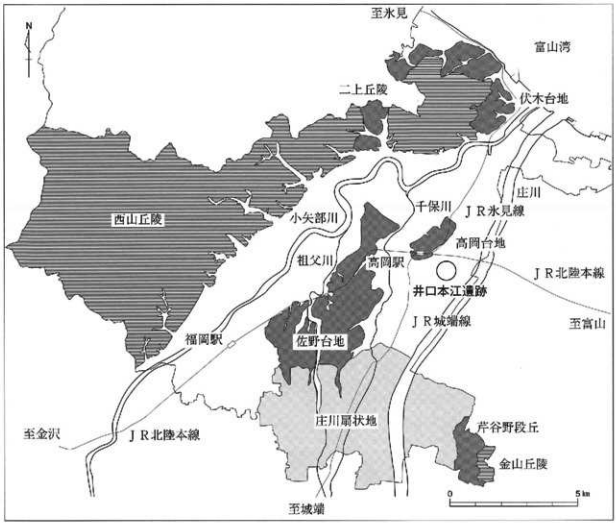
「98都市計画道路地区」ＳＢ10は桁行５間、梁行２間以上、長軸方位はＮ－40°－Ｗで、Ｐ01から礎板が出土している。同地区で検出されたＳＢ09は桁行３間、梁行２間、長軸方位はＮ－42°－Ｗで、Ｐ01・03から礎板が出土している。「02鳥宇地区」ＳＢ６は桁行３間、梁行２間以上、長軸方位はＮ－36°－Ｗで、Ｐ02から礎板が出土している。

当地区の掘立柱建物址ＳＢ05を始め、建物を構成する柱穴の内数基からしか礎板が出土しないのは再利用した可能性が考慮されよう。また、これまで当遺跡では上屋構造を窺い知ることのできる資料は出土していない。礎板の出土は、それらを推測するための一資料になり得ると考える。



第31図　東木津遺跡における礎板が検出
された掘立柱建物址（1／400）

3．井口本江遺跡、栗林地区



第32図　井口本江遺跡位置図〔1〕（1／15万）

井口本江遺跡栗林地区、目次

Ⅰ 序　　説 ……47

Ⅱ 遺　　構 ……49
　1．土坑 ……49
　2．溝 ……49

Ⅲ 遺　　物 ……50
　1．土器類 ……50
　2．石製品 ……50

Ⅳ 結　　語 ……51
　1．出土遺物と遺構の時期 ……51
　2．石製品 ……52

第33図　井口本江遺跡位置図〔2〕（1／5万）

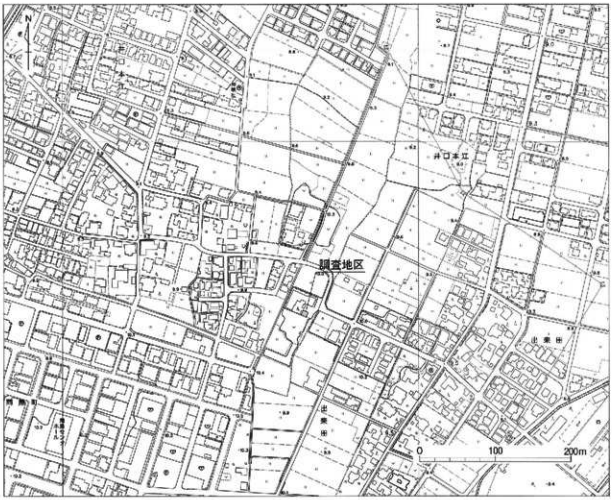
Ⅰ 序　　説

遺跡概観

井口本江遺跡はＪＲ高岡駅の南東約1.5kmに位置する。東側を流れる庄川と、西側を流れる千保川とに挟まれた標高９～10mの沖積低地上にあり、井口本江集落の東側一帯、南北450m×東西300mの範囲にわたる遺跡である。

当遺跡は平成２年度の分布調査により確認され、当時は古代から中世の散布地とされていた。平成19年度に都市計画道路能町庄川線道路工事に伴い、遺跡範囲を南北に貫くように試掘調査が実施され、内容が判明してきた。この調査ではほぼ全域から土坑・溝等の遺構が検出され、縄文土器・弥生土器をはじめ、古墳時代から中近世までの土器類が出土した。

当遺跡の周辺には多くの遺跡が所在し、南側には奈良平安時代を主体とする出来田南遺跡や間屋センター遺跡、南西側には弥生時代を主体とする赤祖父舟田遺跡、中世を主体とする赤祖父羽座間遺跡がある。また、北東側には奈良平安時代を主体とする蓮花寺遺跡があり、西側には前田墓所遺跡や瑞龍寺遺跡等といった近世加賀藩に関連する遺跡がある。



第34図　井口本江遺跡栗林地区位置図（１／5,000）

調査に至る経緯

平成20年８月、施主の栗林氏より車庫の建替えのため、埋蔵文化財包蔵地において工事の届出があった。当該地は都市計画道路能町庄川線工事に伴う発掘調査地区に接しており、当時現地調査が実施されていたこの地区の状況より遺跡の存在が確実視されたため、工事により掘削を受ける範囲について、直接本発掘調査を実施することになった。

調査経過

発掘調査は平成20年９月11日～同年９月18日まで実施した。当調査地区は限られた広さのため、掘削した土はダンプにより搬出することとし、バックフォーでの掘削を開始した。遺構検出面までは盛土の山砂が大半を占めていたため、地崩れを起さない様傾斜をつけて掘削を行った。掘削終了後、遺構検出のための精査を行い、遺構の掘削、平面図・断面図の作成、写真撮影といった作業を経て調査を終えた。

調査対象面積は65㎡で、発掘調査面積は42㎡である。

基本層序

厚さ約140～160cmの盛土の下に灰褐色粘質土の旧耕作土があり、その下に青灰色シルトの基盤層（地山土）が現れる。

検出遺構

土坑６基（ＳＫ01～06）

溝１条（ＳＤ01）

ピット２基（Ｐ01・02）

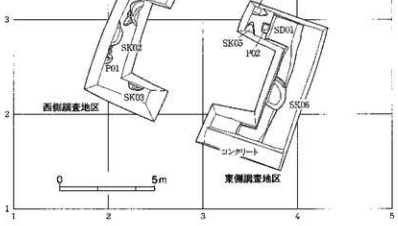
出土遺物

土器類：弥生土器、土師器、須恵器

石製品：磨製石包丁、管玉素材剥片、管玉未製品

グリッド

調査地区のグリッドは世界測地系の平面直角座標系の第Ⅶ座標系（原点は北緯36° 00′ 00″、東経137° 10′ 00″）に合わせた。東西をＸ軸とし、南北をＹ軸とした。グリッドの左下隅の数値がそのグリッドを表す。Ｘ＝１、Ｙ＝１の地点は、原点より、西へ12.055km、北へ80.760km向かった位置である。一辺５ｍ四方を一区画とし、グリッドを割り付け、メッシュを表示した。



第35図
井口本江遺跡栗林地区　遺構図
（1／200）

Ⅱ 遺　　構

1．土坑

今回の調査で確認した土坑は６基である。ＳＫ06は溝ＳＤ01を切り、ＳＫ02はピットに切られている。またすべての土坑が調査地区外へと延びており、全体が明確ではないが規模等から土坑と判断した。

土坑ＳＫ01

西側調査地区中央北の（２，２・３）区で検出した。南西側をピットに切られ、東側は調査地区外へ延びる。平面形は楕円形で、規模は長軸147cm、短軸54cm以上、深さ16cmを測る。出土遺物は土師器である。

土坑ＳＫ02

西側調査地区中央の（２，２）区で検出した。西側は調査地区外へ延びる。平面形は不整楕円形で、規模は長軸120cm、短軸47cm以上、深さ６cmを測る。遺物は出土していない。

土坑ＳＫ03

西側調査地区南側の（２，２）区で検出した。北側は調査地区外へ延びる。平面形は円形で、規模は長軸88cm、短軸32cm、深さ40cmを測る。出土遺物は土師器である。

土坑ＳＫ04

東側調査地区北西端の（３，３）区で検出した。北側と西側は調査地区外へ延びる。平面形は不整楕円形で、規模は長軸76cm以上、短軸44cm以上、深さ10cmを測る。遺物は出土していない。

土坑ＳＫ05

東側調査地区北西端の（３，２）区で検出した。ＳＫ04の南側に位置し、南側と西側は調査地区外へ延びる。平面形は不整楕円形で、規模は長軸56cm以上、短軸48cm以上、深さ10cmを測る。遺物は出土していない。

土坑ＳＫ06

東側調査地区ほぼ中央の（３，２）区で検出した。溝ＳＤ01を切り、西側は調査地区外へ延びる。平面形は不整円形で、規模は長軸154cm、短軸84cm以上、深さ82cmを測る。出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器である。図示した遺物は図面53－3105・3109・3110・3201・3202・3301・3302である。

2．溝

溝ＳＤ01

東側調査地区の（３・４，１～３）区で検出した南南西～北北東方向に走る溝である。規模は長さ6.68m以上、幅1.66～1.43m、深さ20～30cmを測る。中央でＳＫ06に切られ、北側はピットに切られる。両端は調査地区外へ延びる。出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器、石製品である。図示した遺物は図面53－3101～3104・3106～3108・3111、図面54－3401～3404・3406・3407である。

Ⅲ 遺　　物

1．土器類

弥生時代中期の土器

壺：図面53－3101・3102。3101は6本一組の櫛状工具による等間隔止めの簾状文、直線文、扇形文が施文される。内外面ともに刷毛目が見られる。3102は5本一組の櫛状工具による直線文、波状文、等間隔止めの簾状文が施文される。外面は刷毛目調整、内面はナデ調整が施される。

弥生時代後期～古墳時代初頭の土器

甕：図面53－3103。肩部には刷毛状工具による刺突文が施文される。外面には刷毛目が見られる。

器台：図面53－3104・3105。3104は裾部に刷毛状工具による刻みを施した突帯が1条巡る。外面は刷毛目調整後ヘラ磨きで、赤彩が施される。内面は受部がヘラ磨き、脚部は刷毛目調整後、粘土紐接合痕をナデ消す。胎土には骨針が含まれる。3105は外面ヘラ磨きで赤彩が施される。

鉢：図面53－3106・3107。3106は外面に刷毛目を施し、口縁部は横ナデを施す。3107は底面に焼成前の穿孔が4箇所あり、甑と考えられる。外面はナデ、内面は刷毛目調整を施す。

壺：図面53－3108～3110。外面はいずれもナデによる調整が施され、3108は底部下端にヘラ削り調整が施される。内面は3108が刷毛目調整であるほかは、すべてナデによる調整が施される。

甕：図面53－3111。外面は刷毛目調整で、底面にも刷毛目が見られる。内面はナデが施される。

奈良・平安時代の土器

須恵器杯B：図面53－3201。底部は回転糸切りで無調整である。

須恵器杯蓋：図面53－3202。口縁部はロクロナデ調整が施される。外面に自然釉が認められる。

中世の土器

土師器皿：図面53－3301・3302。いずれも口縁部にロクロナデ、体部下端にナデを施す。

2．石製品

磨製石包丁：図面54－3401。表裏全面に研磨痕が見られるが、裏面は一部研磨が行き届いていない。裏面には紐穴穿孔のためと考えられる敲打痕が見られる。表裏面ともに刃部には弱い光沢が認められ、刃こぼれとみられる微小剥離が観察される。石材は流紋岩である。

管玉素材剥片：図面54－3402～3406。3403は立方体に近く未製品の可能性もある。3404～3406は荒割工程ないし調整剥離時の剥片と考えられる。3406は一部白然面が残る。石材はすべて緑色凝灰岩である。

番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
3401	5.0	3.4	0.55	14.0
3402	2.3	1.4	0.45	0.8
3403	1.8	1.55	0.8	3.0
3404	2.7	1.1	0.35	0.8
3405	0.9	1.15	0.4	0.3
3406	1.2	0.8	0.7	0.5
3407	0.95	0.8	0.7	1.0
3408	2.7	1.35	0.95	5.0

第3表　井口本江遺跡栗林地区
石製品計測表

管玉未製品：図面54－3407・3408。形割工程の未製品である。3407は1本の施溝が認められる。表裏面に粗い研磨痕が認められ、平坦に仕上げられている。本来は角柱状の形状をなしていたと考えられ、製作途中に欠損したものとみられる。石材は安山岩系である。3408はP01出土である。施溝が平坦面と稜線上に1本ずつ見られることから打面の転移が窺われる。角柱状に仕上げる途中の段階とみられ、一部に研磨痕が認められる。石材は緑色凝灰岩である。

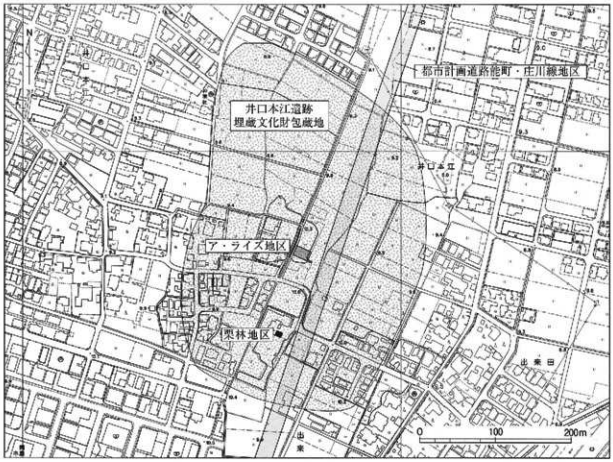
Ⅳ 結　　語

1．出土遺物と遺構の時期

土坑ＳＫ06と溝ＳＤ01

今回の調査地区は車庫の基礎部分という限られた範囲であり、遺構確認面までは山砂が約150cm盛られていることから、傾斜をつけての掘削となり検出面積が縮小するといった状況であった。このため、遺構全体の形状が判明するものは少なかった。さらに削平を受けている影響で遺構の大半が浅く残存状態は良いものではなかった。しかし、土坑ＳＫ06や溝ＳＤ01には多くの遺物が含まれており、おおよその時期の特定に繋げることができた。

溝ＳＤ01を切る形で確認した土坑ＳＫ06は、一辺１ｍを越える大型のものであり、確認した深さは82cmである。他の遺構同様に上面は削平を受けていると考えられることから、掘られた当時は１ｍ以上の深さがあったと推測する。この掘り方から井戸址である可能性も考えられたが、井戸址とする根拠となるものが確認できなかったことから、今回は土坑とした。この土坑ＳＫ06から出土した遺物には奈良平安時代のものと中世のものの２時期のものが確認できた。上面に近い腐植物が混ざった層からは中世土師器の皿が出土し、この層より下からは中世の遺物は出土していない。奈良平安時代のものでは９世紀後半頃とみられる須恵器の高台付杯の底部がある。また底面に近い所からも細片ではあるが須恵器と土師器が出土している。このこと



第36図　井口本江遺跡での調査位置及び遺跡範囲（１／5,000）

からこの土坑は奈良平安時代に掘られ、その後の埋没過程で上方に中世の遺物が入ったものと考えられる。

次に南南西～北北東方向に走る溝ＳＤ01は検出面である暗灰色粘質土に遺物が多く含まれており、弥生土器、土師器、須恵器、石製品がこの層から出土している。形の判るものに弥生時代後期中葉とみられる器台の裾部があるが、土師器、須恵器は細片で形が明確になるものはなかった。また下層にあたる灰色粘質土からは底面に張り付くような状態での弥生土器片が出土しており、遺物の時期や土坑ＳＫ06に切られていることなどからみて、弥生時代中期中葉～後期中葉の溝であると推測する。

このほかの土坑やピットについては、遺物が細片ということと削平により遺構の残存状態が良くないことから明確な時期は特定できないが、遺物の種類等から奈良平安時代から中世にかけての遺構である可能性が高いと思われる。

溝ＳＤ01出土弥生土器の時期

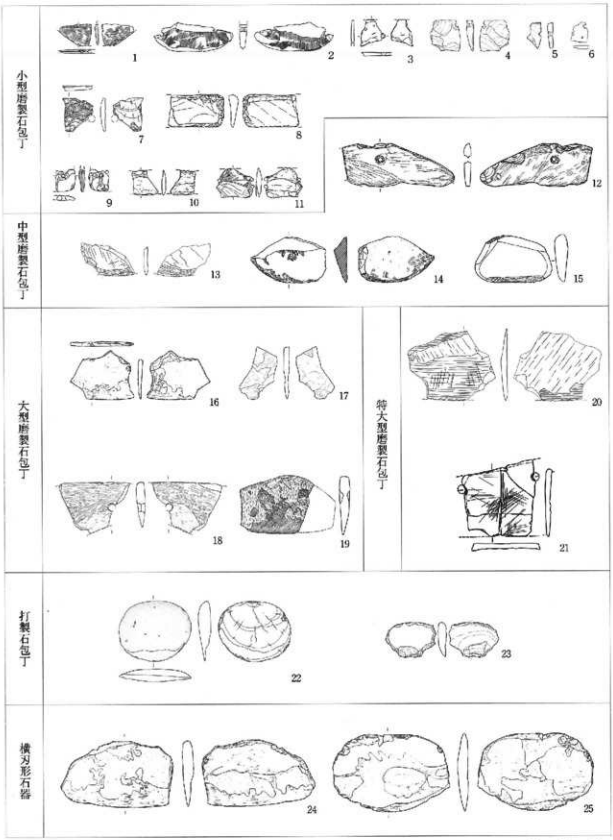
溝ＳＤ01から出土した弥生土器のうち、時期の判別できるものは未掲載分を含めると中期が15点、後期は７点で中期の割合が高い。土器の帰属時期は中期中葉から後期中葉まで幅があり、一部の土器は古墳時代初頭まで時期が下る可能性もある。3101・3102は中期中葉に位置づけられる壺である。3101は櫛描簾状文・直線文・羽状文が施文されることから八日市地方編年（福海2003）７～８期、3102は櫛描直線文・波状文・簾状文の組み合わせから６～８期に比定される。また、図示し得なかったが、鋸歯状の条痕地に三角形刺突文を施文する甕、口縁部内面に垂下する櫛描直線文が施文された細頸壺などが出土している。いずれも八日市地方編年６～８期の中で捉えられる。中期全体の様相としては７・８期を主体とするようである。甕3103、器台3104、鉢3106・3107は後期中葉の法仏式に相当する。3103は頸部付近に刷毛目状刺突文が施文され、擬凹線文、または無文の有段口縁が付くとみられる甕である。3104は受部と裾部に突帯をめぐらす器台で高岡市下老子笹川遺跡や射水市布目沢北遺跡、上市町江上Ａ遺跡などに類例がある。

２．石製品

磨製石包丁の特徴と類例

溝ＳＤ01から出土した石包丁（3401・第37図－１）は全面研磨が施された磨製石包丁である。全体の約３分の２が欠損しているとみられ、最大幅は4cm前後、形態は外彎刃半月形と推定される。体部は平滑になるまで丁寧に研磨されている。また、表裏面ともに刃部に平行する使用痕が確認できることから、横に引いて切る使用方法が想定される。石材は流紋岩である。石包丁の帰属時期は伴出土器から弥生時代中期中葉～後期中葉に比定されるが、後述する形態・規格などから勘案すると中期に帰属する可能性が高い。

富山県における弥生時代の磨製石包丁は中期中葉から後期中葉まで出土例が確認されている（第37図・第４表）。石製収穫具全体の内訳では磨製石包丁（１～21）が大半を占め、打製石包丁（22・23）・横刃形石器（24・25）は量が少ない。分布は県西部に集中し、中期後半の中核的集落とされる高岡市石塚遺跡では突出して出土数が多い。後期に属するものが少ないのは後期後半に収穫具の主体が鉄器や木包丁に移行し、石包丁が急激に姿を消していくことに起因すると考えられる。規格は石川県で出土した資料の分類（木田1999）と概ね同じ傾向を示し、小型（幅４cm～5.5cm）、中型（幅5.5cm～８cm）、大型（幅８cm～10cm）、特大型（幅11cm以上）に分かれる。中期では小型品が多く、中～大型品も一定量存在する。後期では出土数が少ないため明確な傾向がつかめないが、小型のものが多く、中型以上の製品はあまりないようである。形態は外彎刃半月形（１・18）、外彎刃楕円形（14）、直線刃半月形（12・15・19）、直線刃長方形（８・９）がある。中期は外彎刃・直線刃で半月形を呈するものが多く、後期前半から長方形が確認できる。研磨



第37図　富山県出土の弥生時代石製収穫具一覧表（1／6）

1：高岡市井口本江遺跡、2～6・13・17・18・20：高岡市石塚遺跡、7・22：射水市高島A遺跡、8～11：高岡市中曽根西遺跡
12：高岡市下老子笹川遺跡、14：上市町江上A遺跡、15：富山市豊田遺跡、16・24・25：氷見市中谷地遺跡、19：滑川市魚躬遺跡
21：射水市布目沢北遺跡

No.	遺跡	器種	時期	遺構	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	石材	備考
1	井口本江遺跡・栗林地区	小型磨製石包丁	中期中葉～後期中葉	S D01	(5.0)	(3.4)	0.55	流紋岩	外湾片平月形か
2	石塚遺跡・宮崎地区		中期？	表上	12.5	(4.6)	1.2	頁岩	外湾か、未製品
3			中期後半	S K134	(4.4)	(4.3)	0.6	？	
4	石塚遺跡・新鮮市場地区		中期後半	S K42	(4.6)	(4.8)	1.1	砂岩	
5			中期	P223	(2.2)	(4.1)	8.5	砂岩	
6	石塚遺跡・甘木海水ホーム地区		中期	遺物包含層	(2.6)	(3.3)	0.5	？	
7	高島A遺跡		中期後半	B地区S D19	(4.4)	(5.3)	0.8	頁岩	S X01周溝出土
8	中曽根西遺跡・県道姫野館町線地区		後期前半	1又S D23	(8.9)	5.1	1.4	石英閃緑岩	直線ぎ長方形
9			後期前半	1区S D23	(3.3)	(3.0)	0.9	泥質変岩	直線ぎ長方形か
10			後期前半	1区S D23	(3.8)	3.8	0.6	砂岩	
11			後期	3区S K100	(5.7)	(4.4)	0.7	泥質変岩	
12	下老子笹川遺跡	中型磨製石包丁	中～後期	S D4101	(17.8)	(6.9)	1.3	凝灰岩	直線刃平月形
13	石塚遺跡・都市計画道路地区		中期？	四地S X01	(8.5)	(4.7)	0.6	硬質泥岩	外湾刃隅円形
14	江上A遺跡		後期	S D01	11.9	7.3	2.1	？	
15	桑田遺跡		中期後葉	H形状ピット	12.1	7.4	2.1	？	直線刃平月形
16	中谷地遺跡	大型磨製石包丁	中期？	B地区S D270	(10.1)	(7.7)	0.7	玄山岩	
17	石塚遺跡・新鮮市場地区		中期後半	S 101東周溝	(5.8)	(8.3)	0.9	砂岩	
18	石塚遺跡・きぼう地区		中期？	表土	(11.1)	(8.0)	0.9	凝灰岩	外湾刃半月形
19	魚躬遺跡		中～後期	遺物包含層	(11.7)	9.4	1.5	火山岩系	直線刃平月形
20	石塚遺跡・都市計画道路地区	特大型磨製石包丁	中期？	表土	(14.2)	(11.0)	1.0	溶結凝灰岩	
21	布目沢北遺跡		後期中葉？	24トレンチ	11.4	12.1	(1.2)	？	砥石に転用
22	高島A遺跡	打製石包丁	中期後半	B地区S D106	9.6	11.5	2.0	頁岩	S X06墓周溝出土
23	石塚遺跡・文苑堂地区		中期後半	S K43	7.9	5.6	1.3	安山岩	
24	中谷地遺跡	横刃形石器	中期？	C地区S D626	17.7	10.4	1.65	角閃石安山岩	直線刃平月形
25			中期？	C地区S D626	18.3	12.1	1.7	安山岩	外湾刃半月形

※（ ）内の数字は残存値。欠損品の規格（小～特大）は推定値から判断した。

第4表　富山県出土の弥生時代石製収穫具一覧表

は全体的に粗雑なものが多く、刃部のみ研磨した例もある。石材は砂岩が最も多く、凝灰岩系が次に多い。

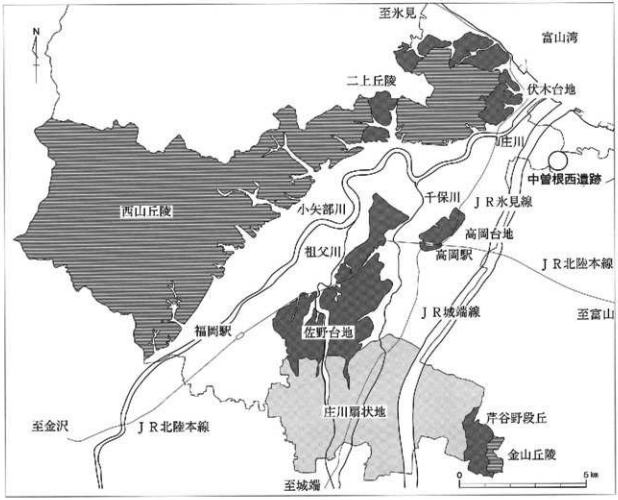
以上の傾向と比較すると、井口本江例はほぼ全面に丁寧な研磨を施し、流紋岩製である点で既存の資料とは大きく異なる。全面を研磨した例は石塚遺跡「96宮崎地区」（2）にあり、未製品ながら規格の点で最も近い。石塚遺跡「03きぼう地区」例（18）も全面研磨と考えられるが、幅7cm以上あることから中型以上の分類に属する。また、流紋岩製の磨製石包丁は富山県下では出土しておらず、むしろ石川方面に類例が多い。石川県域における流紋岩製の磨製石包丁は加賀地方を中心に流通することが指摘されており（松尾2004）、井口本江例はこうした流通圏との関わりによってもたらされた可能性がある。

管玉の分割技法

溝S D01・ピットP01からは管玉の素材剥片・未製品が出土している。素材の分割は施溝分割技法によって行なわれ、未製品3407・3408は施溝方向に対して直角に近い角度からの打撃によって分割されている。周辺では高岡市石塚遺跡「93高田地区」・「05新鮮市場地区」、高岡市下老子笹川遺跡、射水市布目沢北遺跡、上市町江上A遺跡などで管玉製作に関連した遺物が多数出土している。

施溝分割技法は弥生時代中期に発達した技法で後期後半には鉄製工具による直接ないし間接打法の普及によって衰退、消滅してゆくことが指摘されている（中野1999）。こうした指摘を裏付けるように中期後半を主体とする石塚遺跡では施溝分割技法が見られるのに対し、後期後半を主体とする下老子笹川遺跡や江上A遺跡では施溝分割技法のものは確認されていない。以上の点を考慮すると、井口本江例の管玉未製品は分割技法の特徴から弥生時代中期中葉～後期前半に帰属し、伴出土器の時期と比較しても矛盾しない。また、管玉の製作技法は石塚遺跡などで出土したものと基本的には同様と考えられる。

4．中曽根西遺跡、区画整理地区



第38図　中曽根西遺跡位置図〔1〕（1／15万）

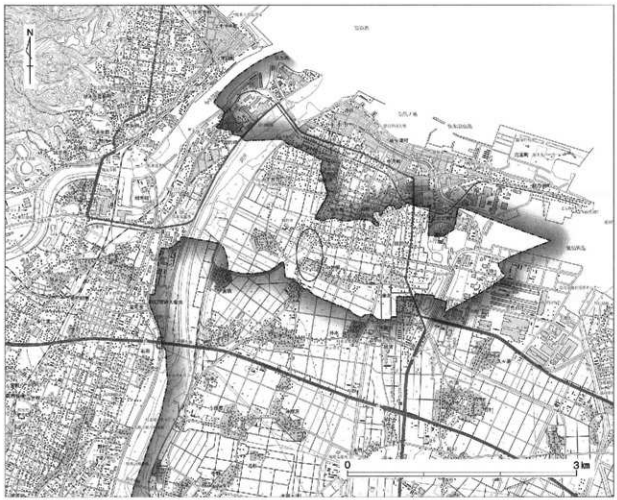
中曽根西遺跡区画整理地区、目次

Ⅰ 序　　説 ……57

Ⅱ 遺　　構 ……60
1．道路址 ……60
2．構址 ……60
3．溝 ……60
4．その他の遺構 ……62

Ⅲ 遺　　物 ……63
1．弥生時代～近世の土器類 ……63
2．その他の遺物 ……63

Ⅳ 結　　語 ……64



第39図　中曽根西遺跡位置図〔2〕（1／5万）

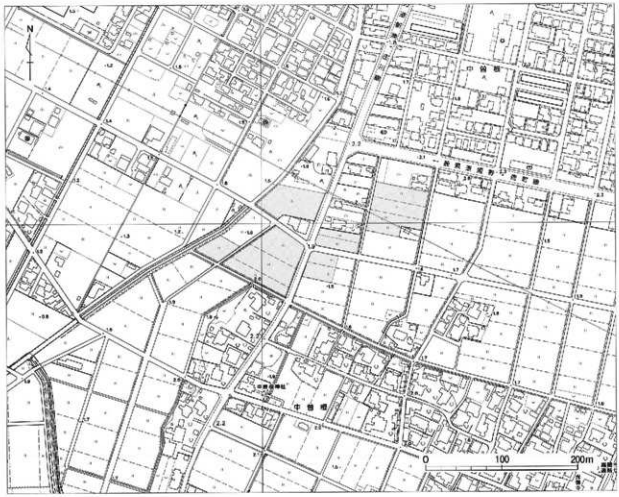
Ⅰ 序　　説

遺跡概観

中曽根西遺跡は高岡市内を北流する庄川右岸の射水平野に位置する。富山湾に面する放生津より約2km内陸側である。周辺には富山県の中央を流れる神通川によって運ばれた砂により砂洲が形成され、かつては浅い入り海の様相を呈していた。その後、湯潮となった放生津潟には内川・鍛冶川・下条川など小河川が流れ込み、一帯は馬入らずといわれた強湿地帯であった。周辺の標高は1m～2mである。

本遺跡周辺では、縄文時代中期から近世までの遺跡が確認されている。特に弥生時代については、当調査地区から南へ約250mに位置する中曽根西遺跡「04県道姫野能町線地区」において弥生時代中期後半～後期終末にかかる集落が調査されており、土坑や溝から良好な一括資料が得られている。

中世の放生津には越中守護所が置かれ、越中における政治・経済・文化の中心地であった。延喜式によると古代における越中の日本海海運の拠点は国府所在地とされる伏木の日理湊であった。しかし、古代末から中世にかけて起こった気温の寒冷化に伴う海水面の低下により日理湊の港湾機能が低下した。そのため、日理湊に代わって放生津湊が発展し、日本海海運の要衝として十三湊、敦賀湊を結ぶ中継点となり多くの物資が運搬されていた。その後、江戸時代に入ってからも放生津は漁業と海運業が盛んな湊方として栄えていた。



第40図　中曽根西遺跡区画整理地区位置図（1／5,000）

調査に至る経緯

今回の調査は、高岡市中曽根土地区画整理組合による高岡市中曽根土地区画整理事業に伴うものである。この区画整理にかかる埋蔵文化財に関する協議は平成15年６月に行われたが、事業が推進しなかったこともありそのままになっていた。平成18年４月より業務代行方式によることが決まり、平成18年３月に協議が再開されその後数回の協議がもたれた。事業計画は、平成18年12月までに仮換地が決定され、平成20年度に商業地区施設が開業し、平成24年度までに全体事業が完了するものであった。事業区域は25ha、東西約１km、南北約270mを測るものである。東側は西神楽川までで、この川は北流して約２km北北東の放生津へ向かう。放生津は海運の拠点であり、中世には越中守護所が置かれた所である。西側は旧牧野川河川跡地までである。区域内に埋蔵文化財包蔵地が３箇所存在している。南東隅部に中曽根館遺跡、中央南端部に中曽根遺跡、北西隅部に中曽根西遺跡が分布している状態である。試掘調査は区画整理事業の進展に合わせて実施した。平成18年度に中曽根遺跡の試掘調査を実施した。近世・近代の溝を検出し、古代・中世の遺物が少量出土した。平成19年度に中曽根館遺跡の試掘調査を実施した。遺構は検出されず、古代の遺物が極少量出土した。平成20年度になり、今回の中曽根西遺跡の試掘調査を実施することに至った。調査対象面積は16,230㎡である。

調査経過

調査地区内には県道や農道が走っており、これらを境としてＡ～Ｆ区の６つの調査区に区分した。調査方法は遺跡確認を原則とし、重要と判断される遺構については一部掘り下げを行い、図面・写真による記録を取った。試掘調査は平成20年10月８日から開始し、12月16日に終了した。発掘面積は983㎡である。

第41図　区画整理事業区域と周辺の遺跡（１／1,000）

1．中曽根北遺跡 2．經野諏訪神社遺跡 3．牧野金屋遺跡 4．中曽根館遺跡 5．中曽根遺跡 6．中曽根西遺跡

基本層序

第Ⅰ層～Ⅶ層までを確認している。第Ⅰ層は表土層で現代の耕作土である。第Ⅱ層は黒褐色土で遊鉄が多く見られる。第Ⅲ層は褐色土で、場所によって砂を多く含むⅢａ層と、粘性の強いⅢｂ層に分かれる。第Ⅳ層は黒褐色土で、調査区全域にはみられず今回の調査ではＢ区北西、Ｄ区北東、Ｅ区で検出された。第Ⅴ層は第Ⅳ層と第Ⅵ層の混土層である。第Ⅵ層は黄褐色粘質土である。第Ⅶ層は灰色砂で、この層からの湧水が著しい。また、Ｆ区では表土直下でマーブル状に砂が多量に混入した流水の痕跡と考えられる堆積土を検出した。（ⅰ・ⅱ層）。遺構は第Ⅳ・Ⅵ層で検出された。第Ⅵ層以下では遺構・遺物は一切検出されていない。

検出遺構

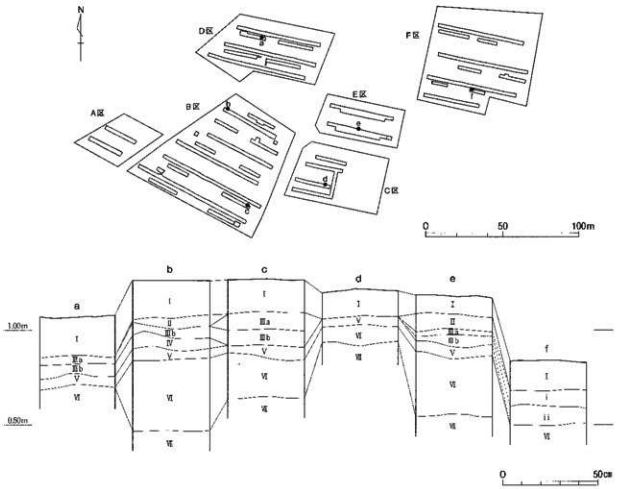
道路址３条（ＳＦ01～03）、橋址１条（ＳＡ01）、土坑20基、溝80条（ＳＤ01～26）、ピット21基、土器集中遺構１基（ＳＸ01）、窪地１ヶ所（ＳＸ02）

出土遺物

弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、土製品、鍛冶関連遺物、銅製品

グリッド

調査地区のグリッドは世界測地系の平面直角座標（原点は北緯36°00'00"、東経137°10'00"）に合わせた。東西をＸ軸とし、南北をＹ軸とした。Ｘ＝０、Ｙ＝０の地点は、原点より西へ83.200km、北へ85.050km向かった位置である。一辺10m四方を一区画とし、グリッドを割り付けメッシュを表示した。



第42図　中曽根西遺跡区画整理地区　基本層序（１／20）

Ⅱ 遺　構

1．道路址

道路址ＳＦ01

Ｂ区B18トレンチで検出された。溝ＳＤ11と重複し本遺構が古い。併走する溝ＳＤ12・13によって区画された内側に、拳大の川原石→Ⅵ層ブロックを混入した砂→砂の順に盛土をし、道路面を構築している。道路幅は2.4m以上でＮ－10°－Ｗの方位に走向する。側溝と考えられる溝ＳＤ12の規模は上端3.78m以上、下端1.54m、深さ46cmである。断面は弧状を呈する。溝ＳＤ13は湧水が著しく底部まで掘削することができなかった。規模は上幅3.2m以上である。遺物はＳＤ13の覆土中から珠洲（4403）が出土したほか、道路の構築土から須恵器が１点出土した。

道路址ＳＦ02

Ｃ区C01・C02・C04トレンチで検出された。溝ＳＤ18・19はＮ－15°－Ｗの方位に併走していることから道路址の側溝と考えられる。両溝間の距離は心々で2.3mを測る。硬化面は検出されていない。規模は溝ＳＤ18が上幅72cm、下幅42cm、深さ12cm、溝ＳＤ19が上幅55cm、下幅28cm、深さ18cmである。断面形状は溝ＳＤ18が弧状、溝ＳＤ19が逆台形状を呈する。遺物は出土していないが、覆土及び検出された層位から中世以前に帰属する可能性が高い。

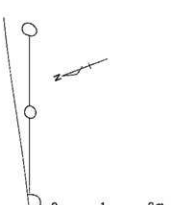
道路址ＳＦ03

Ｂ区B14トレンチで検出された。溝ＳＤ06と重複し本遺構が古い。北西から南西方向5.2m、厚さ10cmほどの規模で、道路址ＳＦ01に堆積していた褐灰色砂質土と同様の土が堆積していた。道路址ＳＦ01とは別の方位に走向する道路址の一部である可能性が高い。遺物は出土しなかった。

2．柵址

柵址ＳＡ01

Ｅ区E01トレンチで検出された。Ｎ－70°－Ｗの方位で３基の柱穴が並ぶ。柱穴は25cm～32cmの円形を呈し、柱間距離は1.76m～1.84mを測る。深さは未掘削のため不明である。時期は覆土及び検出された層位から中世以前と考えられる。



第43図　中曽根西遺跡区画整理地区
柵址ＳＡ01実測図　（１／80）

3．溝

80条の溝を検出したが、主要な22条について記す。

溝ＳＤ01

Ｂ区B02・04トレンチで検出された。Ｎ－78°－Ｗの方位に走向する。B04トレンチで土坑と重複するが本遺構が新しい。規模は上幅1.04m、下幅88cm、深さ18cmである。断面形状は弧状である。遺物は出土しなかった。

溝ＳＤ02

Ｂ区Ｂ07トレンチで検出された。Ｎ－1°－Ｗの方位に走向する。規模は上幅1.64m、下幅1.40m、深さ24cmである。断面形状は逆台形を呈する。遺物は出土しなかった。

溝ＳＤ03

Ｂ区Ｂ01・04・06トレンチで検出された。Ｂ06トレンチで溝ＳＤ05と重複し本遺構が古い。Ｎ－45°－Ｅの方位に走向する。規模は上幅1.32m、下幅1.16m～0.8m、深さ40cmである。断面形状は箱形を呈する。遺物は出土しなかった。

溝ＳＤ04

Ｂ区Ｂ01・04・06トレンチで検出された。Ｂ06トレンチで溝ＳＤ05と重複し溝ＳＤ05が新しい。Ｎ－33°－Ｅの方位に走向する。規模は上幅1.88m、下幅1.04m、深さ38cmである。断面形状は箱型を呈する。遺物は出土しなかった。

溝ＳＤ05

Ｂ区Ｂ06トレンチで検出された。Ｎ－70°－Ｅの方位に走向する。溝ＳＤ04・05と重複し本遺構が最も新しい。規模は上幅1.20m、下幅86cm、深さ34cmである。断面形状は弧状を呈する。遺物は出土しなかった。

溝ＳＤ06

Ｂ区Ｂ14トレンチで検出された。Ｎ－84°－Ｗの方位に走向する。土器集中遺構ＳＸ01と重複し本遺構が新しい。規模は上幅1.18m、下幅48cm、深さ42cmである。断面形状は弧状を呈する。遺物は出土しなかった。

溝ＳＤ07

Ｂ区Ｂ17トレンチで検出された。Ｎ－27°－Ｅの方位に走向する。溝ＳＤ09と重複し本遺構が古い。規模は上幅76cm以上、下幅36cm以上、深さ32cmである。遺物は出土しなかった。

溝ＳＤ08

Ｂ区Ｂ17トレンチで検出された。溝ＳＤ09・10と重複し本遺構が最も古い。Ｎ－48°－Ｅの方位に走向する。規模は上幅4.6m以上、下幅4.0m以上、深さ40cmである。断面形状は逆台形を呈する。遺物は出土しなかった。

溝ＳＤ09

Ｂ区Ｂ17トレンチで検出された。Ｎ－25°－Ｅの方位に走向する。溝ＳＤ07・08と重複し本遺構が最も新しい。規模は上幅2.0m、下幅40cm、深さ72cmである。断面形状は弧状を呈する。遺物は出土しなかった。

溝ＳＤ10

Ｂ区Ｂ17トレンチで検出された。Ｎ－50°－Ｅの方位に走向する。溝ＳＤ08と重複し本遺構が新しい。規模は上幅2.28m、下幅92cm、深さ64cmである。断面形状は逆台形を呈する。遺物は出土しなかった。

溝ＳＤ11

Ｂ区Ｂ18トレンチで検出された。Ｎ－9°－Ｗの方位に走向する。道路址ＳＦ01・溝ＳＤ13と重複し本遺構が最も新しい。規模は上幅84cm、下幅40cm、深さ34cmである。断面形状は逆台形を呈する。遺物は出土しなかった。

溝ＳＤ14・15・16

Ｃ区Ｃ01・03・04トレンチで検出された。これらの溝は重複しており、溝ＳＤ14→15→16の順に新しい。溝ＳＤ14はＮ－52°－Ｅ、溝ＳＤ15・16はＮ－40°－Ｅの方位に走向する。規模は溝ＳＤ14が上幅1.60m以上、下幅1.19m、深さ48cm、溝ＳＤ15が上幅1.57m以上、下幅1.29m、深さ40cm、溝ＳＤ16は上幅90cm以上、下幅66cm、深さ30cmである。溝ＳＤ15・16は、Ｃ04トレンチにおいて溝ＳＤ20と直行する。溝ＳＤ20と直向する部分において新旧関係は認められず、溝ＳＤ15・16より西側では溝ＳＤ20が検出されていないことから、これらの溝は同時に機能していた可能性が考えられる。遺物は出土しなかった。

溝ＳＤ17

Ｃ区Ｃ01・03・04トレンチで検出された。溝ＳＤ16と重複するが新旧関係は不明である。Ｎ－35°－Ｅの方位に走向する。規模は上幅1.20m、下幅74cm、深さ49cmである。断面形状は逆台形状を呈する。４層から土錘（4601）が１点出土した。

溝ＳＤ20

Ｃ区Ｃ02トレンチで検出された。Ｎ－113°－Ｅの方位に走向する。溝ＳＤ15～17と直向するが、新旧関係は不明である。溝ＳＤ14～16と同様、何条かの溝が重複している可能性が高い。規模は、検出した範囲では上幅3.8mである。下幅及び深さは未掘削のため不明である。遺物は確認面から炉壁（図版53）が１点出土している。

溝ＳＤ21・22

Ｄ区Ｄ02トレンチで検出された。両溝は重複し、溝ＳＤ21の方が新しい。検出した範囲では両溝ともＮ－10°－Ｅの方位に走向する。規模は溝ＳＤ21が上幅1.60m、下幅52cm、深さ52cm、溝ＳＤ22が上幅42cm以上、下幅30cm以上、深さ32cmである。断面形状は溝ＳＤ21が弧状、溝ＳＤ22は不明である。遺物は出土しなかった。

溝ＳＤ23

Ｄ区Ｄ03トレンチで検出された。溝ＳＤ24・25と重複し、溝ＳＤ24との新旧関係は不明で、溝ＳＤ25より新しい。溝ＳＤ24と直向し、覆土も類似することから同時期に使用されていた可能性が高い。Ｎ－80°－Ｗの方位に走向する。規模は上幅2.2m、下幅及び深さは未掘削のため不明である。遺物は出土しなかった。

溝ＳＤ24

Ｄ区Ｄ03・06トレンチで検出された。溝ＳＤ23と重複し、新旧関係は不明である。Ｎ－25°－Ｅの方位に走向する。規模は上幅2.1m、下幅及び深さは未掘削のため不明である。遺物は出土しなかった。

溝ＳＤ25

Ｄ区Ｄ03トレンチで検出された。溝ＳＤ23と重複し本遺構が古い。Ｎ－43°－Ｅの方位に走向する。規模は上幅2.91m、下幅1.12m、深さ64cmである。断面形状は逆台形状を呈する。遺物は７層から鍛冶滓が１点出土している。

溝ＳＤ26

Ｅ区Ｅ01トレンチで検出された。窪地ＳＸ02と重複し本遺構が古い。Ｎ－42°－Ｗの方位に走向する。規模は上幅4.8m、下幅2.68m、深さ44cmである。断面形状は弧状を呈する。遺物は出土しなかった。

４．その他の遺構

土器集中遺構ＳＸ01

Ｅ区Ｅ01トレンチ西端で検出された。南北72cm×東西49cmの範囲に弥生土器壺（4101・4102）がほぼ同レベルで出土した。土器周辺には径33cm～19cmのピットが７基検出されている。トレンチ外に遺構の範囲が及ぶため全容は不明である。遺物の出土状態や柱穴と思われるピットが検出されていることから平地式建物址の可能性が考えられる。

窪地ＳＸ02

Ｅ区01トレンチで検出された。規模は5.7m×1.75mで、長軸方位はＮ－52°－Ｗである。覆土には第Ⅳ層と第Ⅵ層の混土層が堆積しており、人為堆積の可能性が考えられる。検出された層位から中世以降に帰属すると考えられる。

Ⅲ 遺　　物

1．弥生時代～近世の土器類

弥生時代の土器類：図面55－4101・4102。いずれも土器集中遺構ＳＸ01から出土した。4101は、外面は刷毛目、内面はナデ調整を施す。口縁部外面にはヘラ状工具による押圧、肩部には３本櫛描による斜行短線文を施文する。また、口縁部内面には４本櫛描による斜行短線文を２重に施文する。4102は甕の底部である。

古墳時代の土器類：図面55－4201・4202。いずれも遺構外の出土である。4201は高杯の杯部である。内面から口縁部にかけてはナデ、体部外面は横ナデを施す。4202は台付甕の脚台部である。外面はヘラ磨き、内面にはハケ調整を施す。

奈良・平安時代の土器類：図面55－4301・4302。いずれも遺構外からの出土である。4301は土師器の杯の底部である。4302は須恵器の杯で、底部は回転ヘラ切り後ナデ調整を施している。

中世の土器類：図面55－4401～4404。4403は溝ＳＤ13、他は遺構外からの出土である。4401は16世紀前半の瀬戸美濃の天目碗の高台部である。漆による補修痕が見られる。4402～4404は珠洲で4402は壺の頸部～胴部、4403・4404は甕の胴部である。いずれも外面は平行叩き、内面は無文の当て具痕が見られる。また、4402・4403は胎土に骨針を含む。

近世の陶磁器類：図面55－4501～4514。いずれも遺構外からの出土である。4501は17世紀代の越前甕である。内外面に鉄釉が施釉される。4502～4506は肥前陶器である。4502は17世紀後半～18世紀初頭の碗で、見込みに鉄釉、外面に灰釉を施釉する。4503は19世紀代の皿で、見込みには灰釉が施釉される。また、蛇の目釉剥ぎ取りが見られる。4504は17世紀後半～18世紀初頭の皿で、全面に白土による櫛毛目が施される。4505は17世紀前半代の皿で見込みから体部外面に灰釉が施釉される。4506は17世紀前半の皿である。4507～4512は越中瀬戸である。4507は17世紀前半代の碗で全面に鉄釉が施釉される。4508は17世紀前半代の皿で、見込み～外面の体部上半に鉄釉が施釉されている。4509は17世紀後半～18世紀初頭の皿で外面に部分的に鉄釉が付着する。4510は17世紀後半代の碗で外面の体部上半に鉄釉が施釉されている。4511は17世紀前半の皿で見込み～外面の体部に鉄釉が施釉されている。4512は17世紀前半の瓶の底部である。4513は非在地の壺の底部で外面に白釉が施釉されている。4514は19世紀代の肥前磁器の碗で、外面の口縁部に１条の帯線文、体部は１重の圏線内に岩、雲文、草花文が描かれている。

2．その他の遺物

土製品：図面56－4601。溝ＳＤ17から土錘が１点出土している。法量は、6.1cm×4.2cmで孔径1.7cm×1.5cmで重量92ｇである。

鍛冶関連遺物：図面56－4701・4702。Ｃ・Ｄ区から鍛冶関連遺物が出土している。4701は椀形滓で、長さ4.9cm×幅3.7cm×厚さ1.2cmで重量32ｇである。4702は鍛冶滓で、長さ4.5cm×幅3.5cm×厚さ2.4cmで重量は41ｇである。また、炉壁が２点（図版53）出土しており、それぞれ重量は76ｇと10ｇである。

銅製品：図面56－4801～4803。4801は煙管の吸い口で、長さ6.0cm、羅宇との接合部の径は9.5mm、重量５ｇである。4802は古寛永で、径2.35cm、孔径6.5mm、重量２ｇである。4803は新寛永通宝の四文銭で、背面は12波である。径2.8cm、孔径６mm、重量５ｇである。

Ⅳ 結　　語

弥生時代の遺構について

E区E01トレンチでは弥生時代中期後半の土器集中遺構ＳＸ01が検出された。遺構の性格は遺物の出土状態や遺物周辺の柱穴と思われるピットなどから勘案すると平地式建物址である可能性が考えられる。本調査地区の南方約250mに位置する「04県道姫野能町線地区」では同時期の土坑・溝などが検出されている。また、弥生時代後期前半では掘立柱建物址や平地式建物址と考えられるピット群が検出されており、中期後半から後期前半まで集落が継続して営まれていた様子が窺える。本調査地区で検出された弥生時代の遺構は土器集中遺構ＳＸ01のみで、「04県道姫野能町線地区」と比較すると極めて希薄である。このことから、弥生時代の集落の北限が本調査地区周辺であった可能性が考えられる。

道路址について

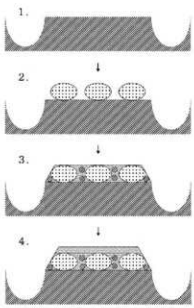
本調査地区では３条の道路址（道路址ＳＦ01～03）が検出された。ここでは、道路の構築工程が判明した道路址ＳＦ01について補足したい。道路址ＳＦ01は両側に側溝（溝ＳＤ12・13）を持つ道路で、Ｎ－10°－Ｗの方位に走向する。側溝と考えられる溝ＳＤ13の覆土から珠洲（4403）が１点出土していることから中世以降に帰属するものと思われる。本調査地区周辺では同時期の道路址は発見されていない。

道路址ＳＦ01は以下の工程を経て構築されたと推測される（第44図）。

1．側溝となる溝を掘削し、道路面を区画すると同時に排水を行う。
2．道路面となる部分に５cm～20cmほどの川原石を敷く。
3．川原石を敷いた上に溝を掘削した際に排出された第Ⅶ層（黄褐色粘質土）と砂を混ぜて盛土をする。
4．砂を敷いて整地する。

調査時に硬化面は検出されなかったことから、道路面はすでに削平されていた可能性が高い。また、川原石は周辺では採取できないことから、他所から運んで使用したものと思われる。その他、道路幅に対して側溝の規模が大きい。これは、本遺跡周辺の地勢に影響されていると考えられる。周辺の標高は１ｍ～２ｍと低く湧水が著しいのに加え、かつては馬入らずといわれたほどの強湿地帯であった。そのため、側溝は道路の区画という目的以外に、排水を行う役割が大きかったと考えられる。本調査地区で溝の検出数が突出して多いのもそういったことに起因していると思われる。また、基本層序（第42図）に見られるように第Ⅶ層以下は砂層で非常にもろいことから、湧水による侵食のため結果的に溝の幅が広がったということも考慮される。

中世の放生津は十三湊から敦賀湊への航路を中継する日本海海運の拠点であった。また、鎌倉時代中頃には越中守護所も置かれ越中における政治・経済・文化の中心として大いに栄えた。放生津湊から内陸への物資の運送は、街中を流れる内川などに代表される小河川を利用していた。今回検出された道路址はそういった小河川を利用した舟運に伴い整備された陸運のための道路であった可能性が考えられる。



第44図　中曽根西遺跡区画整理地区道路址ＳＦ01構築工程模式図

5．その他の遺跡・調査地区

その他の遺跡・調査地区　目次

1．中曽根館遺跡中曽根区画２地区 …… 67
2．石名瀬Ａ遺跡百本地区 …… 68
3．中曽根北遺跡能登地区 …… 69
4．守護町遺跡山本地区 …… 70
5．下老子笹川遺跡長沢地区 …… 71
6．東木津遺跡巻畑地区 …… 72・73
7．東木津遺跡町田地区 …… 74
8．越中国府関連遺跡魚川地区 …… 75
9．越中国府関連遺跡鳥地区 …… 76
10．石塚江之戸遺跡尾山地区 …… 77
11．井口本江遺跡ア・ライズ地区 …… 78
12．赤丸古村遺跡八幡地区 …… 79

No.	遺跡名	調査地区名	所在地	対象面積	発掘面積	調査期間
1	中曽根館遺跡	中曽根区画２地区	高岡市中曽根65 他	3,000㎡	138㎡	080407～080409
2	石名瀬A遺跡	西本地区	高岡市佐野667	499㎡	78㎡	080421～080423
3	中曽根北遺跡	能登地区	高岡市中曽根166－１番地	330㎡	23㎡	080519
4	守護町遺跡	山本地区	高岡市守護町245番地 他	386㎡	9㎡	080521
5	下老子笹川遺跡	長沢地区	高岡市福岡町一歩二歩465	1,087㎡	158㎡	080729～080805
6	東木津遺跡	巻堀地区	高岡市佐野879－１ 他	1,016㎡	99㎡	080730～080813
7	東木津遺跡	町田地区	高岡市佐野879－６ 他	474㎡	31㎡	080730～080813
8	越中国府関連遺跡	魚川地区	高岡市伏木東一宮1201番	248㎡	6㎡	080807
9	越中国府関連遺跡	鳥地区	高岡市伏木古府３丁目82－１	301㎡	16㎡	080820～080821
10	石塚江之戸遺跡	尾山地区	高岡市石塚225－１ 他	600㎡	41㎡	081126
11	井口本江遺跡	ア・ライズ地区	高岡市井口本江字江指廻27－１ 他	336㎡	8㎡	090107
12	赤丸古村遺跡	八幡地区	高岡市石堤267－１ 他	998㎡	39.2㎡	090109

第５表　その他の遺跡・調査地区一覧表

1．中曽根館遺跡
中曽根区画２地区

遺跡概観

当「中曽根館遺跡」は、高岡市街地の北東郊、ＪＲ高岡駅の北東約6.6㎞に位置する。周辺には神楽川等の河川が形成した沖積低地が拡がる。旧放生津潟（富山新港）等の低湿地に囲まれた標高１～２ｍの微高地上に位置する。

基本層序

基本層序は以下の通りである。

Ⅰ層　表土（耕作土）：約10～20㎝。
Ⅱ層　灰色粘質土：約10㎝。
Ⅲ層　灰褐色粘質土：約10㎝。
Ⅳ層　暗灰褐色粘質土：約５～15㎝。
Ⅴ層　黒褐色粘質土：約５㎝。
Ⅵ層　青灰色粘質土：地山層。

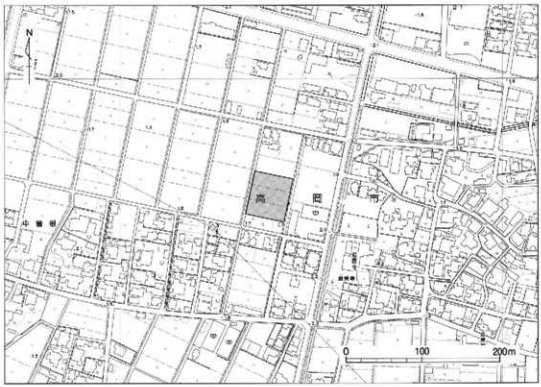
調査概要

所 在 地：高岡市中曽根65 他
対象面積：3,000㎡
発掘面積：138㎡
調査期間：平成20年４月７日～４月９日
調査原因：土地区画整理

調査結果

遺構は検出されなかった。遺物は出土しなかった。

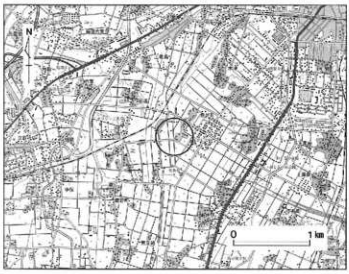
第45図　中曽根館遺跡位置図(１／５万)



第46図　中曽根館遺跡中曽根区画２地区位置図（１／5,000）

2．石名瀬Ａ遺跡

西本地区



第47図　石名瀬Ａ遺跡位置図（１／５万）

遺跡概観

当「石名瀬Ａ遺跡」は、高岡市街地の南西郊、ＪＲ高岡駅の南西約３kmに位置する。平成16年度から高岡環状線事業に伴い発掘調査が行われ、弥生時代から近代までの遺構・遺物が確認されている。

基本層序

基本層序は以下の通りである。

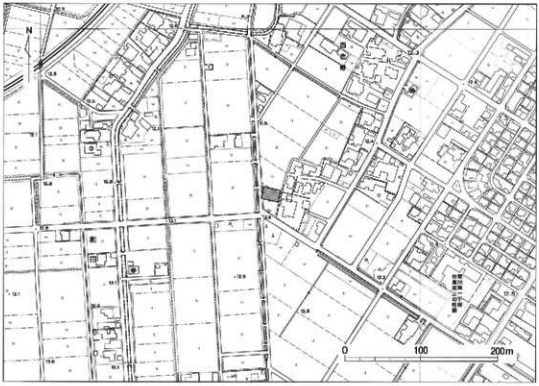
Ⅰ層　表土（耕作土）：約５cm。
Ⅱ層　褐灰色粘質土（床土）：約３cm。
Ⅲ層　暗褐色粘質土：約10cm。
Ⅳ層　にぶい黄褐色砂質土：地山層。
Ⅴ層　砂礫層：地山層。

調査概要

所 在 地：高岡市佐野667
対象面積：499㎡
発掘面積：78㎡
調査期間：平成20年４月21日～４月23日
調査原因：個人住宅の建設

調査結果

遺構は検出されなかった。遺物は珠洲が出土した。



第48図　石名瀬Ａ遺跡西本地区位置図（１／5,000）

3．中曽根北遺跡

能登地区

遺跡概観

当「中曽根北遺跡」は、高岡市街地の北東郊、ＪＲ高岡駅の北東約6.7㎞に位置する。当包蔵地は、光明寺敷在地遺跡及び薬師田木器出土地を併合したものである。周辺は神楽川等の河川が形成した沖積低地が拡がる。旧放生津潟（富山新港）等の低湿地に囲まれた標高１～２ｍの微高地上に位置する。

基本層序

基本層序は以下の通りである。

Ⅰ層　表土（盛土）：約10㎝。

Ⅱ層　黄褐色砂：約50㎝。

Ⅲ層　暗灰色粘質土：約10～15㎝。

Ⅳ層　緑灰色粘質土：地山層。

調査概要

所 在 地：高岡市中曽根166－１番地

対象面積：330㎡

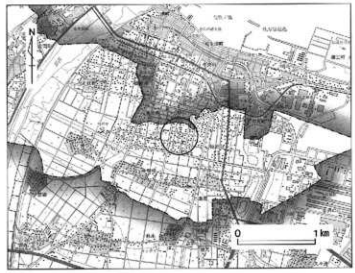
発掘面積：23㎡

調査期間：平成20年５月19日

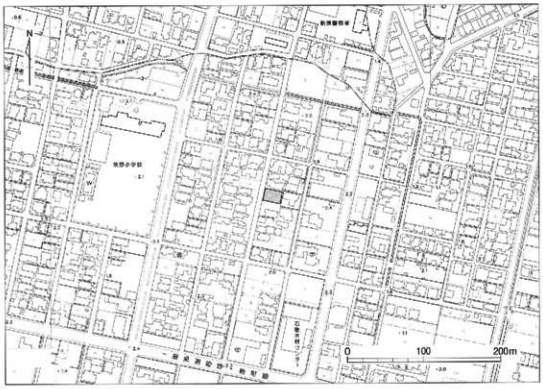
調査原因：個人住宅建設

調査結果

遺構は検出されなかった。遺物は出土しなかった。



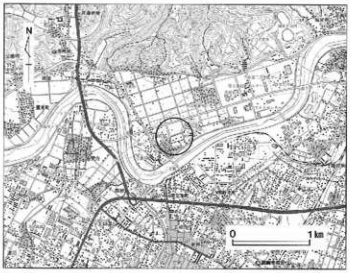
第49図　中曽根北遺跡位置図（１／５万）



第50図　中曽根北遺跡能登地区位置図（１／5,000）

4．守護町遺跡

山本地区



第51図　守護町遺跡位置図（1／5万）

遺跡概観

当「守護町遺跡」は、高岡市街地の北郊、ＪＲ高岡駅の北約3.1kmに位置する。北側には二上山が控え、西～南側には小矢部川が蛇行しながら流れる。この小矢部川と千保川との合流点北に位置する。

基本層序

基本層序は以下の通りである。

Ⅰ層　表土（耕作土）：約10～15cm。

Ⅱ層　暗灰色粘質土（旧耕作土）：15～20cm。

Ⅲ層　赤褐色シルト：地山層。

調査概要

所 在 地：高岡市守護町245番地 他

対象面積：386㎡

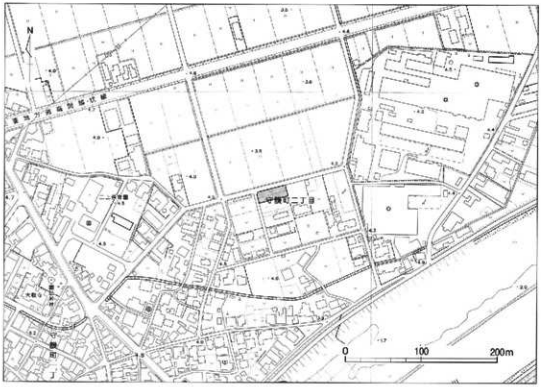
発掘面積：９㎡

調査期間：平成20年５月21日

調査原因：駐車場造成

調査結果

遺構は検出されなかった。遺物は出土しなかった。



第52図　守護町遺跡山本地区位置図（１／5,000）

5．下老子笹川遺跡
長沢地区

遺跡概観

当「下老子笹川遺跡」は、高岡市街地の南西郊、JR高岡駅の南西約7.2kmに位置する。

能越自動車道建設に伴う調査等により弥生時代中期～終末期の集落や多くの遺構が確認され、高岡における弥生時代の代表的な遺跡とされている。

基本層序

基本層序は以下の通りである。

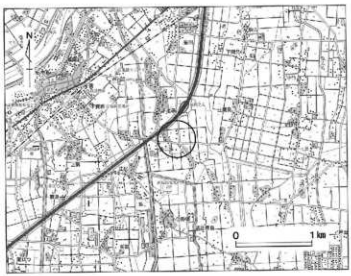
Ⅰ層　表土（盛土）：約50cm。
Ⅱ層　暗灰色粘質土（旧表土）：10～20cm。
Ⅲ層　灰褐色粘質土：５～10cm。
Ⅳ層　暗灰褐色粘質土：５～10cm。
Ⅴ層　黄褐色粘質土：５～10cm。遺構検出面。
Ⅵ層　灰白色粘質土：地山層。

遺跡概要

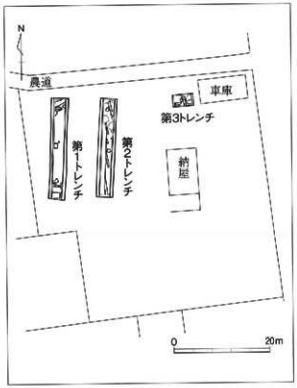
所 在 地：高岡市福岡町一歩二歩465
対象面積：1,087㎡
発掘面積：158㎡
調査期間：平成20年７月29日～８月５日
調査原因：個人住宅建設

調査結果

遺構は土坑、溝を検出した。遺物は土師器、須恵器、珠洲が出土した。



第53図　下老子笹川遺跡位置図（１／５万）

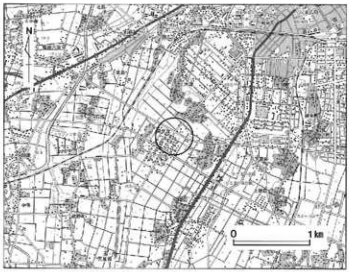


第55図　下老子笹川遺跡長沢地区　全体図（１／800）

第54図　下老子笹川遺跡長沢地区位置図（１／5,000）

6．東木津遺跡

巻端地区



第56図　東木津遺跡位置図（1／5万）

第57図　東木津遺跡巻端地区位置図（1／5,000）

遺跡概観

東木津遺跡はこれまでの調査成果から、整然とした建物配置や、出土した土器に占める食膳具の比率の高さ、木簡や墨書土器など文字資料が多く出土しているといった点から官衙的性格が指摘されている地域である。

基本層序

基本層序の層位は吉岡地区と同様の番号を用いている。Ⅲ・Ⅳ層は削平されていた。

Ⅰa層　表土：山砂による盛り土層。

Ⅰb層　旧表土

Ⅴ層　褐灰色土：古墳時代～古代の遺物包含層。

Ⅳ層　黒褐色土：Ⅵ層ブロック多量。

Ⅵ層　黄色砂質土：地山層。

調査概要

所 在 地：高岡市佐野879－１ 他

対象面積：1,016㎡

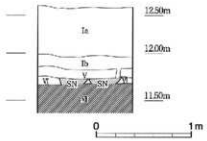
発掘面積：99㎡

調査期間：平成20年７月30日～８月13日

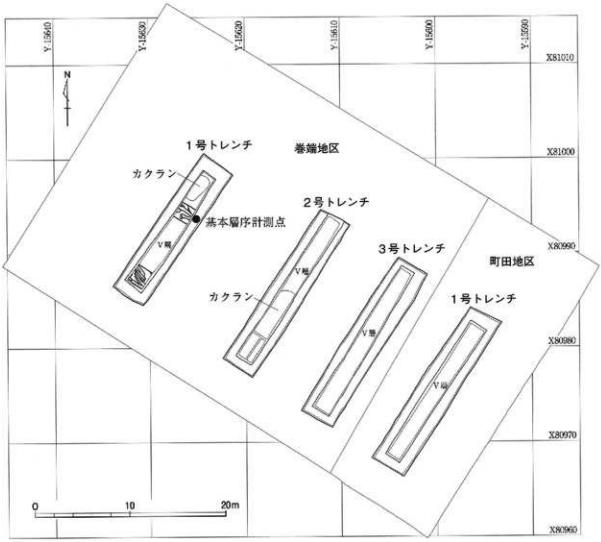
調査原因：個人住宅建設

調査結果

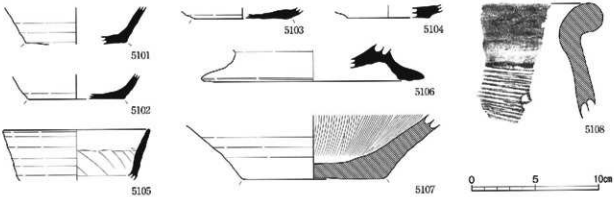
１号トレンチにおいて２箇所テストピットを設定しⅥ層まで掘削したところ、畝状遺構を検出した。周辺で検出されている畑址の範囲がさらに拡がることを確認した（第59図）。遺物はⅤ・Ⅵ層から出土した８点を図示した（第60図）。5101～5106は須恵器、5107・5108は珠洲である。珠洲については、Ⅲ・Ⅳ層が削平された際に混入した可能性が考慮される。5101～5104は杯Aの底部で5101～5103はヘラ切り、5104は糸切り未調整である。5105は杯の体部で内面にナデを施す。5106は壺の脚台部である。5107は鉢で底部は静止糸切り後ナデ、内面にはオロシ目が密に付く。5108は甕で外面は平行叩き後、記号文が刻印されている。



第58図　東木津遺跡巻端地区　基本層序（1／40）



第59図　東木津遺跡巻端地区・町田地区　全体図（1／400）



第60図　東木津遺跡巻端地区　出土遺物（1／3）
須恵器：5101～5106、珠洲：5107・5108

7．東木津遺跡

町田地区

遺跡概観

東木津遺跡はこれまでの調査成果から、整然とした建物配置や、出土した土器に占める食膳具の比率の高さ、木簡や墨書土器など文字資料が多く出土しているといった点から官衙的性格が指摘されている地域である。

基本層序

基本層序の層位は吉岡地区と同様の番号を用いている。Ⅲ・Ⅳ層は削平されていた。

Ⅰa層　表土：山砂による盛り土層。

Ⅰb層　旧表土

Ⅴ層　褐灰色土：古墳時代～古代の遺物包含層。

遺跡概要

所 在 地：高岡市佐野879－６ 他

対象面積：474㎡

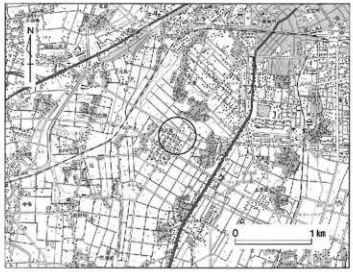
発掘面積：31㎡

調査期間：平成20年７月30日～８月13日

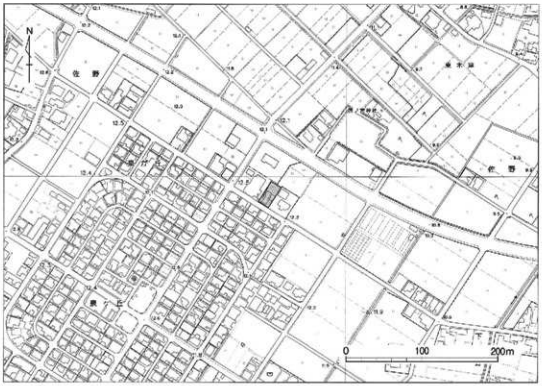
調査原因：個人住宅建設

調査結果

Ⅴ層が検出された段階で掘削を中止したため遺構は検出されなかったが、周辺の状況からⅤ層以下で遺構が検出される可能性が極めて高い。遺物はⅤ層から土師器、須恵器が出土している。

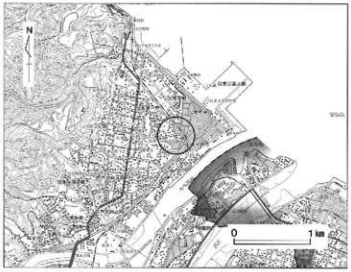


第61図　東木津遺跡位置図（１／５万）



第62図　東木津遺跡町田地区位置図（１／5,000）

8．越中国府関連遺跡
魚川地区



第63図　越中国府関連遺跡位置図（1／5万）

遺跡概観

当「越中国府関連遺跡」は、高岡市街地北東側、伏木台地一帯に位置する。この「越中国府関連遺跡」と総称している遺跡は、越中国庁跡推定地、県指定史跡越中国分寺跡、越中国分尼寺跡想定地を中心に、これらに関する施設や集落遺跡を含むものである。また、国府以前の古墳や寺院跡、以後の城郭跡等も当地内に存在している。

基本層序

基本層序は以下の通りである。

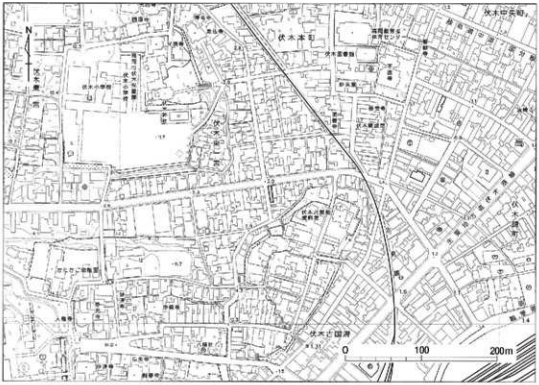
Ⅰ層　表土（整地層）：約15cm。
Ⅱ層　瓦廃棄層：50～60cm。
Ⅲ層　暗褐色粘質土：約50cm。
Ⅳ層　赤褐色粘質土：地山層。

調査概要

所 在 地：高岡市伏木東一宮1201番
対象面積：248㎡
発掘面積：6㎡
調査期間：平成20年８月７日
調査原因：個人住宅建設

調査結果

遺構は検出されなかった。遺物は出土しなかった。



第64図　越中国府関連遺跡魚川地区位置図（1／5,000）

9．越中国府関連遺跡

烏地区

遺跡概観

当「越中国府関連遺跡」は、高岡市街地北東側、伏木台地一帯に位置する。この「越中国府関連遺跡」と総称している遺跡は、越中国庁跡推定地、県指定史跡越中国分寺跡、越中国分尼寺跡想定地を中心に、これらに関する施設や集落遺跡を含むものである。また、国府以前の古墳や寺院跡、以後の城郭跡等も当地内に存在している。

基本層序

基本層序は以下の通りである。

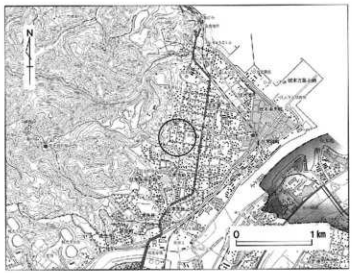
Ⅰ層　表土（盛土）：約90cm。
Ⅱ層　灰色粘質土、赤褐色粘質土の混土層：15cm。
Ⅲ層　暗赤褐色粘質土：15cm。
Ⅳ層　赤褐色粘質土、白色粘板ブロック：地山層。

調査概要

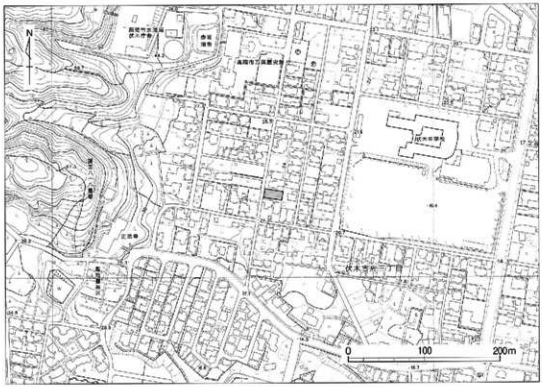
所 在 地：高岡市伏木古府３丁目82－１
対象面積：301㎡
発掘面積：16㎡
調査期間：平成20年８月20日～８月21日
調査原因：共同住宅建設

調査結果

遺構は検出されなかった。遺物は出土しなかった。



第65図　越中国府関連遺跡位置図（１／５万）



第66図　越中国府関連遺跡烏地区位置図（１／5,000）

10. 石塚江之戸遺跡
尾山地区

第67図　石塚江之戸遺跡位置図（1／5万）

遺跡概観

当「石塚江之戸遺跡」は、高岡市街地の南西郊、JR高岡駅の西南西約3.4kmに位置する。庄川の形成した扇状地の末端部、佐野台地の縁辺部にあたる。遺跡の西側を祖父川が北流し、遺跡中央部は都市計画道路下伏間江福田線が北西～南東方向に、遺跡東側には主要地方道戸出高岡線が南北方向に走る。

基本層序

基本層序は以下の通りである。

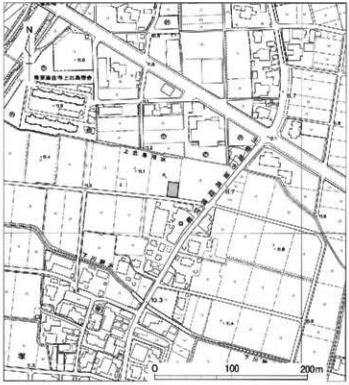
Ⅰ層　表土（盛土）：約100cm。
Ⅱ層　暗灰色粘質土（旧耕作土）：約15cm。
Ⅲ層　灰褐色粘質土（旧耕作土）：約15cm。
Ⅳ層　暗灰褐色粘質土（遺物包含層）：約25cm。
Ⅴ層　黄色粘質土：地山層

調査概要

所 在 地：高岡市石塚255－1 他
対象面積：600㎡
発掘面積：41㎡
調査期間：平成20年11月26日
調査原因：個人住宅建設

調査結果

遺構は土坑、溝を検出した。遺物は土師器、須恵器が出土した。



第68図　石塚江之戸遺跡尾山地区位置図（1／5,000）

第69図　石塚江之戸遺跡尾山地区　全体図（1／400）

11. 井口本江遺跡

ア・ライズ地区

遺跡概観

井口本江遺跡はＪＲ高岡駅の南東約1.5kmに位置する。東側を流れる庄川と、西側を流れる千保川とに挟まれた標高９～10mの沖積低地上にあり、井口本江集落の東側一帯、南北450m×東西300mの範囲にわたる遺跡である。

基本層序

基本層序は以下の通りである。

Ⅰ層　表土（耕作土）：50～60cm。

Ⅱ層　黒色粘質土（遺物包含層）：30～40cm。

Ⅲ層　黄色粘質土：地山層

調査概要

所 在 地：高岡市井口本江字江指廻27－１ 他

対象面積：336㎡

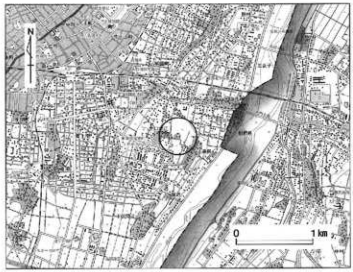
発掘面積：８㎡

調査期間：平成21年１月７日

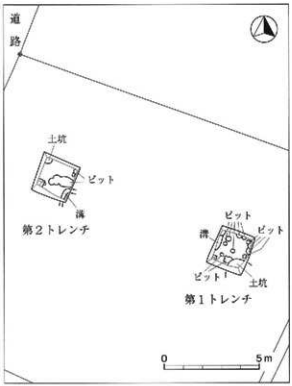
調査原因：宅地造成

調査結果

遺構は土坑、溝を検出した。遺物は弥生土器、須恵器が出土した。図示遺物は図面53－5201～5203である。5201は弥生土器壺で外面に刷毛目後ヘラ磨き、内面に刷毛目、5202は弥生土器甕で外面に刷毛目が見られる。5203は須恵器杯でロクロナデ調整が施される。



第70図　井口本江遺跡位置図（１／５万）



第72図　井口本江遺跡ア・ライズ地区　全体図（１／200）

第71図　井口本江遺跡ア・ライズ地区位置図（１／5,000）

12. 赤丸古村遺跡
八幡地区

遺跡概観

当「赤丸古村遺跡」は、高岡市街地の西方、ＪＲ高岡駅の西6.3km、ＪＲ西高岡駅の北西2.4km、小矢部川の左岸に位置する。高岡市の石堤地内の六市集落から谷内川を挟んで西側に隣接する旧福岡町の赤丸地内の古村集落にかけての遺跡である。

基本層序

基本層序は以下の通りである。

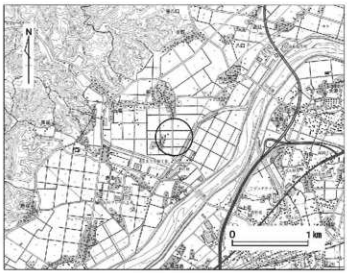
Ⅰ層　表土（耕作土）：約20cm。
Ⅱ層　青灰色砂（自然流路堆土）：28cm以上。
Ⅲ層　灰色粘質土：地山Ⅰ層。25～55cm。
Ⅳ層　暗灰色砂：地山Ⅱ層。15～20cm以上。
Ⅴ層　礫層：地山Ⅲ層。

調査概要

所 在 地：高岡市石堤267－１ 他
対象面積：998㎡
発掘面積：39.2㎡
調査期間：平成21年１月９日
調査原因：個人住宅、倉庫、車庫の建設

調査結果

遺構は検出されなかった。遺物は出土しなかった。



第73図　赤丸古村遺跡位置図（１／５万）

第74図　赤丸古村遺跡八幡地区位置図（１／5,000）

別　表　　土器類観察表

1．瑞龍寺遺跡、富山不動産地区 …… 80
　1－1．中世の土器類 …… 80
　1－2．近世の土器類 …… 80

2．東木津遺跡、吉岡地区 …… 81
　2－1．古代の土器類 …… 81
　　2－1－1．吉岡1地区 …… 81
　　2－1－2．吉岡2地区 …… 82
　2－2．中世の土器類 …… 83
　2－3．近世の土器類 …… 84

3．井口本江遺跡、栗林地区 …… 84
　3－1．弥生時代の土器類 …… 84
　3－2．古代の土器類 …… 84
　3－3．中世の土器類 …… 84

4．中曽根西遺跡、区画整理地区 …… 84
　4－1．弥生時代の土器類 …… 84
　4－2．古墳時代の土器類 …… 84
　4－3．古代の土器類 …… 84
　4－4．中世の土器類 …… 85
　4－5．近世の土器類 …… 85

5．その他の地区 …… 85
　5－1．東木津遺跡、巻端地区 …… 85
　5－2．井口本江遺跡、ア・ライズ地区 …… 85

番号	図面	種類	口径	特徴	出土位置
1．瑞龍寺遺跡、富山不動産地区					
1－1．中世の土器類					
1101	37	中世土師器・皿	－	底部はヘラ削り調整か。	4T東側拡張部
1102	37	中世土師器・皿	11.2	内面は横ナデ、外部はナデ。	2T拡張部南側
1103	37	珠洲・壺	－	内面は横ナデ、外面肩部は横ナデ、胴部はナデ。	5T
1104	37	青花・皿	－	景徳鎮産。見込み輪花文、外面草花文。	SU03
1－2．近世の土器類					
1201	37	肥前陶器・皿	14.8	底部はヘラ削り。外面体部上半～見込み灰釉。	調査地区西側
1202	37	肥前陶器・香炉	10.8	外面～見込み上半にかけて鉄釉。	調査地区西側
1203	37	肥前陶器・壺	8.5	底部は静止糸切り。天井部獅目、褐釉。	SU04
1204	37	肥前陶器・皿	－	底部静止糸切り。見込み～外面褐釉。	SU04
1205	37	肥前陶器・瓶	5.8	見込み～外面鉄釉。	SD05
1206	37	肥前陶器・皿	23.8	三島手皿。見込み～外面鉄釉。口縁部見込みに白土による印花文。	5T東側拡張部
1207	37	福岡・碗	11.0	見込みは鉄釉と薬灰釉の掛分け。外面は体部上半に鉄釉。	4T西側拡張部
1208	37	関西系・皿	－	見込みに梅花文。	4T西側拡張部
1209	37	瀬戸美濃・皿	10.9	底部回転糸切り。見込み～外面体部上半に鉄釉。	4T東側拡張部

調査地区全体図　縮尺1／200

図面〇一　遺構実測図　瑞龍寺遺跡富山不動産地区

図面二〇一　遺構実測図　瑞龍寺遺跡富山不動産地区

番号	図面	種　　類	口径	特　　徴	出土位置
1210	37	瀬戸美濃・皿	－	底部は回転糸切り後、削り出し高台。見込み～外面体部上半に灰釉。	ＳＤ05
1211	37	越中瀬戸・皿	11.6	輪花皿。外面は体部下半ヘラ削り。見込み～外面体部に鉄釉。	１Ｔ拡張部
1212	37	越中瀬戸・皿	－	見込み～外面の体部に灰釉。見込みの底部に花文を陰刻。	１Ｔ表土
1213	37	越中瀬戸・皿	－	外面の体部下半はヘラ削り。見込み～外面の体部に鉄釉。	１Ｔ
1214	37	越中瀬戸・皿	－	外面は体部下半はヘラ削り。見込み～外面の体部に灰釉。	調査地区西側
1215	37	在地・香炉	11.2	見込み～外面灰釉。外面の口縁部に連続する蕨手文。	調査地区西側
1216	37	肥前磁器・碗	－	見込みは二重圏線内に花弁文、外面雑文。	調査地区西側
1217	37	肥前磁器・碗	－	体部外面に松、底部付近に渦の連続文。	ＳＵ04
1218	37	肥前磁器・碗	－	体部外面に桐文、下端に圏線文、高台に２条の帯線文、底部に圏線文。	ＳＤ05

２．東本津遺跡、古岡地区

２－１．古代の土器類

２－１－１．古岡１地区

2101	45	土師器・杯	－	内外面赤彩。体部外面手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ削り。	１ＴⅣ層
2102	45	土師器・甕	19.5	頸部外面にカキ目。	ＳＤ14
2103	45	土師器・鍋	13.8	外面に煤付着。	１ＴⅣ層
2104	45	須恵器・杯Ａ	14.0	底部はヘラ切り。	２ＴＶ層
2105	45	須恵器・杯Ａ	13.6	底部はヘラ切り。	ＳＤ14
2106	45	須恵器・杯Ａ	13.0	底部はヘラ切り。	１ＴＶ層
2107	45	須恵器・杯Ａ	12.8	底部はヘラ切り。	２ＴⅣ層
2108	45	須恵器・杯Ａ	12.0	底部はヘラ切り。	２ＴⅥ層
2109	45	須恵器・杯Ａ	12.0	底部はヘラ切り。	２ＴⅣ･Ⅵ層
2110	45	須恵器・杯Ａ	11.8	底部はヘラ切り。	２ＴⅥ層
2111	45	須恵器・杯Ａ	11.8	底部はヘラ切り。	１ＴⅣ･Ⅵ層
2112	45	須恵器・杯Ａ	11.8	底部はヘラ切り。胎土に骨針を含む。	ＳＸ01
2113	45	須恵器・杯Ａ	11.8	底部はヘラ切り。	ＳＤ14
2114	45	須恵器・杯Ａ	11.8	底部はヘラ切り。	１ＴⅣ層
2115	45	須恵器・杯Ａ	11.7	底部はヘラ切り。	ＳＸ01
2116	45	須恵器・杯Ａ	11.6	底部はヘラ切り。	ＳＤ14
2117	45	須恵器・杯Ａ	11.5	底部はヘラ切り。胎土に骨針を含む。	ＳＤ14
2118	45	須恵器・杯Ａ	11.3	底部はヘラ切り。口縁部に油漆付着。胎土に骨針を含む。	ＳＤ14
2119	45	須恵器・杯Ａ	10.4	底部はヘラ切り。	１ＴⅣ･Ⅴ層
2120	45	須恵器・杯Ａ	－	底部はヘラ切り。胎土に骨針を含む。	２ＴＶ･Ⅵ層
2121	45	須恵器・杯Ａ	－	底部はヘラ切り。	ＳＸ01炭化物層
2122	45	須恵器・杯Ａ	－	底部は回転糸切り。胎土に骨針を含む。	１ＴⅣ層
2123	45	須恵器・杯Ｂ	11.9	底部はヘラ切り。	１ＴⅣ層
2124	45	須恵器・杯Ｂ	11.7	底部はヘラ切り。	ＳＤ17
2125	45	須恵器・杯Ｂ	11.0	底部はヘラ切り。	１ＴⅥ層
2126	45	須恵器・杯Ｂ	10.8	底部はヘラ切り。	１ＴⅣ～Ⅵ層
2127	45	須恵器・杯Ｂ	－		ＳＫ20
2128	45	須恵器・杯Ｂ	－	底部はヘラ切り。	２ＴⅣ層
2129	45	須恵器・杯Ｂ	－	底部はヘラ切り。	２ＴⅣ層

番号	図面	種類	口径	特徴	出土位置
2130	45	須恵器・杯B	－	底部はヘラ切り。内面に漆付着。	１TV層
2131	46	須恵器・杯B	15.8		１TV層
2132	46	須恵器・杯B	15.6		ＳK20
2133	46	須恵器・杯B	10.8		２TW層
2134	46	須恵器・杯蓋	17.0	天井部は回転ヘラ削り調整。	１TV層
2135	46	須恵器・杯蓋	15.5	天井部はヘラ削り調整。天井部下端及び、端部に１条の沈線。	ＳD14
2136	46	須恵器・杯蓋	16.0	天井部はヘラ切り。	２TV層
2137	46	須恵器・杯蓋	14.9	天井部はヘラ切り。	ＳK20
2138	46	須恵器・杯蓋	13.1	天井部はヘラ切りで、宝珠形つまみが付く。外面に自然釉付着。	１TW・V層
2139	46	須恵器・杯蓋	12.9	天井部はヘラ切りで、ボタン状のつまみが付く。	ＳK21
2140	46	須恵器・杯蓋	13.4	天井部はヘラ切り。	ＳD14
2141	46	須恵器・杯蓋	12.6	天井部はヘラ削り調整。内面ナデ調整。	２TW層
2142	46	須恵器・杯蓋	12.1	天井部はヘラ削り調整で、宝珠形つまみが付く。	３TW層
2143	46	須恵器・杯蓋	11.8	天井部はヘラ切りで、宝珠形つまみが付く。	１TW層
2144	46	須恵器・杯蓋	11.6	天井部はヘラ切り。胎土に骨針を含む。	１TV層
2145	46	須恵器・杯蓋	11.6	天井部はヘラ切り。	１TW層
2146	46	須恵器・杯蓋	11.2	天井部はヘラ切りで、宝珠形つまみが付く。	１TW層
2147	46	須恵器・短頸壺	15.6	外面に自然釉付着。	２TⅢ・W層
2148	46	須恵器・壺	21.1	内外面に自然釉付着。	１地区　一括
2149	46	須恵器・瓶	5.8		ＳD14
2150	46	須恵器・壺蓋	16.8	天井部下端に１条の沈線。	１TV・V層
2151	46	須恵器・壺蓋	－	二重宝珠つまみ。	１TW層
2152	46	須恵器・甕	35.6	胴部外面平行叩き、内面当て具痕→カキ目。	２TV・VI層
2153	46	須恵器・甕	38.7		２TW層
2154	46	須恵器・甕	34.6	内面カキ目。	２TV層
2－1－2．吉岡２地区					
2201	47	土師器・皿	12.0	底部は回転糸切り。	V層
2202	47	土師器・甕	30.6	胴部上半に２つの把手。	VI層
2203	47	土師器・鍋	35.5	外面は頸部下に横位のカキ目。内面は口縁部下から横位のカキ目。	ＳD24
2204	47	土師器・鍋	34.1	内外面横ナデ。	V・VI層
2205	47	土師器・甕	－	外面は胴部横位の刷毛目、底部付近横ナデ。内面縦位の刷毛目。	ＳB05P6
2206	47	製塩土器	－	尖底。外面はナデ調整、指圧痕。内面縦位の刷毛目。	ＳD22
2207	47	須恵器・杯A	12.9	底部はヘラ切り。	V・VI層
2208	47	須恵器・杯A	12.9	底部はヘラ切り。	調査地区　一括
2209	47	須恵器・杯A	11.9	底部はヘラ切り。	V・VI層
2210	47	須恵器・杯A	11.9	底部はヘラ切り。	ＳK25
2211	47	須恵器・杯A	11.8	底部はヘラ切り。	V層
2212	47	須恵器・杯A	11.8	底部はヘラ切り。	V・VI層
2213	47	須恵器・杯A	11.8	底部はヘラ切り。	ＳN03
2214	47	須恵器・杯A	11.3	底部はヘラ切り。	V・VI層

番号	図面	種類	口径	特徴	出土位置
2215	47	須恵器・杯A	10.8	底部はヘラ切り。	S K21
2216	47	須恵器・杯A	－	底部はヘラ切り。	S B06P 4
2217	47	須恵器・杯A	－	底部は回転糸切り。内面は平滑。	調査地区一括
2218	47	須恵器・杯A	－	底部はヘラ切り。	調査地区一括
2219	48	須恵器・杯B	14.9		S B06P 5
2220	48	須恵器・杯B	11.8	底部はヘラ切り。	Ⅵ層
2221	48	須恵器・杯B	11.8	底部はヘラ切り。	Ⅴ・Ⅵ層
2222	48	須恵器・杯B	11.4	内面に漆付着。	Ⅴ・Ⅵ層
2223	48	須恵器・杯B	11.3	底部はヘラ切り。	S N03
2224	48	須恵器・杯B	11.1	底部はヘラ切り。	S N03
2225	48	須恵器・杯B	－		S N03
2226	48	須恵器・杯B	－		S D20
2227	48	須恵器・杯B	－	底部は手持ちヘラ削り。内面はナデ調整。	Ⅴ・Ⅵ層
2228	48	須恵器・杯B	－	底部はヘラ切り。内面に漆付着。	S N03
2229	48	須恵器・杯B	－	底部はヘラ削り調整。体部は手持ちヘラ削り。	S D25
2230	48	須恵器・杯B	－	稜杯。底部はヘラ切り。	S D25
2231	48	須恵器・杯B	－	底部はヘラ切り。	Ⅳ層
2232	47	須恵器・杯B	14.7		Ⅴ・Ⅵ層
2233	47	須恵器・杯B	13.8		S D18
2234	47	須恵器・杯B	11.0	内面の口縁端部に油煙付着。	Ⅴ層
2235	48	須恵器・杯蓋	12.2	天井部はヘラ切りで、宝珠形つまみが付く。	S N03
2236	48	須恵器・杯蓋	11.5	天井部はヘラ切りで、ボタン状のつまみが付く。	Ⅴ・Ⅵ層
2237	48	須恵器・杯蓋	16.7	天井部はヘラ削り調整。	Ⅴ・Ⅵ層
2238	48	須恵器・杯蓋	11.0	天井部はヘラ削り調整。	S P01
2239	48	須恵器・杯蓋	11.6	天井部はヘラ切り。	Ⅳ・Ⅴ層
2240	48	須恵器・壺	21.9	内面に自然釉付着。	Ⅴ・Ⅵ層
2241	48	須恵器・瓶	－	凸帯付及耳瓶。内面横ナデ。	Ⅴ・Ⅵ層
2242	48	須恵器・壺	－	脚台部。	S D18
2243	48	灰釉陶器・皿	19.8	底部はヘラ削り後横ナデ。内面に灰釉、重ね焼き痕。	S K26
2244	48	緑釉陶器・皿	16.6	内外面緑釉。	S D24

2－2．中世の土器類

2301	49	白磁・皿	－	見込みに重ね焼き痕。底部外部に墨書。	2 T Ⅲ層
2302	49	珠洲・鉢	36.7	内面にオロシ目が付く。	S D24
2303	49	珠洲・鉢	27.1		2 地区一括
2304	49	珠洲・壺	－	内外面胴部下位横ナデ。胴部外面平行叩き、内面ナデ。胎土に骨針。	1 T Ⅳ層
2305	49	珠洲・壺	－	胴部は外面叩き、内面当て具痕。	1 地区一括
2306	49	珠洲・壺	－	底部は静止糸切り、離れ砂。胎土に骨針を含む。	1 T Ⅳ層
2307	49	珠洲・甕	－	外面平行叩き、内面当て具痕。口縁部は内外面横ナデ。	2 地区一括
2308	49	珠洲・甕	－	外面平行叩き、内面当て具痕。胎土に骨針を含む。	2 地区Ⅴ層
2309	49	珠洲・甕	－	外面平行叩き、内面当て具痕。	1 T Ⅳ層
2310	49	珠洲・甕	－	外面平行叩き、内面当て具痕。胎土に骨針を含む。	S D 24

番号	図面	種　類	口径	特　徴	出土位置
2311	49	珠洲・甕	－	外面格子状叩き、内面当て具痕。胎土に骨針を含む。	2地区一括
2－3．近世の土器類					
2401	49	越中瀬戸・皿	11.1	底部は削り出し高台。見込み上半～外面に鉄釉。	S D24
2402	49	越中瀬戸・皿	－	底部は削り出し高台。見込みに鉄釉。底部に糸切痕。	2地区一括
3．井口本江遺跡、栗林地区					
3－1．弥生時代の土器類					
3101	53	弥生土器・壺	－	外面は刷毛目後、等間隔止め簾状文・直線文・同心円文。内面は刷毛目。	S D01
3102	53	弥生土器・壺	－	外面は刷毛目後、直線文と波状文・等間隔止め簾状文。内面はナデ。	S D01
3103	53	弥生土器・甕	－	外面は刷毛目後、胴部に刷毛状具による刺突文。内面は刷毛目後、ナデ。	S D01
3104	53	弥生土器・器台	－	透穴計8箇所。外面は刷毛目後ヘラ磨き。突帯は刷毛状具の刻み。	S D01
3105	53	弥生土器・器台	－	外面はヘラ磨き。内面はナデ。外面赤彩。	S K06
3106	53	弥生土器・鉢	12.2	外面は口縁部ナデ、胴部刷毛目。内面はナデ。	S D01
3107	53	弥生土器・甑	－	外面はヘラ磨き、内面は刷毛目、底面に4箇所穿孔。	S D01
3108	53	弥生土器・壺	－	外面は底部下端および底面ヘラ削り、内面は刷毛目・ナデ。	S D01
3109	53	弥生土器・甕	－	外面はナデ。内面は刷毛目後ナデ。	S K06
3110	53	弥生土器・壺	－	外面はナデ。内面はナデ。	S K06
3111	53	弥生土器・甕	－	外面は底部刷毛目、底面刷毛目後ナデ。内面はナデ。	S D01
3－2．古代の土器類					
3201	53	須恵器・杯B	－	底部は回転糸切り。	S K06
3202	53	須恵器・蓋	13.6	外面に自然釉付着。	S K06
3－3．中世の土器類					
3301	53	中世土師器・皿	13.7	口縁部はロクロナデ。体部下端ナデ。	S K06
3302	53	中世土師器・皿	9.4	口縁部はロクロナデ。体部下端ナデ。	S K06
4．中曽根西遺跡、区画整理地区					
4－1．弥生時代の土器類					
4101	55	弥生土器・壺	14.6	胴部外面刷毛目、内面ナデ。頸部及び口縁部内面に斜行短線文。	S X01
4102	55	弥生土器・壺	－	内外面ナデ。	S X01
4－2．古墳時代の土器類					
4201	55	土師器・高杯	15.0	外面横ナデ。内面ナデ。	E02T Ⅱ層
4202	55	土師器・台付甕	－	体部は外面ヘラ削き、内面刷毛目。脚台部はナデ。	B13T Ⅱ層
4－3．古代の土器類					
4301	55	土師器・杯	－	摩滅が著しい。	D区一括
4302	55	須恵器・杯A	11.5	底部は回転ヘラ切り後ナデによる調整。	E02T一括

番号	図面	種　　類	口径	特　　徴	出土位置
4－4．中世の土器類					
4401	55	瀬戸美濃・碗	－	天目碗の削り出し高台部。見込みに鉄釉。	E01T I 層
4402	55	珠洲・壺	－	外面は胴部横ナデ、胴部平行叩き。胎土に骨針を含む。	E01T I 層
4403	55	珠洲・甕	－	外面は平行叩き。胎土に骨針を含む。	S D13覆土
4404	55	珠洲・甕	－	外面は平行叩き。	E01T I 層
4－5．近世の土器類					
4501	55	越前・甕	45.8	内・外面鉄釉。	B04T II 層
4502	55	肥前陶器・碗	12.4	見込みは鉄釉。外面は灰粕。	B13T I 層
4503	55	肥前陶器・皿	－	見込みは灰釉、蛇の目釉剥ぎ取り。	B17T一括
4504	55	肥前陶器・皿	－	見込み～外面に白土による刷毛目。	B13T一括
4505	55	肥前陶器・皿	－	外面の体部下端ヘラ削り。見込み～外面体部に灰釉。	B08T I 層
4506	55	肥前陶器・皿	－	外面はヘラ削り、見込みは横ナデ。	F09T I 層
4507	55	越中瀬戸・碗	15.4	見込み～外面に鉄釉。	C05T I 層
4508	55	越中瀬戸・皿	12.6	底部は削り出し高台。見込み～外面の体部に鉄釉。	B04T III 層
4509	55	越中瀬戸・皿	－	底部は削り出し高台。外面に部分的に鉄釉付着。	B15T II・IV 層
4510	55	越中瀬戸・碗	－	底部は削り出し高台。外面体部上半に鉄釉。	E08T III 層
4511	55	越中瀬戸・皿	10.8	底部は削り出し高台。見込み～外面の体部に鉄釉。	B13T一括
4512	55	越中瀬戸・瓶	－	底部は静止糸切り。見込み～外面に部分的に鉄釉付着。	C03T III 層
4513	55	非在地陶器・碗	－	外面に白釉。	B08T一括
4514	55	肥前磁器・碗	10.2	口縁部に帯線文。体部は圏線内に岩・雲文・草花文。	B09T I 層
5．その他の地区					
5－1．東木津遺跡、巻浦地区　※図面番号は掲図番号を指す。					
5101	60	須恵器・杯A	－	底部はヘラ切り。	1TV層
5102	60	須恵器・杯A	－	底部はヘラ切り。	3T一括
5103	60	須恵器・杯A	－	底部はヘラ切り。	3T一括
5104	60	須恵器・杯A	－	底部は回転糸切り未調整。	2T一括
5105	60	須恵器・杯	11.5	内面はナデ調整。	1TV層
5106	60	須恵器・壺	－	脚台部。	3T一括
5107	60	珠洲・鉢	－	底部は静止糸切り後ナデ。内面はオロシ目が密に付く。	1T一括
5108	60	珠洲・甕	－	外面は平行叩き後紀号文を刻印。内面は無文の当て具痕、口縁部横ナデ。	3T一括
5－2．井口本江遺跡、ア・ライズ地区					
5201	53	弥生土器・壺	24.2	外面は刷毛目後、ヘラ磨き。内面は横毛目。	1T
5202	53	弥生土器・甕	－	外面は横毛目。内面はナデ。底面はヘラ状具。	1TI層
5203	53	須恵器・杯	12.4		1TI層

参考文献

池野　正男　2008　「越中国における古代の建物調査の現状－屋と倉を中心として－」『生産の考古学』Ⅱ
倉田芳朗先生追悼論文集編集委員会

今枝　愛眞　1976　『道元－坐禅ひとすじの沙門－』　日本放送出版会

上田　尚矢　1998　「富山県内の石庖丁について－下老子笹川遺跡出土の新資料から－」『富山考古学研究』
紀要創刊号　富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

上野　幸夫　1996　「甦る日本…の禅宗伽藍－高岡山瑞龍寺－」　富山県民生涯学習カレッジ

上野　幸夫他　2006　「重要文化財瑞龍寺山門他七棟保存修理報告書」　宗教法人瑞龍寺

上野　幸夫　2008　「赤祖父神社木殿（旧瑞龍寺鎮守堂）」『下関村史』　下関村史編纂委員会

上原　真人　1990　「平瓦製作技法の変遷－近世瓦技術成立の前提－」『今里幾次先生古希記念播磨考古学論
叢』　今里幾次先生古希記念論文集刊行会

上原　真人　1997　『歴史発掘11－瓦を読む』　講談社

宇野　隆夫　1991　『律令社会の考古学的研究－北陸を舞台として－』　桂書房

大橋　康二　1994　『古伊万里の文様』　理工学社

大脇　潔　1991　「研究ノート　丸瓦の製作技術」『研究論集』Ⅸ　奈良国立文化財研究所

岡本淳一郎他　1999　「佐野台地における古墳出現期の土器について」『富山考古学研究』紀要第２号
財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

垣内光次郎他　2001　「近世・近代の瓦」『新修小松市史資料編３－九谷焼と小松瓦』　小松市

木田　清　1999　「石製収穫具」『石川県考古資料調査・集成事業報告所　農工具』　石川考古学研究会

京田　良志　1979　「高岡山瑞龍寺の草創」『日本海域の歴史と文化』　文献出版

久々　忠義他　1994　「射水平野の遺跡－神楽川流域を探る－」『大境』第16号　富山考古学会

久々　忠義他　1996　「射水平野の遺跡－古代北陸道を探る－」『大境』第18号　富山考古学会

久々　忠義　2004　「古代射水川と放生津潟」『潟・潟・川をめぐる日本海文化』Ⅰ　富山市日本海文化研究所

栗山　雅夫他　2008　『高岡市前山墓所調査報告』　高岡市教育委員会

酒井　重洋　1997　「富山県の石器組成の変遷」『農耕開始期の石器組成』４　国立歴史民俗博物館

酒井　龍一　1985　「磨製石庖丁」『弥生文化の研究』第５巻道具と技術１　雄山閣

佐藤　俊晃　1999　「『白山』の位相」『神とその歴史』　せりかん社

佐原　真　1972　「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌』第58巻代２号　日本考古学会

大伴　泰史他　1997　『しんみなとの歴史』　新湊市

関口　欣也他　1997　『[国宝]高岡山瑞龍寺』　（瑞龍寺国宝指定記念出版刊行委員会編）北日本新聞社

田中　徳美　2008　『加賀藩大工の研究－建築の技術と文化－』　桂書房

高柳　由紀子　2006　「玉作りについて」『下老子笹川遺跡発掘調査報告－能越自動車道設に伴う埋蔵文化財発掘報
告Ⅴ－』　財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

中野　由紀子　1998　「下老子笹川遺跡出土の管玉について」『富山考古学研究』紀要創刊号
財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

中野　由紀子　1999　「富山県の管玉製作について－弥生時代後期の遺跡を中心に－」『富山考古学研究』
紀要第２号　財団法人富山文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

福海　貴子　2003　「第Ⅶ章第１節八日市地方遺跡出土土器の検討」『八日市地方遺跡Ⅰ－小松駅東土地区画整理
事業に係る埋蔵文化財発掘報告書－』　石川県小松市教育委員会

藤井　忠介他　1938　『国宝瑞龍寺仏殿及び法堂修理工事報告』　国宝瑞龍寺仏殿及び法堂修理事務所
2005　文生書院　復刻版

細江　真理　2005　「中谷内遺跡出土の弥生時代石製農具」『富山考古学研究』紀要第８号
財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
本郷　真紹　2001　『白山信仰の源流－泰澄の生涯と古代仏教－』　法藏館
前田　速夫　2006　『白の民俗学へ－白山信仰の謎を追って－』　河出書房新社
松尾　実　2004　「石川県における磨製石庖丁研究についての現状と若干の考察」
『石川県埋蔵文化財情報』第12号　財団法人石川県埋蔵文化財センター
岡坂　儀三郎　1966　「放生津潟西岸の牧野地区内古代遺跡」『放生津潟周辺の地学的研究』第三集
伏木富山港工事事務所
水島　清他　2001　『北陣の瓦の歩み』　社団法人日本セラミックス協会北陣支部
森田　克行　1984　『祇津高槻城－本丸跡発掘調査報告書』　高槻市教育委員会
森本　六爾　1941　「石庖丁の諸形態と分布」『日本農耕文化の起原　考古學上より見たる日本原始農業の研究』
葦牙書房
安　英樹　1995　「北陣の大陣系磨製石器」『考古学ジャーナル』No.391　ニューサイエンス社
山本　正敏他　1996　『梅原胡麻堂遺跡発掘調査報告』　財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

『越中國高岡山瑞龍閣記』については下記のものを参照

『高岡史料下巻』　高岡市役所編纂　1909
　復刻版　株式会社名著出版　1972

『景周先生小著集』　石川県図書館協会　1938
　復刻版　石川県図書館協会　1972

『高岡山瑞龍寺。　瑞龍寺国宝保存委員会・高岡市立博物館・富山新聞社　1981
　訓読、小島威彰

『越中国高岡山瑞龍閣記』　高岡山瑞龍寺　1996
　口訳、小島威彰

報告書抄録

ふりがな	しないいせきちょうさがいほうじゅうきゅう
書名	市内遺跡調査概報XIX
副書名	平成20年度、瑞龍寺遺跡・鎮守堂址の調査他
シリーズ名	高岡市埋蔵文化財調査概報
シリーズ番号	第68冊
編著者名	山口辰一
編集機関	高岡市教育委員会
所在地	〒933-8601　富山県高岡市広小路7番50号
発行年月日	西暦　2010年2月26日

ふりがな 所収遺跡	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
瑞龍寺遺跡 富山不動産地区	富山県高岡市 関本町86他	016202	202145	36° 44′ 10″	137° 0′ 42″	080512 ～ 080716	750㎡	住宅建設
東木津遺跡 吉岡地区	富山県高岡市 佐野891-1他	016202	202150	36° 43′ 46″	136° 59′ 34″	080402 ～ 080813	583㎡	店舗建設
井口本江遺跡 栗林地区	富山県高岡市 井口本江字 江指廻21-1他	016202	202138	36° 43′ 55″	137° 1′ 50″	080911 ～ 080918	42㎡	車庫建設
中曽根西遺跡 区画整理地区	富山県高岡市 中曽根 541番地他	016202	202120	36° 46′ 13″	137° 4′ 20″	081008 ～ 081216	983㎡	住宅建設
その他の遺跡 ・各調査地区	富山県 高岡市内	016202				080407 ～ 090109		住宅建設等

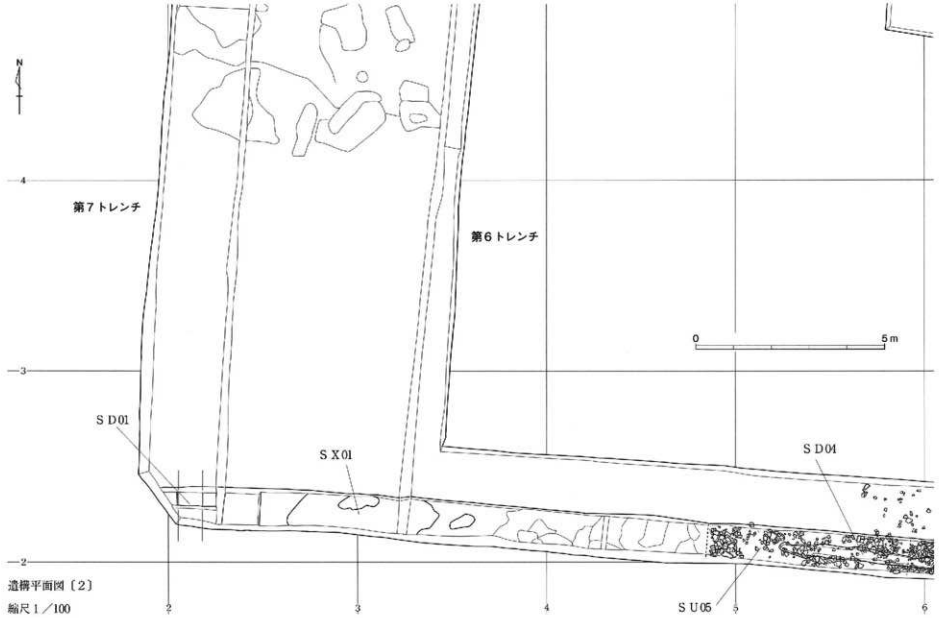
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
瑞龍寺遺跡 富山不動産地区	寺院	江戸～明治時代	神社址、瓦溜り 土坑、溝 根石、集石	土師器、珠洲 近世陶磁器 燻し瓦、釉薬瓦	文献資料に記された鎮守堂址と推定する遺構を確認。
東木津遺跡 吉岡地区	集落跡	古墳時代 奈良・平安時代 中　世	掘立柱建物址 土坑、溝 畝状遺構	土師器、須恵器 緑釉陶器、製塩土器 珠洲、鍛冶関連遺物	集落を区画する溝と、鍛冶関連遺物廃棄土坑を確認。
井口本江遺跡 栗林地区	集落跡	弥生時代 奈良・平安時代	土坑、溝	弥生土器、土師器 須恵器、石製品	弥生時代中期～後期の溝を確認。
中曽根西遺跡 区画整理地区	集落跡	弥生時代 中世 近世	道路址、土坑、溝	弥生土器、土師器 須恵器、珠洲 中近世陶磁器	中世の道路址を確認。
その他の遺跡 ・各調査地区	中曽根館遺跡、石名瀬A遺跡、中曽根北遺跡、守護町遺跡、下老子笹川遺跡、東木津遺跡、越中国府関連遺跡、石塚江之戸遺跡、井口本江遺跡、赤丸古村遺跡				

図　　面

図面目次

図面01	遺構実測図	瑞龍寺遺跡富山不動産地区	調査地区全体図（1／200）
図面02	遺構実測図	瑞龍寺遺跡富山不動産地区	遺構平面図〔1〕（1／100）
図面03	遺構実測図	瑞龍寺遺跡富山不動産地区	遺構平面図〔2〕（1／100）
図面04	遺構実測図	瑞龍寺遺跡富山不動産地区	遺構平面図〔3〕（1／100）
図面05	遺構実測図	瑞龍寺遺跡富山不動産地区	遺構平面図〔4〕（1／100）
図面06	遺構実測図	瑞龍寺遺跡富山不動産地区	地形址ＳＢ01－ｓｂ01実測図（1／60）
図面07	遺構実測図	瑞龍寺遺跡富山不動産地区	地形址ＳＢ01－ｓｂ01、調査地区東側土層断面図（1／40）
図面08	遺構実測図	瑞龍寺遺跡富山不動産地区	道路址ＳＢ01－ｓｔ01、掘え方列ＳＢ01－ｓａ01Ｐ２・ｓａ02Ｐ２実測図〔1〕（1／40）
図面09	遺構実測図	瑞龍寺遺跡富山不動産地区	道路址ＳＢ01－ｓｔ01、掘え方列ＳＢ01－ｓａ01Ｐ２・ｓａ02Ｐ２実測図〔2〕（1／40）
図面10	遺構実測図	瑞龍寺遺跡富山不動産地区	瓦溜りＳＵ05・06実測図〔1〕（1／40）
図面11	遺構実測図	瑞龍寺遺跡富山不動産地区	瓦溜りＳＵ06・07実測図〔2〕（1／40）
図面12	遺構実測図	瑞龍寺遺跡富山不動産地区	溝ＳＤ02・05実測図（1／40）
図面13	遺構実測図	瑞龍寺遺跡富山不動産地区	第１トレンチ北側拡張部、溝ＳＤ07実測図（1／40）
図面14	遺構実測図	瑞龍寺遺跡富山不動産地区	溝ＳＤ01実測図（1／40）
図面15	遺構実測図	瑞龍寺遺跡富山不動産地区	瓦溜りＳＵ01・02実測図（1／20）
図面16	遺構実測図	瑞龍寺遺跡富山不動産地区	根石ＳＳ01、集石ＳＳ02実測図（1／40）
図面17	遺構実測図	東木津遺跡吉岡地区	調査地区全体図（1／300）
図面18	遺構実測図	東木津遺跡吉岡地区	遺構平面図〔1〕（1／200）
図面19	遺構実測図	東木津遺跡吉岡地区	遺構平面図〔2〕（1／200）
図面20	遺構実測図	東木津遺跡吉岡地区	掘立柱建物址ＳＢ05実測図（1／80、1／60、1／40、1／20、1／8）
図面21	遺構実測図	東木津遺跡吉岡地区	1．掘立柱建物址ＳＢ06・07平面図（1／80） 2．土坑ＳＫ20～23実測図（1／40）
図面22	遺構実測図	東木津遺跡吉岡地区	溝実測図〔1／400、1／40〕
図面23	遺構実測図	東木津遺跡吉岡地区	基本層序第Ⅲ～Ⅵ層出土遺物分布図（1／300）
図面24	遺構実測図	井口本江遺跡栗林地区	遺構実測図（1／80）
図面25	遺構実測図	井口本江遺跡栗林地区	土坑ＳＫ01～03・06実測図（1／40）
図面26	遺構実測図	井口本江遺跡栗林地区	溝ＳＤ01実測図（1／40）
図面27	遺構実測図	中曽根西遺跡区画整理地区	調査地区全体図（1／1,500）
図面28	遺構実測図	中曽根西遺跡区画整理地区	遺構平面図〔1〕（1／600）
図面29	遺構実測図	中曽根西遺跡区画整理地区	遺構平面図〔2〕（1／600）
図面30	遺構実測図	中曽根西遺跡区画整理地区	遺構平面図〔3〕（1／600）
図面31	遺構実測図	中曽根西遺跡区画整理地区	遺構平面図〔4〕（1／600）
図面32	遺構実測図	中曽根西遺跡区画整理地区	Ｂ区遺構実測図〔1〕（1／600、1／40）
図面33	遺構実測図	中曽根西遺跡区画整理地区	Ｂ区道路址・溝実測図〔2〕（1／40）
図面34	遺構実測図	中曽根西遺跡区画整理地区	道路址ＳＦ01実測図（1／80、1／40）
図面35	遺構実測図	中曽根西遺跡区画整理地区	1．Ｃ区溝実測図（1／800、1／40） 2．Ｄ区溝・河道址実測図（1／800、1／40）
図面36	遺構実測図	中曽根西遺跡区画整理地区	Ｅ区遺構実測図（1／800、1／40、1／20）

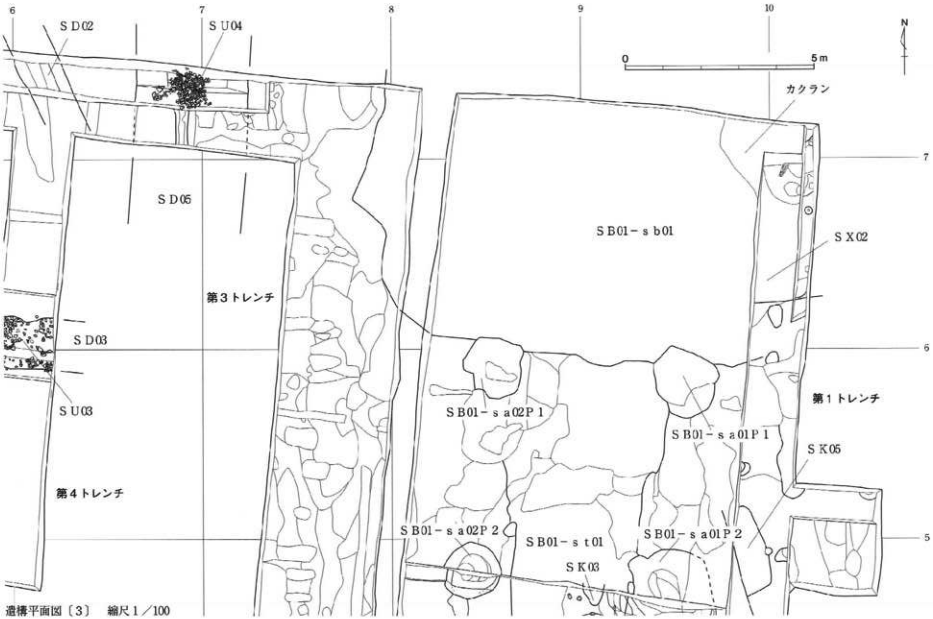
図面37　遺物実測図　瑞龍寺遺跡富山不動産地区　土器類　中世の土器類　中世・近世の陶磁器類（1／3）
図面38　遺物実測図　瑞龍寺遺跡富山不動産地区　瓦　近世の燻し瓦－巴紋軒丸瓦・軒丸瓦・均整唐草紋軒平瓦（1／3）
平瓦（1／4）
図面39　遺物実測図　瑞龍寺遺跡富山不動産地区　瓦　近世の燻し瓦－丸瓦（1／4）
図面40　遺物実測図　瑞龍寺遺跡富山不動産地区　瓦　近世の燻し丸・菊丸瓦・輪違い瓦（1／3）
図面41　遺物実測図　瑞龍寺遺跡富山不動産地区　瓦　近世の施し瓦－鬼瓦・刻印（1／3、2／3）
黒釉薬瓦－平丸、赤釉薬瓦－平瓦（1／4）
図面42　遺物実測図　瑞龍寺遺跡富山不動産地区　瓦　近世の釉薬瓦－丸瓦（1／4）
図面43　遺物実測図　瑞龍寺遺跡富山不動産地区　鉄・銅製品　鉄製品－鉄釘・釘類似品、銅製品－装飾品・銅銭・銅釘（1／2）
図面44　遺物実測図　瑞龍寺遺跡富山不動産地区　鉄製品等　鉄製品－不明鉄製品・鉄釘・楕型滓、ガラス瓶（1／2）
古銭（洪武通寶）、石製品－細形棒状品（実大）
図面45　遺物実測図　東木津遺跡古岡１地区　土器類　古代の土器類－土師器・須恵器（1／3）
図面46　遺物実測図　東木津遺跡古岡１地区　土器類　古代の須恵器（1／3）
図面47　遺物実測図　東木津遺跡古岡２地区　土器類　古代の土器類－土師器・製塩土器・須恵器（1／3）
図面48　遺物実測図　東木津遺跡古岡２地区　土器類　古代の土器類－須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器（1／3）
図面49　遺物実測図　東木津遺跡古岡地区　土器類　中世の土器類－白磁・珠洲、近世の土器類－越中瀬戸（1／3）
図面50　遺物実測図　東木津遺跡古岡地区　木製品　板状品・部材・棒状品（1／8）
図面51　遺物実測図　東木津遺跡古岡地区　土製品　円面硯・輪羽口・土錘（1／2）
図面52　遺物実測図　東木津遺跡古岡地区　鉄・石製品　鍛冶関連遺物－椀形滓、石製品－石硯・棒状石製品・砥石（1／2）
図面53　遺物実測図　井口本江遺跡栗林、ア・ライズ地区　土器類　弥生土器・古代の須恵器・中世の土師器（1／2、1／3）
図面54　遺物実測図　井口本江遺跡栗林地区　石製品　石包丁・剥片・未製品（実大）
図面55　遺物実測図　中曽根西遺跡区画整理地区　土器類　弥生土器、古墳時代の土器類、古代の土器類（1／3）
中世の土器類、近世の土器類（1／3）
図面56　遺物実測図　中曽根西遺跡区画整理地区　土製品等　土製品－土錘、鍛冶関連遺物－椀型滓（1／2）
銅製品－煙管・銅銭（1／2、実大）



遺構平面図〔2〕
縮尺1／100

図面〇三　遺構実測図　端龍寺遺跡宮山不動産地区

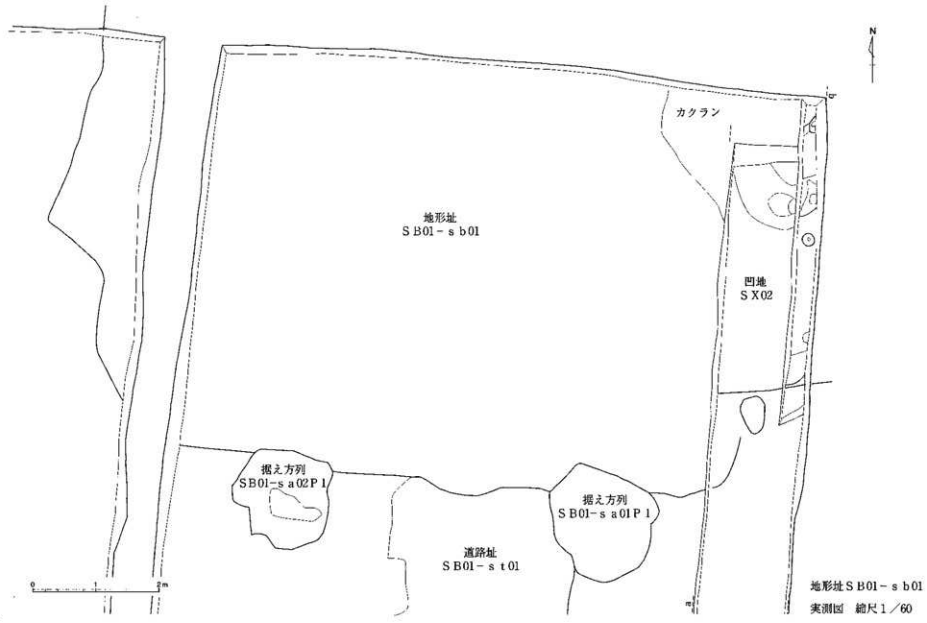
図面〇四　遺構実測図　瑞龍寺遺跡富山不動産地区

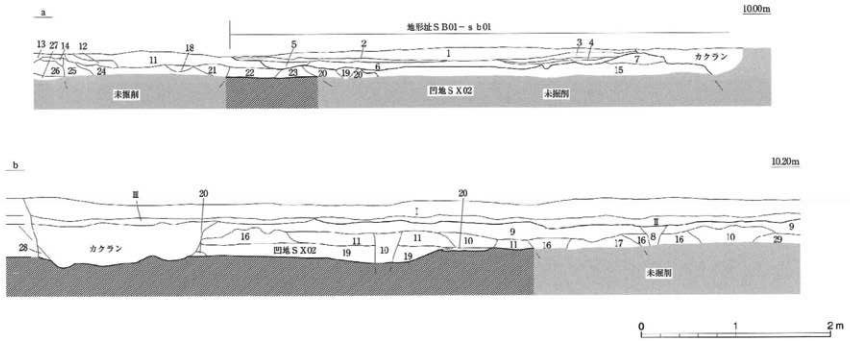


遺構平面図〔3〕　縮尺1／100

図面〇五　遺構実測図　瑞龍寺遺跡富山不動産地区

図面〇六　遺構実測図　瑞穂寺遺跡富山不動産地区



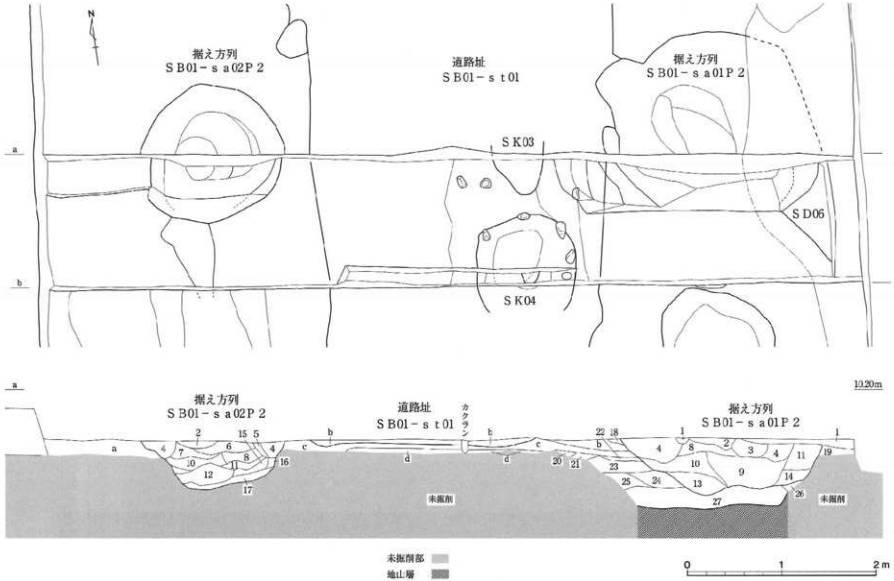


Ⅰ．表土。（現耕作土）
Ⅱ．明灰褐色粘質土。（旧耕作土）
Ⅲ．暗灰褐色粘質土。（明治時代の整地層）
1．礫層。暗灰色粘質土、褐色砂質土混入。
2．灰褐色粘質土、黄白色粘質土混土層。
3．明灰褐色砂質土、褐色粘質土、暗灰色砂質土混土層。鉄分含む。
4．灰白色砂質土。
5．明灰褐色砂質土。
6．灰褐色砂質土、褐色粘質土、暗灰色砂質土混土層。鉄分含む。
7．灰褐色砂質土。鉄分含む。
8．黄褐色粘質土、暗褐色粘質土混土層。
9．灰褐色粘質土。
10．灰褐色粘質土。黄白色粘質ブロック混入。
11．暗灰褐色粘質土。黄白色粘質ブロック混入。
12．明灰褐色砂質土。
13．灰褐色粘質土。
14．暗灰色粘質土。
15．暗灰褐色粘質土。鉄分を含む褐色土混入。
16．暗褐色粘質土。
17．暗褐色粘質土、暗灰色粘質土混土層。
18．明灰褐色粘質土。
19．黒色粘質土。
20．黒褐色粘質土。
21．暗褐色粘質土。黄褐色粘質ブロック混入。
22．灰褐色粘質土、褐色粘質土混土層。
23．明灰褐色粘質土。
24．暗灰褐色粘質土、灰褐色粘質土混土層。
25．黄灰褐色粘質土、黄白色粘質土混土層。
26．灰褐色砂質土。
27．褐色粘質土。黄褐色粘質土混入。
28．褐色粘質土。
29．暗灰褐色粘質土、灰褐色粘質土混土層。黄白色粘質ブロック混入。

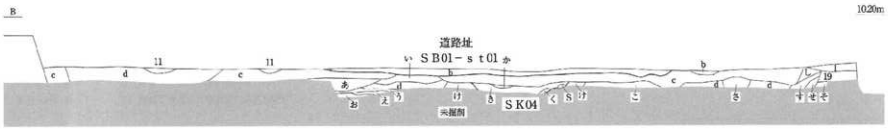
地形址ＳＢ01－ｓｂ01、調査地区東側土層断面図　縮尺１／40

図面〇七　遺構実測図　瑞龍寺遺跡富山不動産地区

図面〇八　遺構実測図　瑞龍寺遺跡富山不動産地区



道路址SB01－st01、掘え方列SB01－sa01P2・sa02P2実測図〔1〕　縮尺1／40



a．黄白色粘質土ブロック。暗灰色粘質土混入。
b．灰白色粘土。鉄分含む。しまり強。
c．褐色粘質土。しまり強。
d．暗灰褐色粘質土。炭混入。

未掘削部
地山層

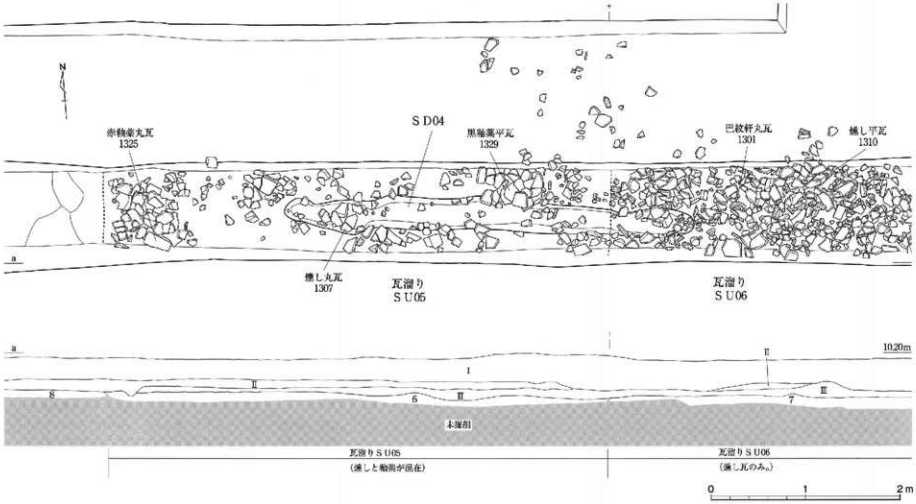
1．暗灰色砂質土。
2．黒色砂質土。
3．褐色粘質土と暗灰色粘質土の混土層。細礫混入。
4．灰褐色砂質土。礫混在。
5．暗灰褐色砂質土。
6．暗褐色砂質土。
7．褐色砂質土。
8．暗灰色粘質土。白黄色粘質土ブロック混入。
9．暗灰色粘質土と灰色粘質土の混土層。
10．灰褐色砂質土と白黄色粘質ブロック混入。
11．灰褐色粘質土。
12．灰黄色粘質ブロックと暗灰色粘質土の混三層。
13．暗灰褐色粘質土。
14．暗灰褐色粘質土。灰黄色粘質ブロック混入。
15．淡灰色粘質土。
16．褐色粘質土と黄灰色粘質土の混土層。
17．暗灰色粘質土。
18．灰色砂質土。
19．暗褐色砂質土。
20．暗灰色粘質土と黒色粘質土の混土層。
21．明灰色粘質土。
22．灰色粘質土と黄色粘質土の混土層。白黄色ブロック混入。
23．黒色粘質土と暗灰褐色粘質土の混土層。
24．灰黄色粘質ブロック。暗灰色粘質土混入。
25．暗灰褐色粘質土。
26．黒色粘質土。
27．白黄色粘質ブロックと灰白色粘質ブロックの混土層。暗灰色粘質土混入。

あ．暗灰褐色粘質土。
い．暗灰色粘質土。
う．灰褐色砂質土。
え．暗灰褐色砂質土。
お．暗灰色粘質土。
か．暗灰褐色粘質土。
き．灰色粘質土、白色粘質土、黒色粘質土の混土層。炭化物混入。
く．灰白色粘質土。
け．暗褐色粘質土。
こ．暗褐色砂質土。
さ．黒褐色砂質土。
し．暗褐色粘質土。
す．黄灰色粘質土。
せ．暗灰褐色砂質土。
そ．暗灰色粘質土。

道路址ＳＢ01－ｓｔ01、据え方列ＳＢ01－ｓａ01Ｐ２・ｓａ02Ｐ２実測図〔２〕　縮尺１／40

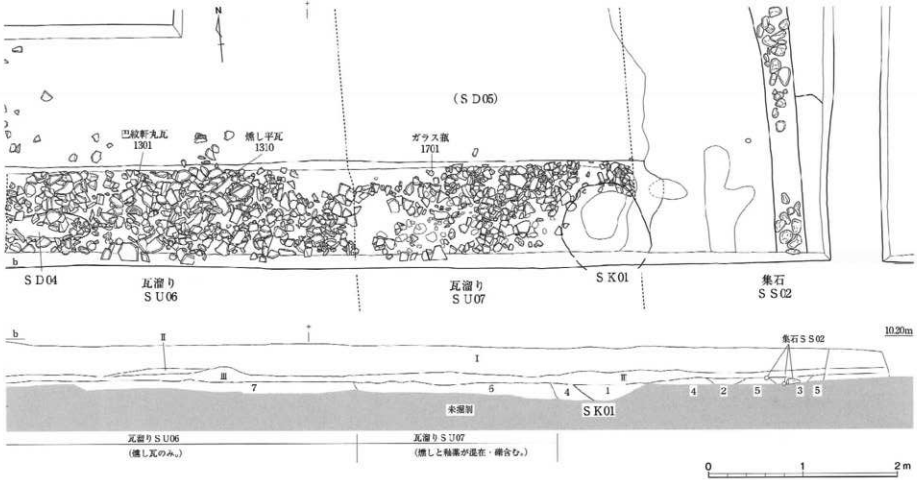
図版〇七　遺構実測図　掘建柱建物跡三次建物跡

図面一〇　遺構実測図　瑞龍寺遺跡富山不動産地区



I．表土（耕作土）
II．明灰褐色粘質土。
III．暗灰褐色粘質土。
6．灰褐色粘質土。赤釉瓦、燻し瓦混在。
7．灰褐色粘質土。燻し瓦多量に含む。
8．暗灰褐色粘質土。

瓦溜りSU05・06実測図〔1〕　縮尺1／40

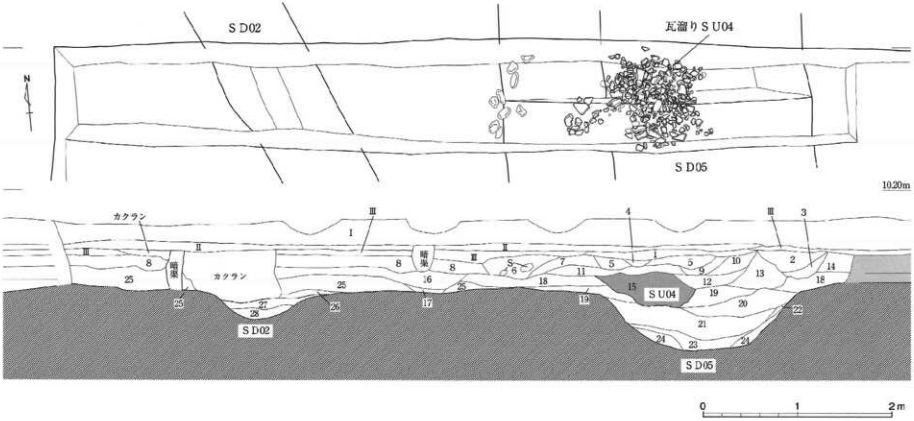


Ⅰ．表土（耕作土）
Ⅱ．明灰褐色粘質土。
Ⅲ．暗灰褐色粘質土。
1．暗灰褐色粘質土、灰褐色粘質土混土層。（SK01）
2．暗灰褐色粘質土。
3．暗灰褐色粘質土。礫大含む。（集石SS02）
4．黄灰褐色粘質土。（北側aライン13層）
5．暗灰褐色粘質土、黄灰色粘質土混土層。暗灰色粘質土小ブロック混入。
6．灰褐色粘質土。赤釉瓦、焼し瓦混在。
7．灰褐色粘質土。焼し瓦多量に含む。

瓦溜りSU06・07実測図〔2〕　縮尺1／40

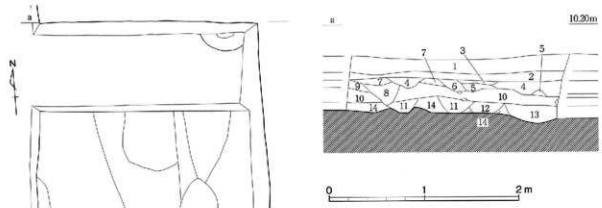
図面一一　遺構実測図　瑞龍寺遺跡富山不動産地区

図面一一　遺構実測図　瑞龍寺遺跡富山不動産地区

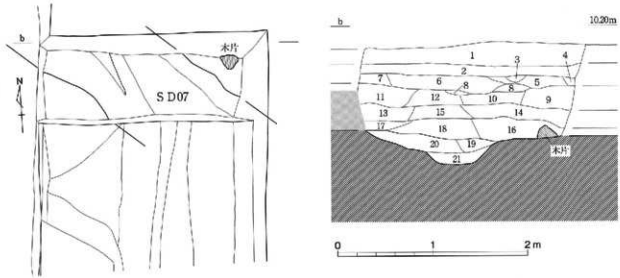


Ⅰ．表土。（現耕作土）
Ⅱ．明灰褐色粘質土。（旧耕作土）
Ⅲ．暗灰褐色粘質土。（明治時代の整地層）
1．灰色粘質土。黄灰褐色粘質土混土層。
2．礫、灰褐色粘質土混土層。
3．暗灰褐色粘質土、灰褐色粘質土混土層。
4．灰色粘質土。
5．灰褐色粘質土。明灰褐色粘質土、暗灰色粘質土混土層。黄白色粘質土粒混入。
6．灰褐色粘質土。礫含む。
7．黄灰褐色粘質土。小礫含む。黄白色粘質土小ブロック混入。
10．礫、灰褐色粘質土混土層。
11．明灰褐色粘質土。
12．灰褐色粘質土、暗灰褐色粘質土混土。礫含む。
13．黄灰褐色粘質土
14．暗黄灰褐色粘質土。灰褐色粘質土含む。
15．灰褐色粘質土、礫、瓦（燃し・稼薬混）混土層。S U04。
16．灰褐色粘質土。
17．暗灰色粘質土。
18．暗灰褐色粘質土。
19．灰褐色粘質土。
20．灰褐色粘質土。酸化物含む。
21．暗灰褐色粘質土。酸化物含む。
22．灰褐色粘質土、黄灰褐色粘質土、黄白色粘質土混土層。
23．灰褐色粘質土。
24．暗黄灰褐色粘質土。酸化物含む。
25．黄灰褐色粘質土、黄白色粘質土混土層。
26．灰色粘質土。
27．暗灰褐色粘質土。
28．灰褐色粘質土。酸化物、黄褐色粘質土。小ブロック混入。

溝S D02・05実測図　縮尺1／40



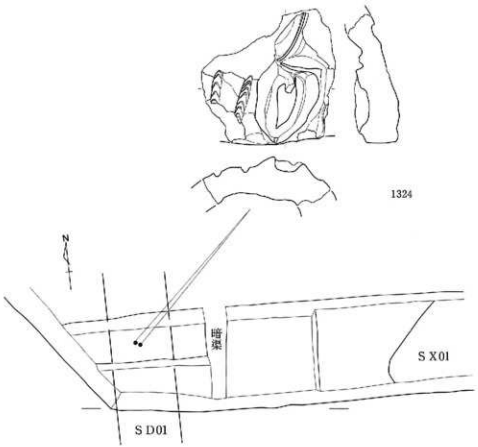
1．表土（耕作土）
2．旧表土。1層よりやや暗い粘質土。
3．黄白色粘質土、黄褐色粘質土、灰褐色粘質土混土層。
4．黄灰褐色粘質土。黄褐色粘質土粒混入。
5．灰褐色粘質土。
6．灰褐色粘質土。黄褐色粘質土粒混入。
7．灰褐色粘質土。
8．明灰褐色粘質土。
9．灰褐色粘質土。黄褐色粘質土若干混じる。
10．灰褐色シルト。黄褐色シルト混じる。礫まばらに含む。
11．灰褐色粘質土、灰色粘質土混土層。
12．灰褐色粘質土。
13．灰褐色粘質土。灰色砂質土混入。（ピット埋土）
14．灰褐色粘質土、灰色砂質土混土層。



1．表土。
2．明灰褐色粘質土。
3．灰色粘質土。黄白色粘質土ブロック粒混入。
4．灰褐色粘質土。
5．礫灰褐色粘質土。
6．暗灰褐色粘質土。黄白色粘質土ブロック混入。
7．灰褐色粘質土。黄白色粘質土ブロック混入。
8．灰褐色粘質土。
9．灰褐色粘質土。褐色粘質土混土層。
10．灰褐色粘質土。黄白色粘質土ブロック混入。
11．灰褐色粘質土、明灰褐色粘質土混土層。黄白色粘質土ブロック混入。（ア－24層）
12．灰褐色粘質土
13．灰色粘質土。炭化物含む。
14．灰褐色粘質土。黄白色砂質土粒混入。
15．灰褐色粘質土。
16．灰褐色粘質土。黄褐色粘質土ブロック混入。
17．灰褐色砂質土。
18．灰褐色粘質土。炭化物混入。
19．暗色粘質土。
20．暗灰褐色粘質土。 } 溝SD07埋土
21．灰褐色粘質土。 }

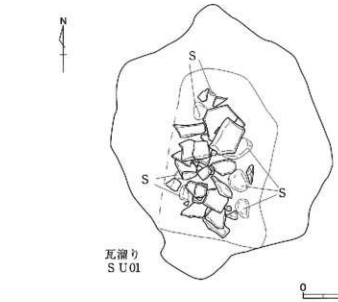
第1トレンチ北側拡張部、溝SD07実測図

縮尺1／40

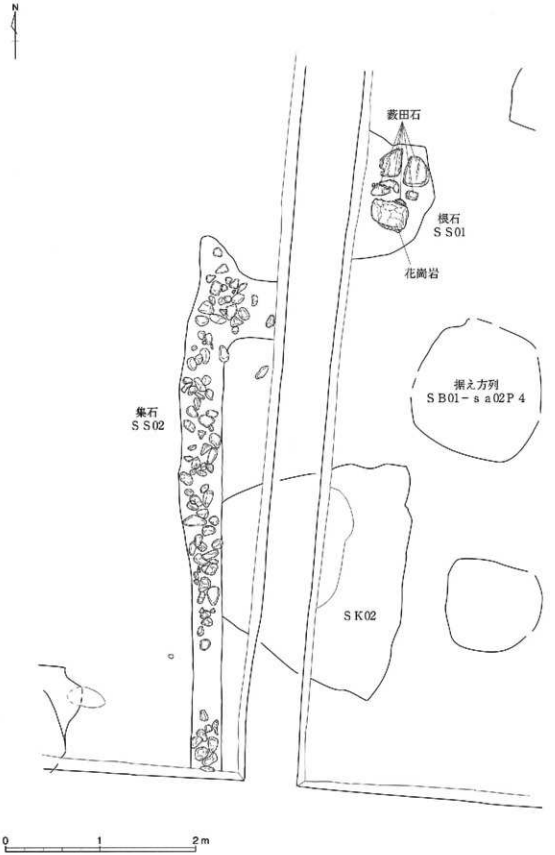


Ⅰ．表土。（耕作土）
Ⅱ．明灰褐色粘質土。（旧表土）
Ⅲ．暗灰褐色粘質土。（明治時代の整地層）
1．明灰褐色粘質土、黒褐色粘質土混土層。
2．灰褐色粘質土。黄褐色粘質土粒混入。
3．暗灰褐色粘質土。黄褐色粘質土粒混入。
4．灰褐色粘質土。黄褐色粘質土小ブロック混入。
5．灰褐色粘質土、黄白色粘質土混土層。黄褐色粘質土粒混入。
6．暗灰褐色粘質土。黄褐色粘質土粒少量混入。
7．黄褐色粘質土、灰褐色粘質土混土層。
8．明灰褐色粘質土。
9．灰褐色粘質土。
10．暗灰褐色粘質土。
11．暗灰褐色粘質土、黒褐色粘質土混土層。

溝ＳＤ01実測図　　縮尺１／40

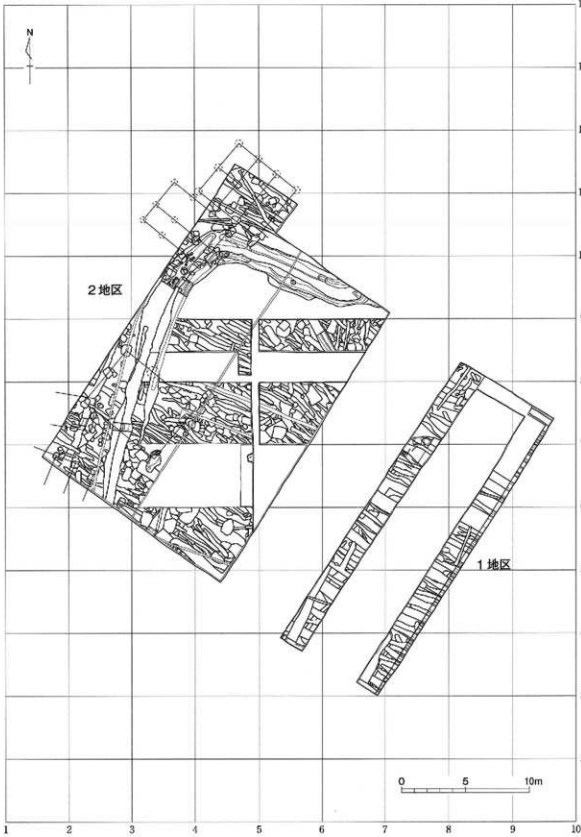


瓦溜りSU01・02実測図　　縮尺1／20



横石ＳＳ01、集石ＳＳ02実測図　　縮尺１／40

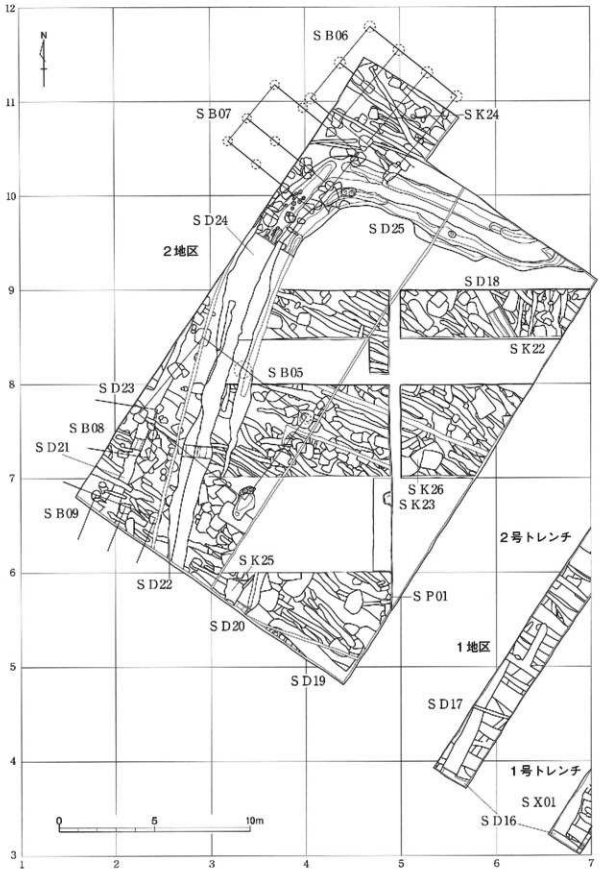
図面一七　遺構実測図　東木津遺跡吉岡地区



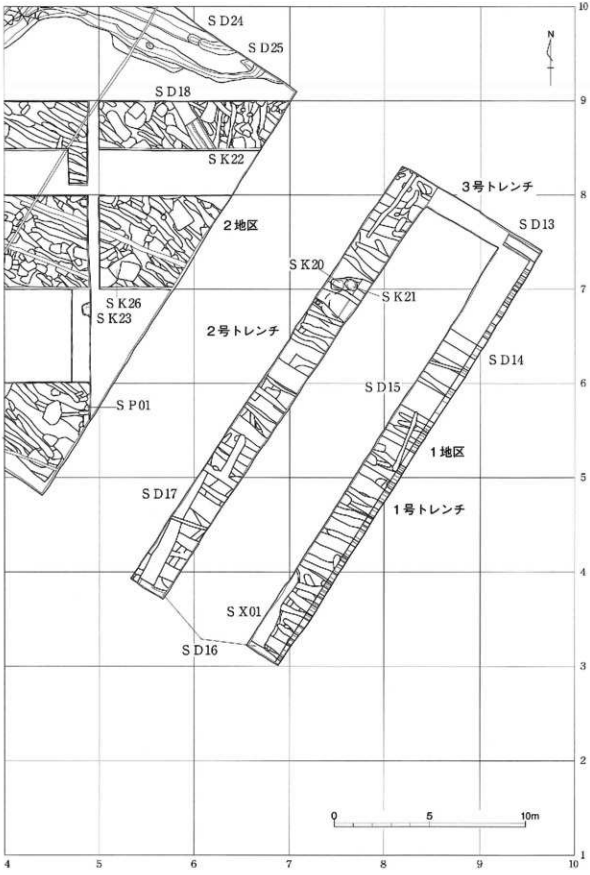
調査地区全体図

縮尺1／300

図面一八　遺構実測図　東木津遺跡吉岡地区

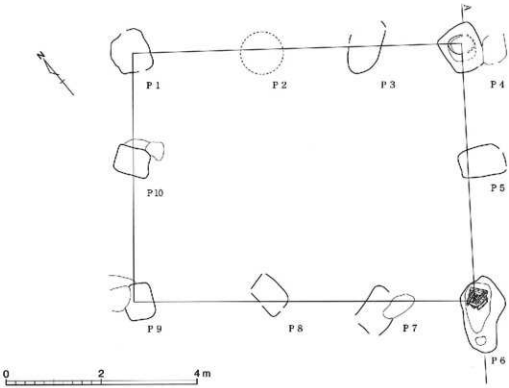


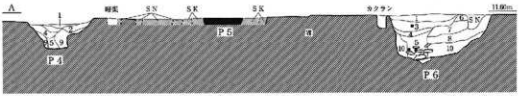
遺構平面図〔1〕　縮尺1／200



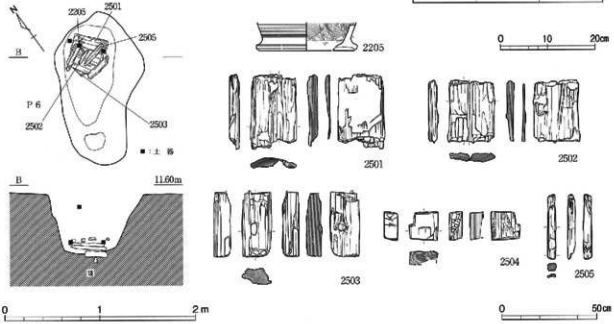
遺構平面図〔2〕

縮尺1／200



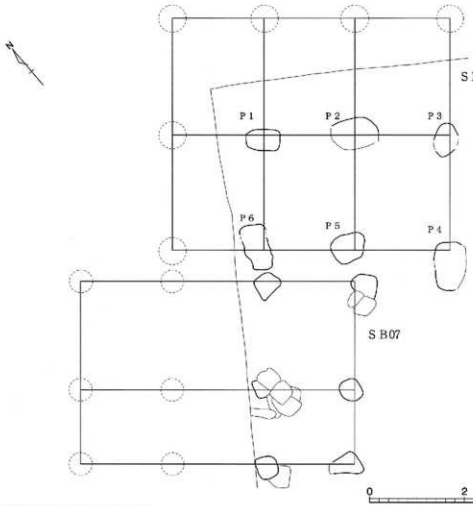


1. 黒褐色土　暗褐ブロック・炭化物微量
2. 黄褐色土　暗褐ブロック・同粒子多量
3. 黒褐色土　暗褐ブロック・炭化物多量
4. 黒褐色土　暗褐ブロック・同粒子少量
5. 黒褐色土　暗褐ブロック・炭化物少量
6. 黒褐色土　暗褐ブロック・同粒子少量、炭化物微量
7. 灰黄褐色土　暗褐ブロック、1・3～5層ブロック大量
8. 灰黄褐色土　暗褐ブロック、1・3～5層ブロック大量
9. にぶい黄橙色土　暗褐ブロック、1・2・4層ブロック大量
10. 灰黄褐色土　暗褐ブロック・同粒子、白色粘質土ブロック多量

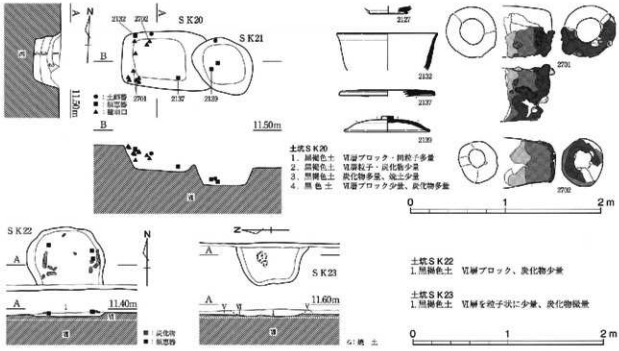


掘立柱建物址ＳＢ05実測図

縮尺１／80、１／60、１／40、１／20、１／８

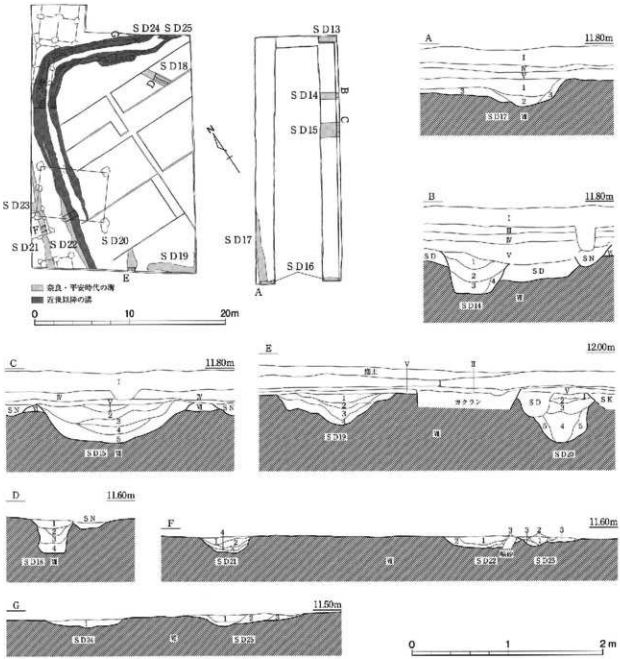


1．掘立柱建物址ＳＢ06・07平面図　　縮尺１／80



2．土坑ＳＫ20～23実測図　　縮尺１／40

図面二二　遺構実測図　東木津遺跡吉岡地区



溝SD14
1. 黒褐色土　切離粒子・炭化物微量
2. 黒褐色土　切離粒子・炭化物少量
3. 黒色土　炭化物大量
4. 暗褐色土　切離粒子・炭化物少量

溝SD15
1. 暗褐色土　切離ブロック・同粒子多量
2. 黒褐色土　切離ブロック・同粒子・炭化物微量
3. 黒褐色土　切離ブロック中量、炭化物微量
4. 暗褐色土　切離粒子多量
5. 暗褐色土　切離ブロック多量、炭化物微量

溝SD17
1. 黒褐色土　切離ブロック少量、炭化物微量
2. 黒褐色土　切離ブロック・同粒子多量
3. 黒褐色土　切離ブロック多量

溝SD18
1. 黒褐色土　切離粒子少量
2. 黒褐色土　切離ブロック少量
3. 黒褐色土　切離ブロック多量、炭化物微量
4. 黒褐色土　切離粒子多量

溝SD19
1. 黒褐色土　切離ブロック少量
2. 黒褐色土　切離ブロック・同粒子少量
3. 黒褐色土　切離ブロック少量
4. 黒褐色土　切離ブロック・同粒子多量、炭化物微量

溝SD20
1. 黒褐色土　切離ブロック少量
2. 黒褐色土　切離ブロック・同粒子少量
3. 黒褐色土　切離ブロック・炭化物少量
4. 黒褐色土　切離ブロック、同粒子中量、炭化物微量
5. 黒褐色土　切離ブロック・同粒子多量

溝SD21
1. 黒褐色土　切離粒子・炭化物微量
2. 黒褐色土　炭化物多量、切離粒子微量
3. 黒褐色土　切離粒子多量、炭化物微量
4. 黒褐色土　切離ブロック・同粒子多量

溝SD22
1. 黒褐色土　切離粒子・炭化物微量
2. 黒褐色土　切離ブロック大量
3. 黒褐色土　切離ブロック・同粒子多量

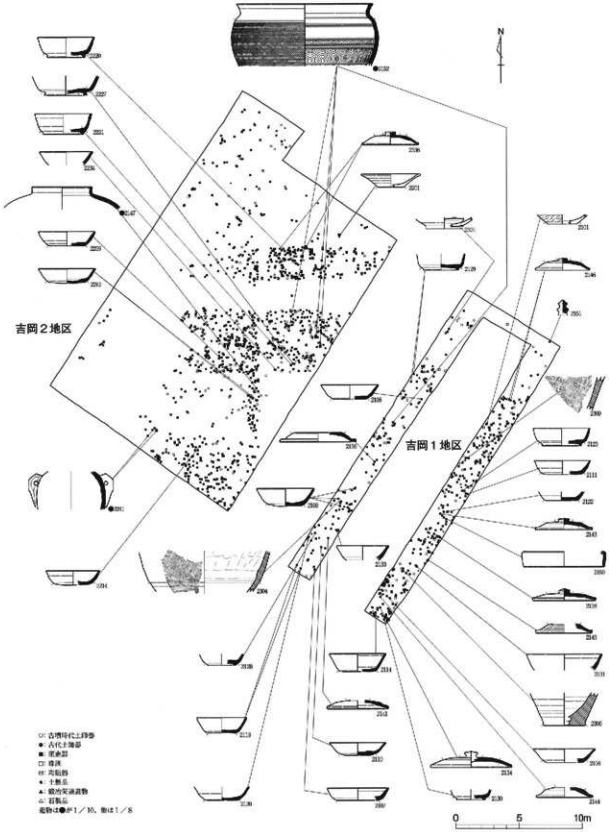
溝SD24
1. 黒灰色土　砂質、切離ブロック少量炭化物微量

溝SD25
1. 灰黄褐色土　水性沖積による砂質土
2. 黒灰色土　1層多量
3. 黒灰色土　1層・切離ブロック多量

溝実測図

縮尺1／400、縮尺1／40

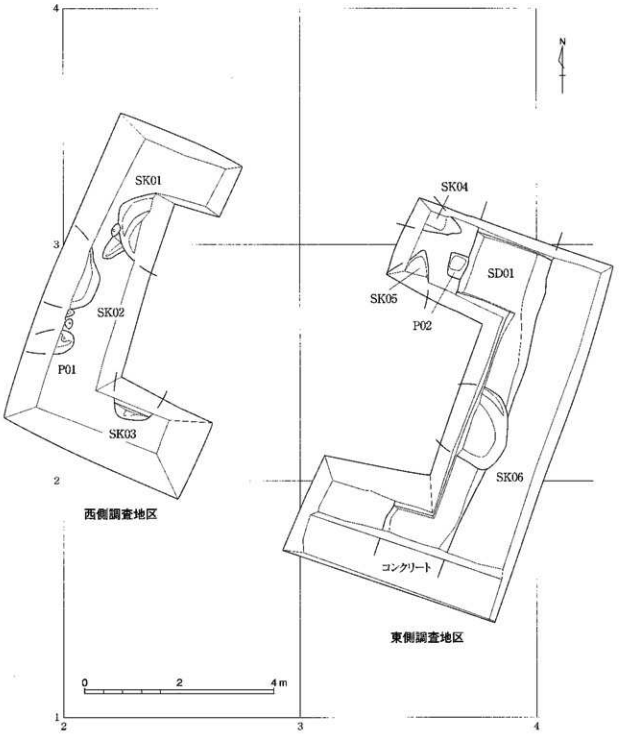
図面二三　遺構実測図　東木津遺跡吉岡地区



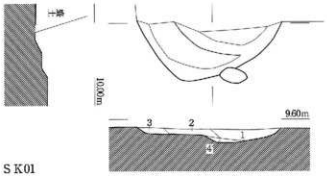
基本層序第Ⅲ～Ⅵ層出土遺物分布図

縮尺１／300

図面二四　遺構実測図　井山本江遺跡栗林地区

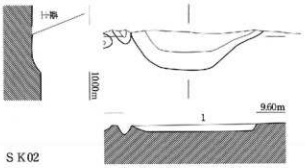


遺構実測図　　縮尺１／80



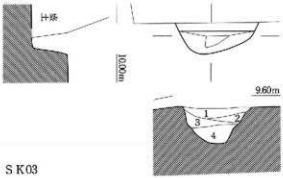
S K01

1．暗灰色粘質土と黄灰色砂質土の混土層。
2．暗灰褐色粘質土。
3．暗灰色粘質土。
4．灰色粘質土



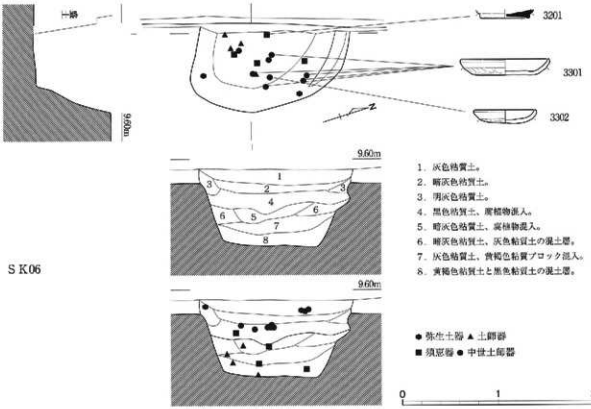
S K02

1．黒色粘質土、灰黄色シルト粒混入。



S K03

1．暗灰褐色粘質土、灰黄シルト粒混入。
2．黒褐色粘質土。
3．黒褐色粘質土、灰黄シルト粒混入。
4．黒色粘質土、灰黄シルト粒混入。

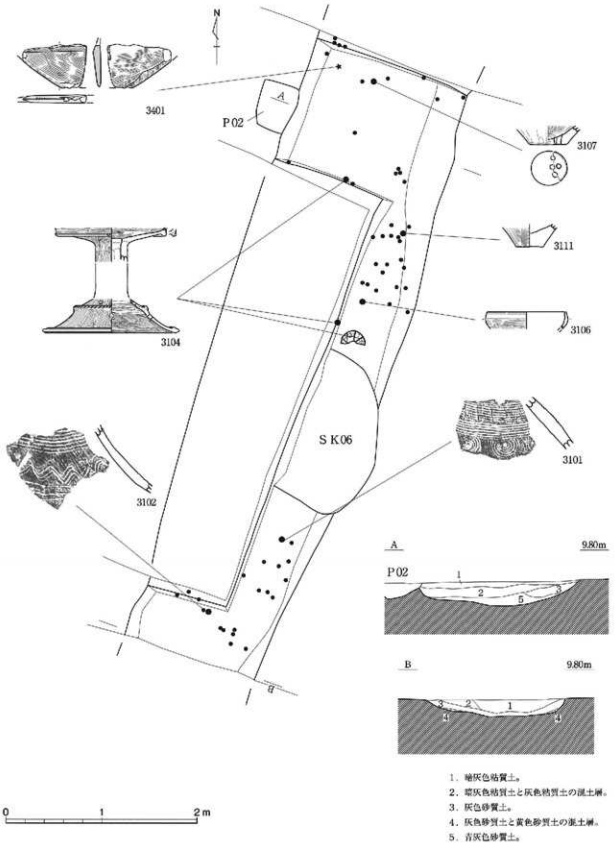


S K06

1．灰色粘質土。
2．暗灰色粘質土。
3．明灰色粘質土。
4．黒色粘質土、腐植物混入。
5．暗灰色粘質土、炭化物混入。
6．暗灰色粘質土、灰色粘質土の混土層。
7．灰色粘質土、黄褐色粘質ブロック混入。
8．黄褐色粘質土と黒色粘質土の混土層。

土坑S K01～03・06実測図

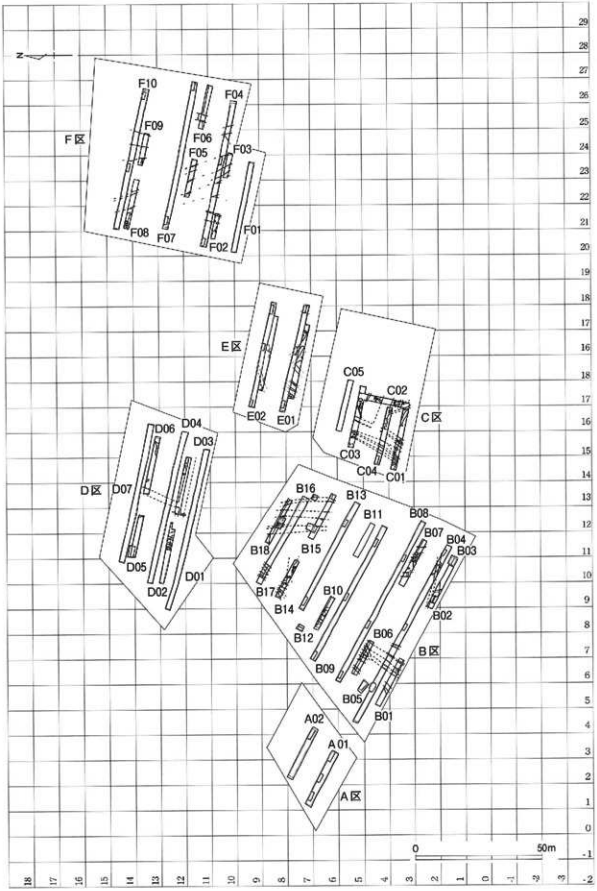
縮尺１／40



1．褐灰色粘質土。
2．暗灰色粘質土と灰色粘質土の混土層。
3．灰色砂質土。
4．灰色砂質土と黄色砂質土の混土層。
5．青灰色砂質土。

溝ＳＤ01実測図　　縮尺１／40

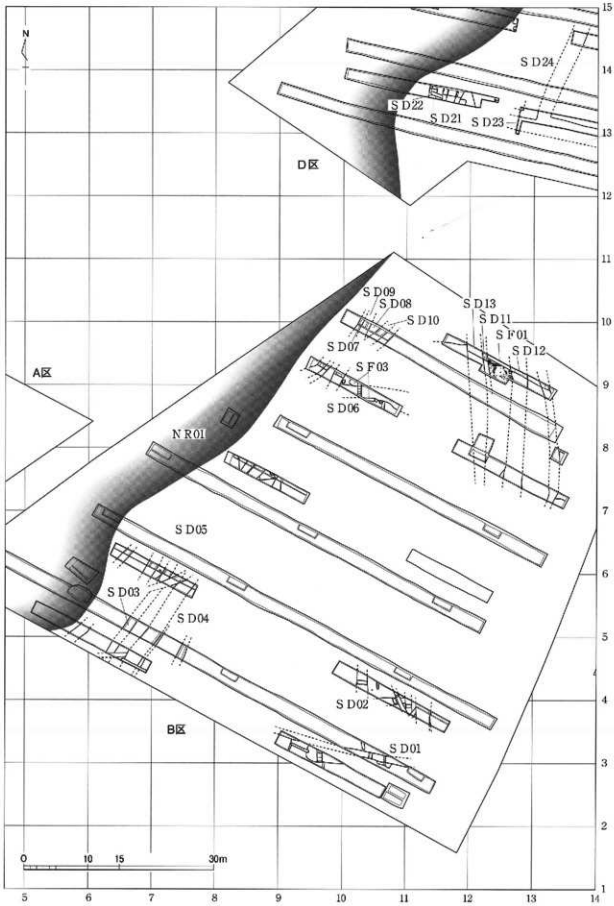
図面二七　遺構実測図　中曽根西遺跡区画整理地区



調査地区全体図

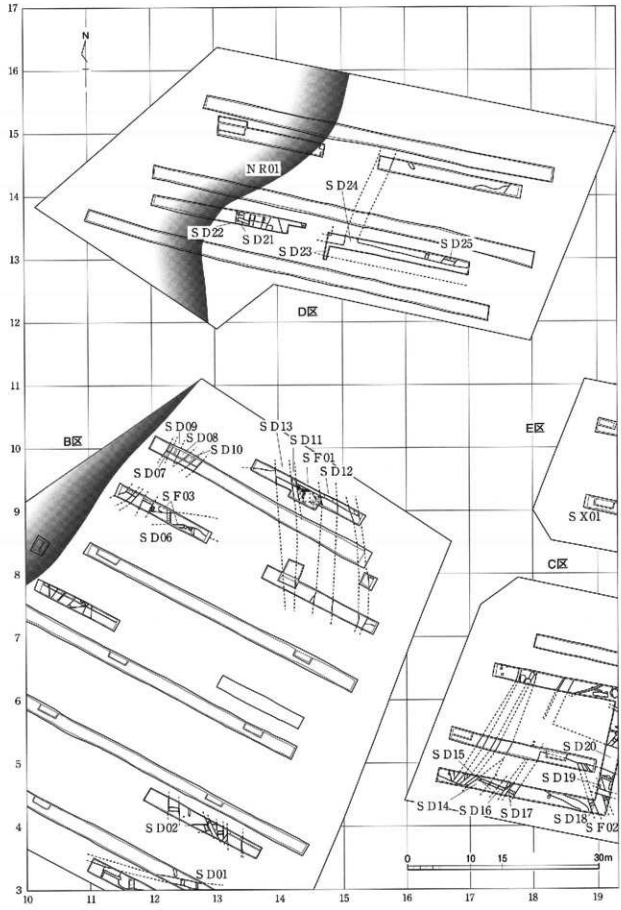
縮尺1／1,500

図面二八　遺構実測図　中曽根西遺跡区画整理地区



遺構平面図〔1〕　　縮尺1／600

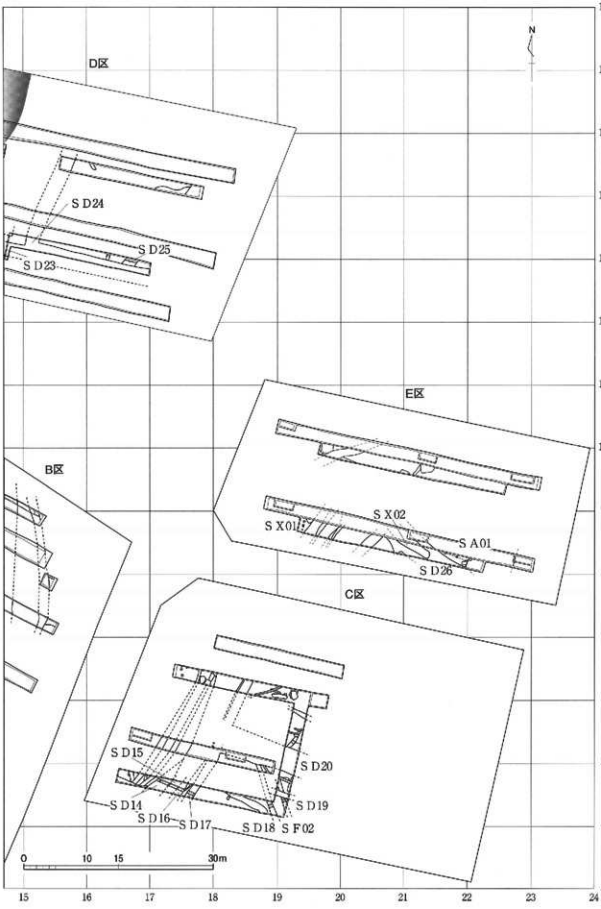
図面二九　遺構実測図　中曽根西遺跡区画整理地区



遺構平面図〔2〕

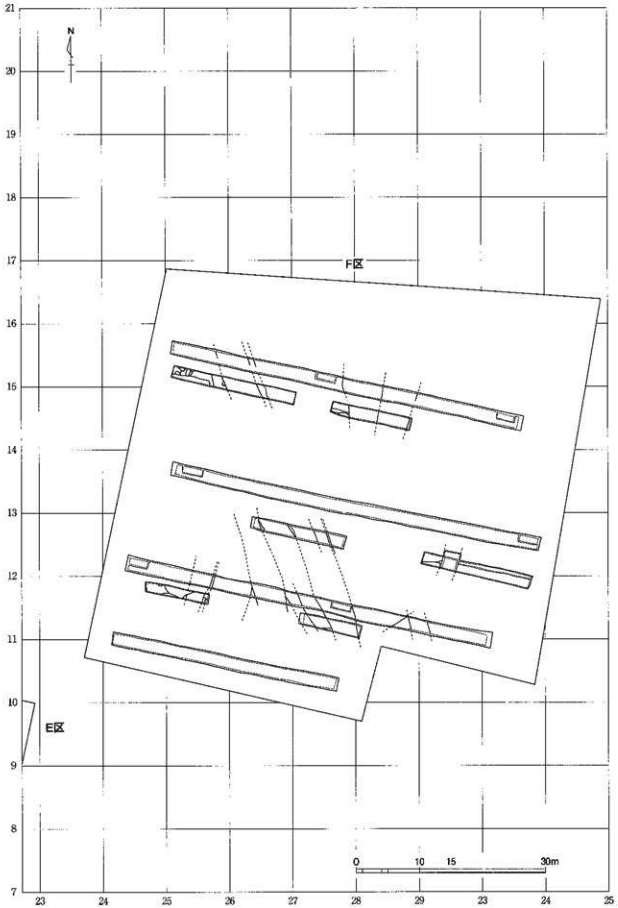
縮尺 1／600

図面三〇　遺構実測図　中曽根西遺跡区画整理地区



遺構平面図〔3〕　　縮尺1／600

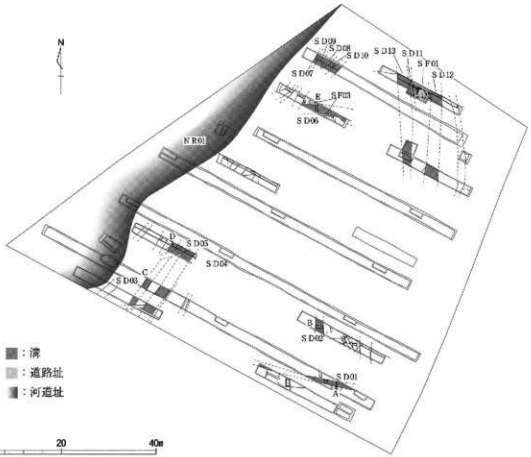
図面三一　遺構実測図　中曽根西遺跡区画整理地区

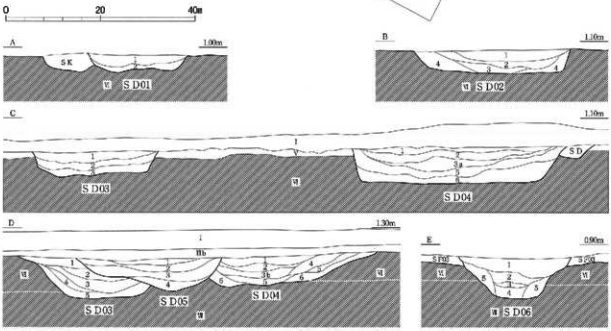


遺構平面図〔4〕

縮尺1／600

図面三一　遺構実測図　中曽根西遺跡Ⅸ区画整理地区





溝SD01
1. 暗褐色土　切層ブロック少量、炭化物微量
2. 暗灰色土　切層ブロック中量

溝SD02
1. 暗灰色土　切層ブロック多量
2. 暗灰色土　切層ブロック少量、炭化物微量
3. 暗灰色土　切層ブロック中量
4. 暗灰色土　切層ブロック大量

溝SD03
1. 灰黄褐色土　炭化物微量
2. 灰黄褐色土　切層ブロック少量
3. 暗灰色土　切層ブロック大量
4. 暗褐色土　切層ブロック大量
5. 暗灰色土　切層ブロック大量、炭化物微量

溝SD04
1. 黒褐色土　切層ブロック少量、炭化物微量
2. 灰黄褐色土　切層ブロック多量、炭化物微量
3a. 灰黄褐色土　切層ブロック少量
3b. 灰黄褐色土　切層ブロック大量、粒少量
4. 暗灰色土　切層ブロック多量、炭化物少量
5. 暗灰色土　切層ブロック少量
6. 暗灰色土　切層ブロック大量

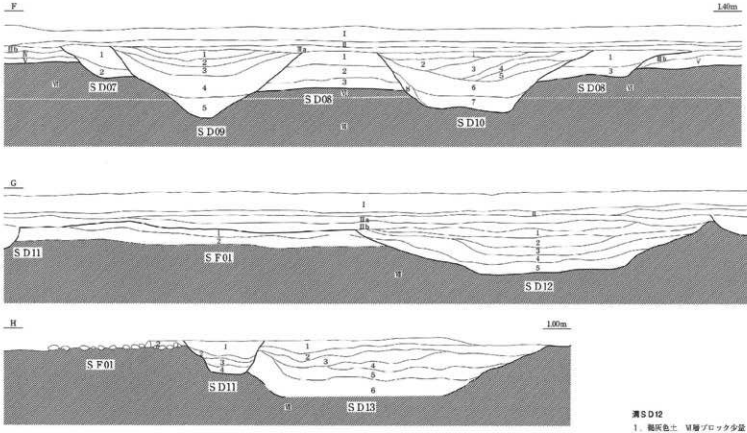
溝SD05
1. 暗灰色土　砂・炭化物微量
2. 暗灰色土　砂少量
3. 暗灰色土　切層ブロック多量、炭化物少量
4. 暗灰色土　砂多量

溝SD06
1. 暗灰色土　切層ブロック・炭化物微量
2. 暗灰色土　切層ブロック多量
3. 暗灰色土　砂少量、炭化物微量
4. 暗灰色土　切層ブロック・砂少量、炭化物微量
5. 暗灰色土　切層ブロック・砂大量

0　1　2m

B区遺構実測図〔1〕

縮尺1／800、1／40



遺跡址SF01
1．図面34の1層と同じ
2．図面34の2層と同じ

溝SD07
1．にぶい黄褐色土　シルト質
2．にぶい黄褐色土　シルト質、炭化物微量

溝SD08
1．にぶい黄褐色土　シルト質
2．灰黄褐色土　シルト質
3．灰黄褐色土　シルト質、VI層ブロック多量

溝SD09
1．にぶい黄褐色土　砂少量
2．灰黄褐色土　シルト質
3．褐灰色土　シルト質
4．灰黄褐色土　砂少量
5．褐灰色土　VI層多量

溝SD10
1．灰黄褐色土　シルト質、IV・VI層ブロック少量
2．褐灰色土　シルト質、VI層ブロック微量
3．灰黄褐色土　シルト質、VI層ブロック微量
4．褐灰色土　シルト質、VI層ブロック、砂微量
5．褐灰色土　シルト質、VI層ブロック微量
6．褐灰色土　VI層ブロック微量
7．褐灰色土　VI層ブロック少量
8．褐灰色土　VI層ブロック微量

溝SD11
1．褐灰色土　VI層ブロック微量
2．褐灰色土
3．褐灰色土
4．褐灰色土　VI層ブロック少量

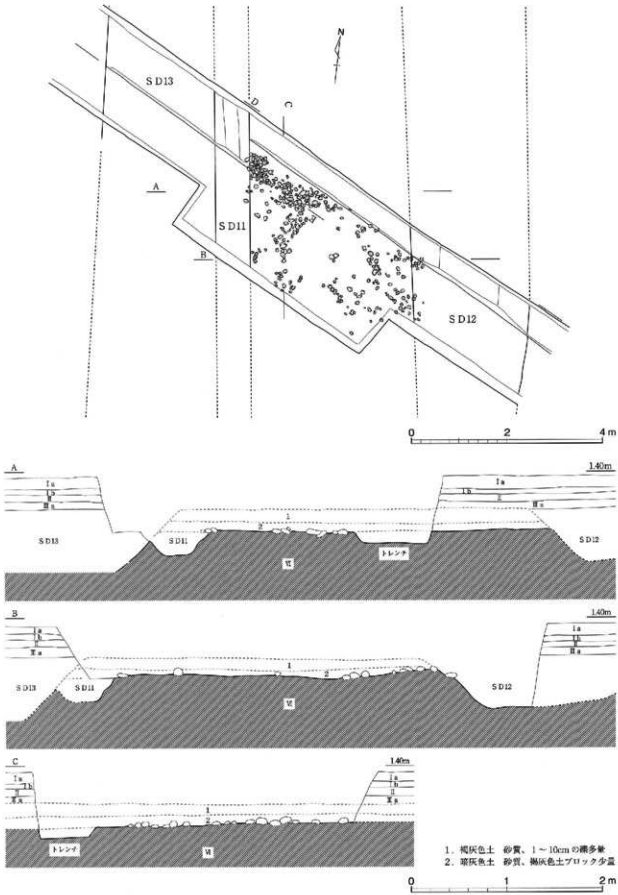
溝SD12
1．褐灰色土　VI層ブロック少量
2．黄灰色土　VI層多量
3．褐灰色土　VI層ブロック微量
4．褐灰色土　VI層ブロック少量、炭化物微量
5．褐灰色土　砂多量

溝SD13
1．褐灰色土
2．褐灰色土
3．褐灰色土
4．褐灰色土
5．灰色土
6．灰色土

0　1　2m

図面三三　遺構実測図　中曽根西遺跡区画整理地区

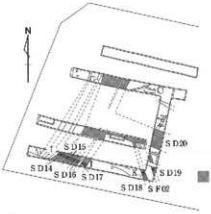
図面三四　遺構実測図　中曽根西遺跡区画整理地区



道路址ＳＦ01実測図

縮尺１／80、１／40

図面三五　遺構実測図　中曽根西遺跡区画整理地区



溝SD14
1．褐色土　砂多量、炭化物微量
2．褐色土　Ⅵ層ブロック・炭化物・砂微量
3．褐色土　炭化物微量
4．褐灰色土　Ⅵ層ブロック少量、炭化物微量
5．褐灰色土　Ⅵ層ブロック多量
6．Ⅵ層ブロック

溝SD15
1．褐灰色土　砂多量、炭化物微量
2．褐灰色土　Ⅵ層ブロック少量、炭化物微量
3．黒褐色土　Ⅵ層ブロック微量
4．黒褐色土　Ⅵ層ブロック・Ⅵ層多量

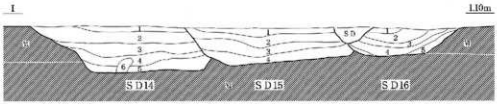
溝SD16
1．褐灰色土　砂・炭化物微量
2．褐灰色土　Ⅵ層・炭化物微量
3．褐灰色土　砂多量
4．黒褐色土　Ⅵ層・炭化物微量
5．黒褐色土　Ⅵ層ブロック多量

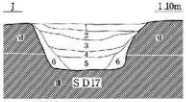
溝SD17
1．褐色土　砂多量、炭化物微量
2．黒褐色土　Ⅵ層多量
3．黒褐色土　Ⅵ層少量、炭化物微量
4．黒褐色土　Ⅵ層ブロック多量、砂微量
5．黒褐色土　Ⅵ層ブロック多量、Ⅶ層少量
6．黒褐色土　Ⅵ層ブロック多量

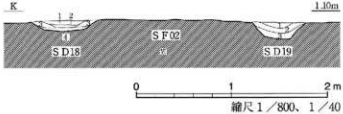
溝SD18（SF02）
1．黒褐色土　炭化物微量
2．黒褐色土　Ⅵ層ブロック微量
3．黒褐色土　Ⅵ層少量、炭化物微量
4．褐灰色土　Ⅵ層ブロック多量

溝SD19
1．黒褐色土　炭化物微量
2．灰黄褐色土　Ⅵ層少量、炭化物微量
3．灰黄褐色土　砂多量、Ⅵ層ブロック少量

0　20　40m

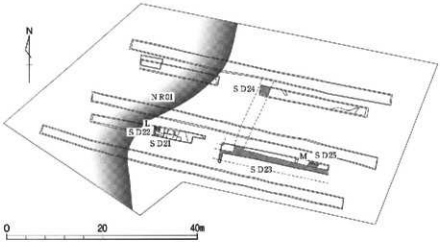






0　1　2m

1．C区溝実測図　　縮尺1／800、1／40

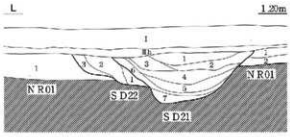


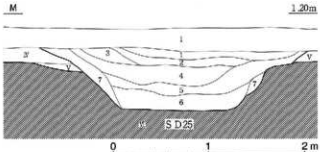
溝SD21
1．褐灰色土　砂少量
2．褐灰色土　炭化物微量
3．褐灰色土　砂多量、炭化物微量
4．褐灰色土　砂少量、炭化物微量
5．褐灰色土　Ⅵ層ブロック多量、炭化物微量
6．褐灰色土　砂微量
7．褐灰色土　シルト質、炭化物微量

溝SD22
1．褐灰色土　Ⅵ層ブロック・砂多量
2．褐灰色土　Ⅵ層ブロック大量、炭化物微量
3．灰黄褐色土　Ⅵ層ブロック多量

溝SD23
1．褐色土　Ⅱ層ブロック少量
2．褐灰色土　炭化物微量
3．褐色土　Ⅱ層ブロック多量
4．褐灰色土　Ⅵ層ブロック少量、炭化物微量
5．褐灰色土　Ⅵ層ブロック少量、砂・炭化物微量
6．褐灰色土　砂大量、Ⅵ層ブロック・炭化物微量
7．褐灰色土　Ⅳ・Ⅵ層ブロック・砂多量

自然流路NR01
1．褐灰色土　Ⅵ層ブロック少量
2．褐灰色土　Ⅵ層ブロック中量、砂少量

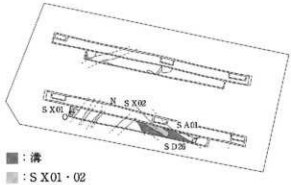


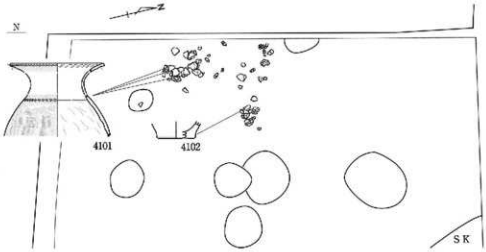


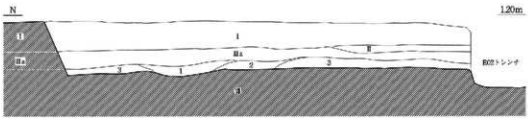
0　1　2m

2．D区溝・河道址実測図　　縮尺1／800、1／40

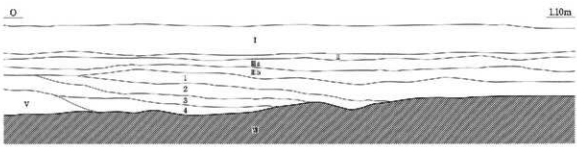
図面三六　遺構実測図　中曽根西遺跡区画整理地区



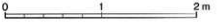




土師器中遺構ＳＸ01
1．褐灰色土　竪穴ブロック少量
2．黒褐色土　竪穴ブロック少量、炭化物微量
3．褐灰色土　2竪ブロック・竪穴ブロック少量

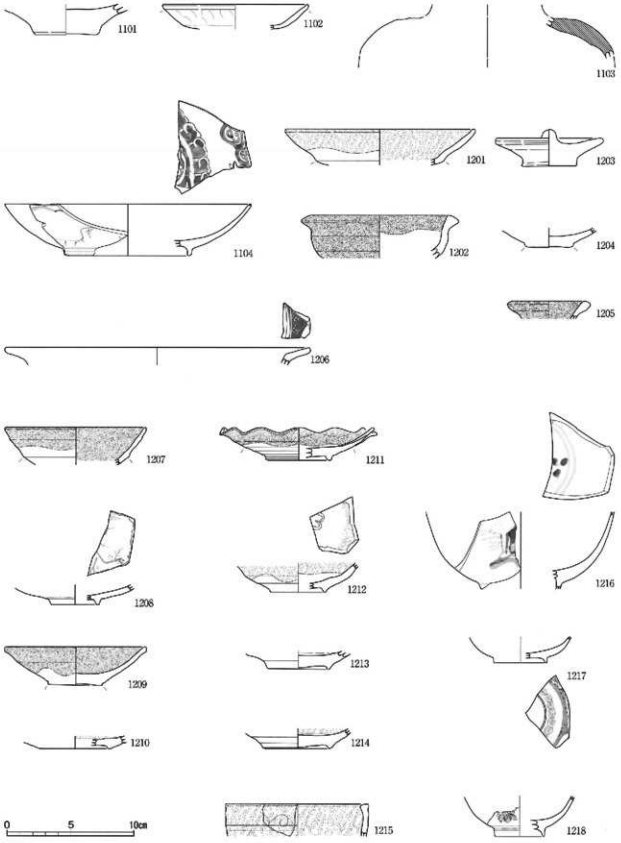


溝状ＳＸ02
1．褐灰色土　竪穴少量、炭化物微量
2．黒色土　1竪ブロック・竪穴ブロック中量
3．褐灰色土　2竪ブロック・竪穴ブロック多量、炭化物微量
4．褐灰色土　竪穴ブロック多量、炭化物微量



E区遺構実測図

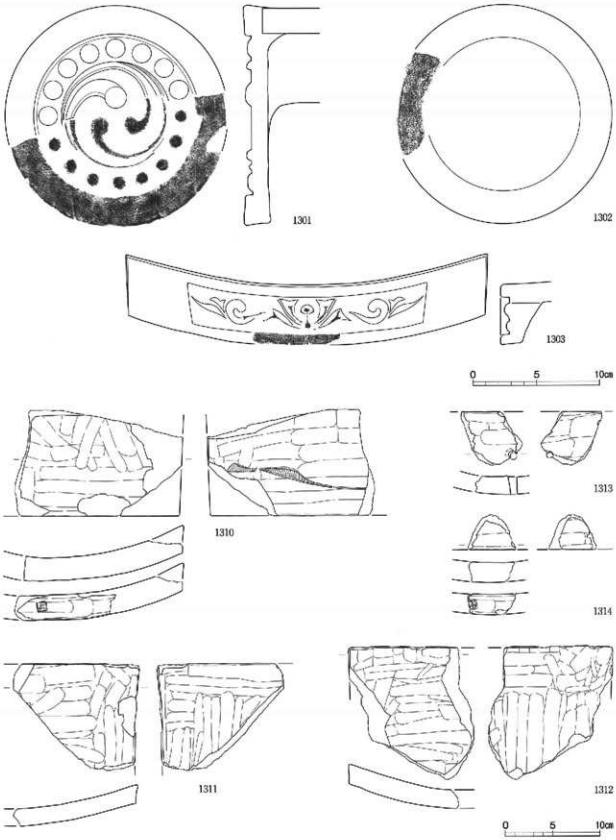
縮尺１／800、１／40、１／20



中世の土器類：1101～1103、中世の陶磁器類：1104
近世の陶磁器類：1201～1218

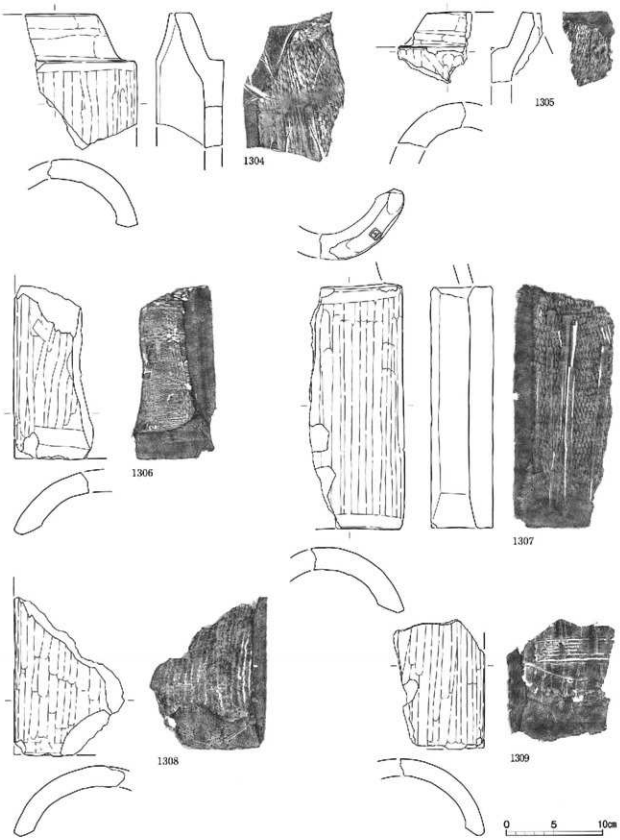
縮尺１／３

図面三八　遺物実測図　瑞龍寺遺跡富山不動産地区　瓦



近世の鴟し瓦－巴紋軒丸瓦：1301、軒丸瓦：1302、均整唐草紋軒平瓦：1303、
平瓦：1310～1314

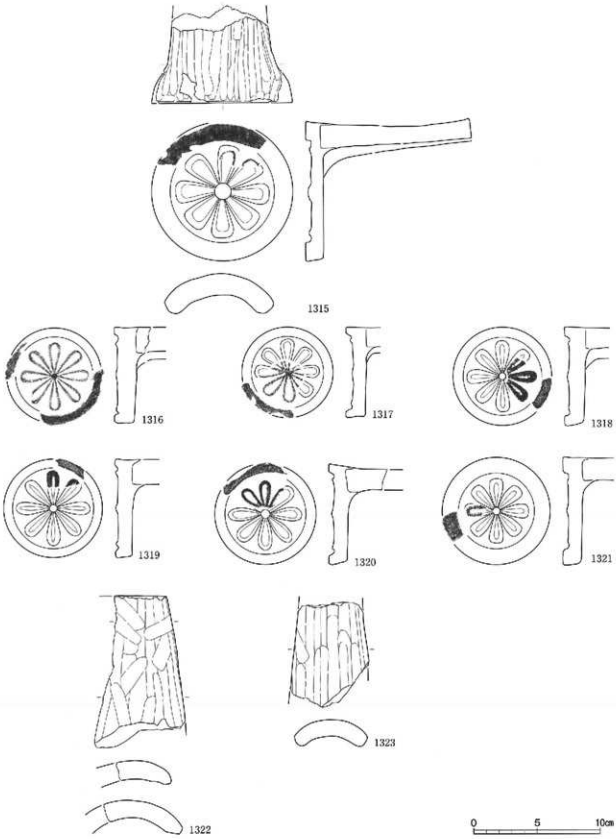
縮尺１／３
縮尺１／４



近世の漉し瓦－丸瓦：1304～1309

縮尺 1／4

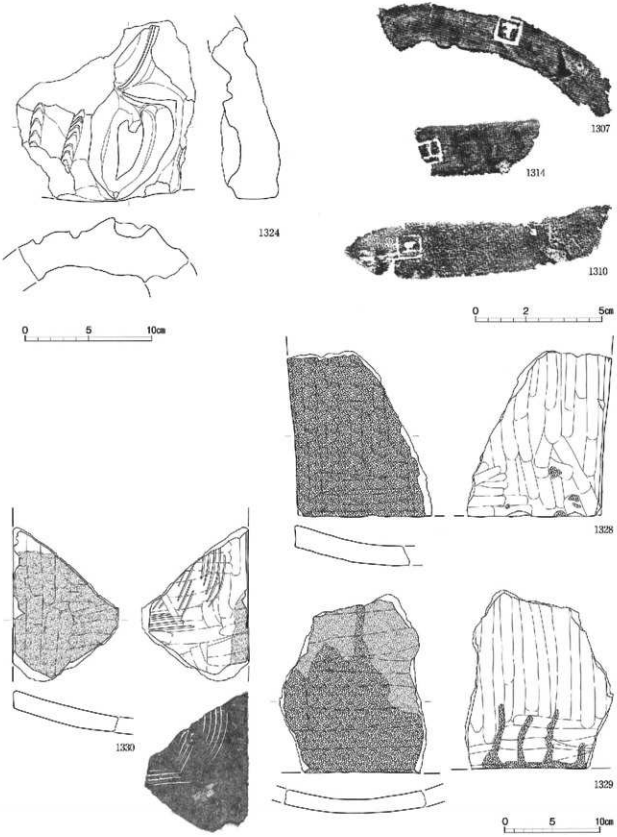
図面四〇　遺物実測図　瑞龍寺遺跡富山不動産地区　瓦



近世の煙し瓦－菊丸瓦：1315～1321、輪違い瓦：1322・1323

縮尺1／3

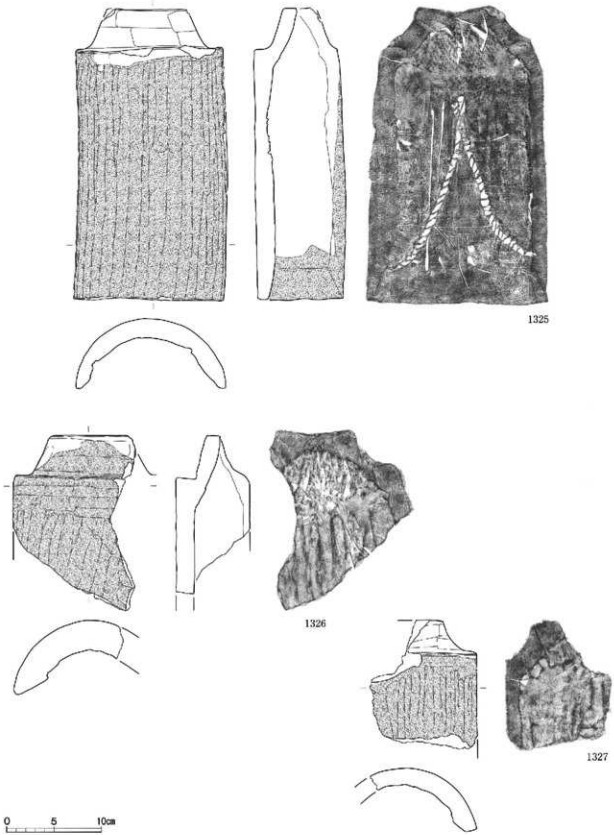
図面四一　遺物実測図　瑞龍寺遺跡富山不動産地区　瓦



近世の磨し瓦－鬼瓦：1324　刻印：1307・1310・1314
黒釉炻瓦－平瓦：1328・1329　赤釉窯瓦－平瓦：1330

縮尺１／３、２／３
縮尺１／４

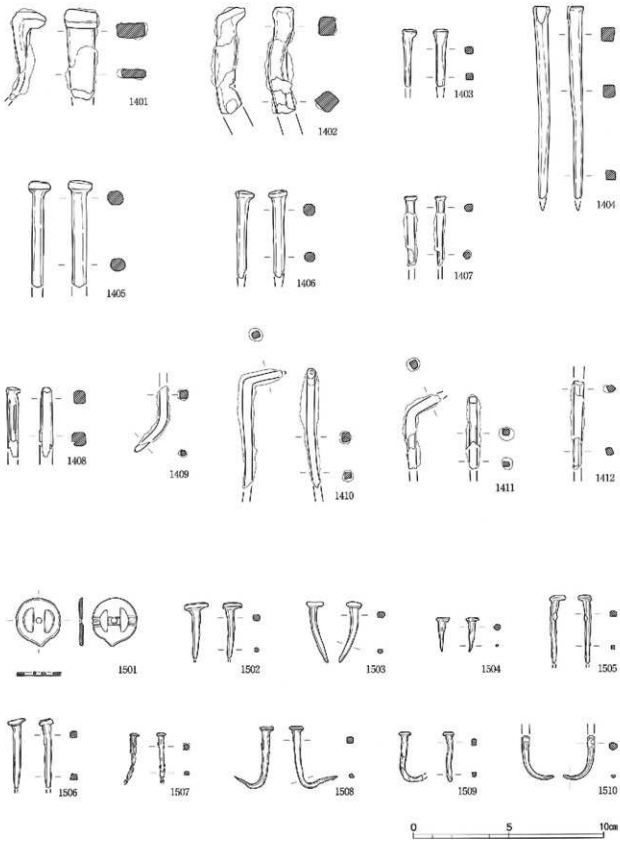
図面四二　遺物実測図　瑞龍寺遺跡富山不動産地区　瓦



近世の釉薬瓦－丸瓦：1325～1327

縮尺 1／4

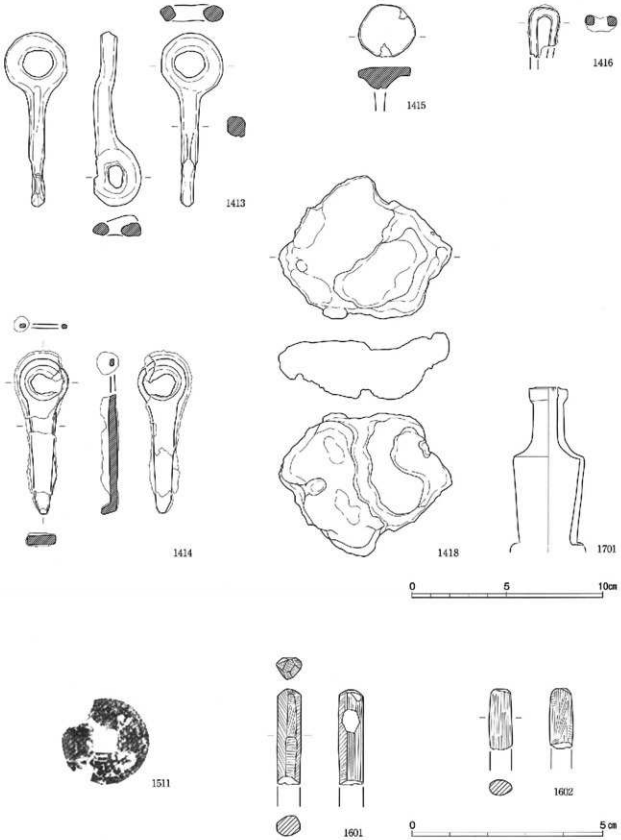
図面四三　遺物実測図　瑞龍寺遺跡富山不動産地区　鉄・銅製品



鉄製品－鉄釘：1401～1407、釘類似品：1408～1412
銅製品－装飾品：1501、銅鋲：1502～1504、銅釘：1505～1510

縮尺１／２

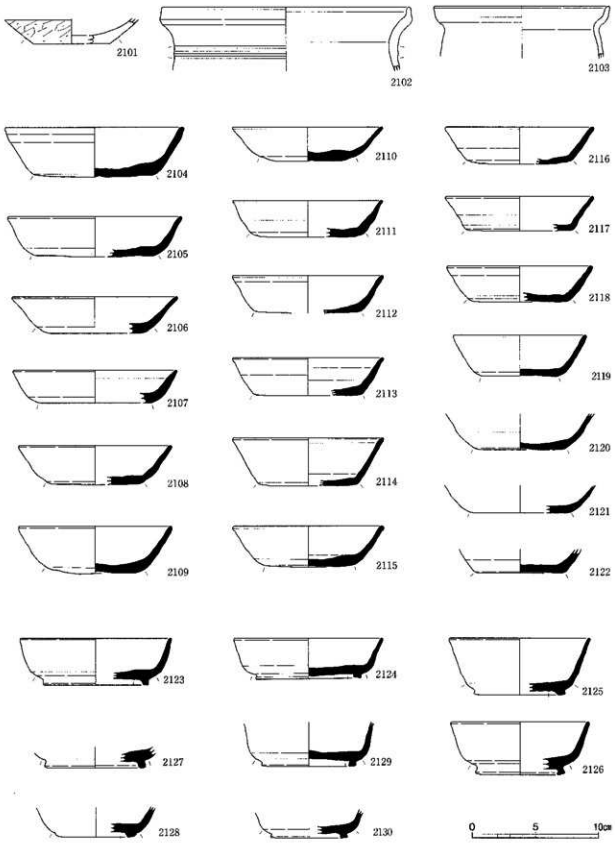
図面四四　遺物実測図　瑞龍寺遺跡富山不動産地区　鉄製品等



鉄製品－不明鉄製品：1413・1414・1416、鉄釘：1415、椀型滓：1418、ガラス瓶：1701
古銭(洪武通寶)－拓本：1511　石製品－細形棒状品：1601・1602

縮尺１／２
縮尺実大

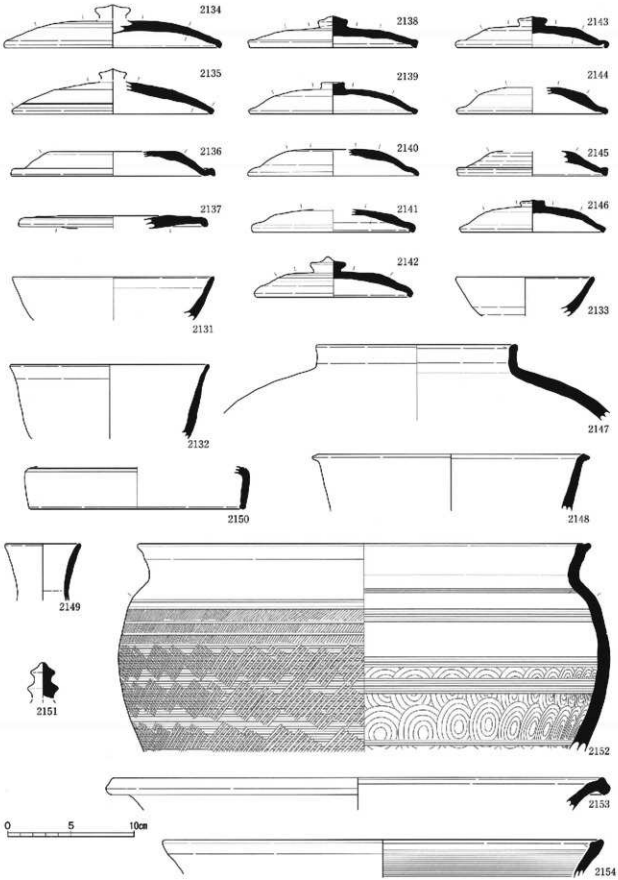
図面四五　遺物実測図　東木津遺跡吉岡1地区　土器類



古代の土器類－土師器：2101～2103、須恵器：2104～2130

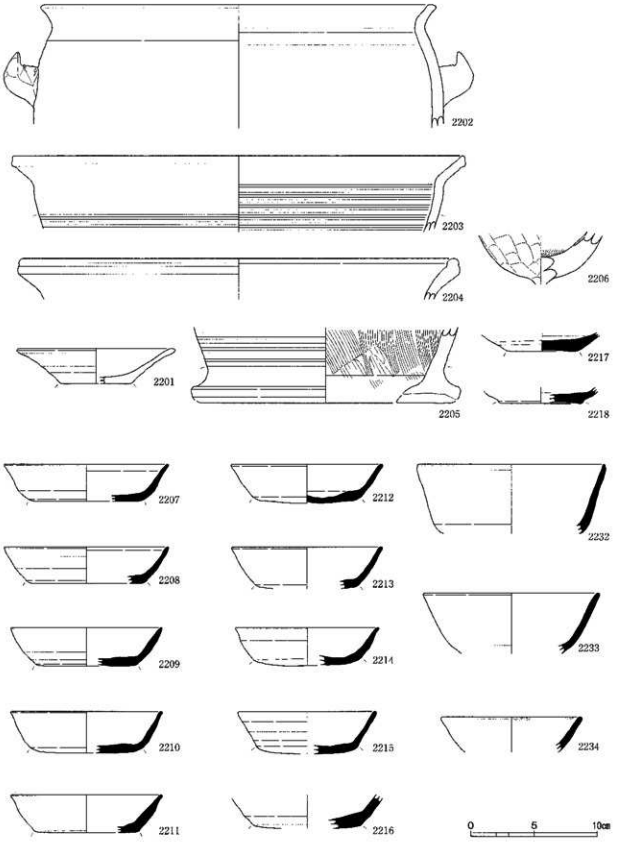
縮尺1／3

図面四六　遺物実測図　東木津遺跡古岡1地区　土器類



古代の須恵器：2131～2154

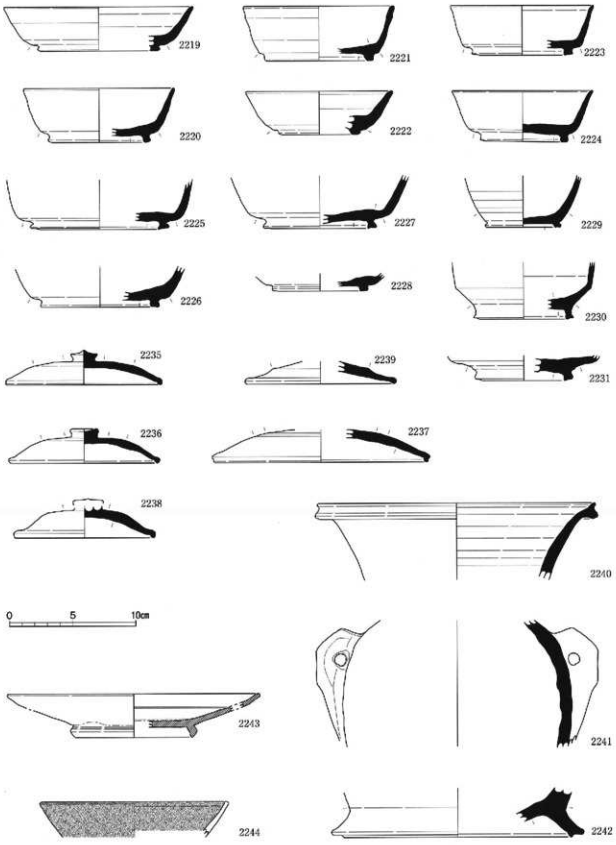
縮尺1／3



古代の土器類－土師器：2201～2205、製塩土器：2206
須恵器：2207～2218・2232～2234

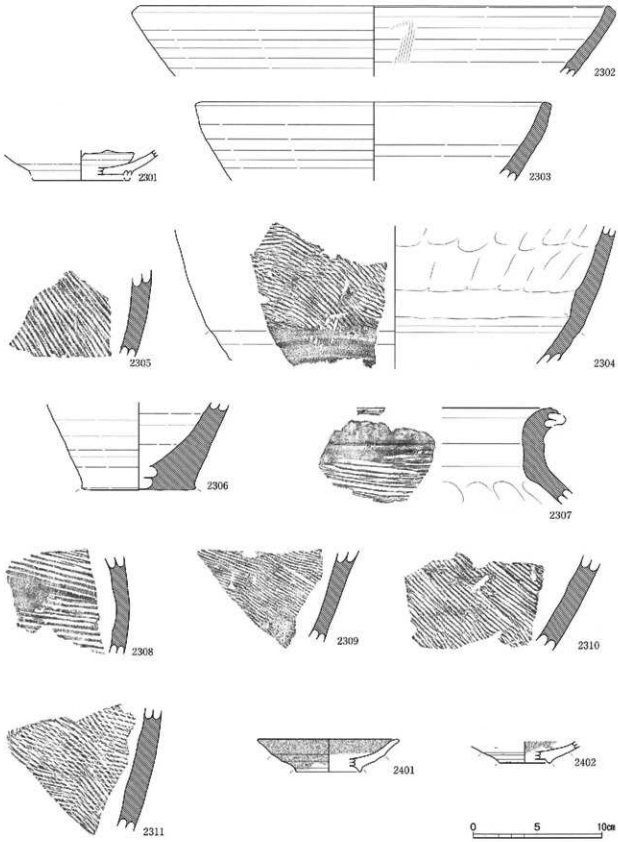
縮尺1／3

図面四八　遺物実測図　東木津遺跡吉岡2地区　土器類



古代の土器類－須恵器：2219～2231・2235～2242
灰釉陶器：2243、緑釉陶器：2244

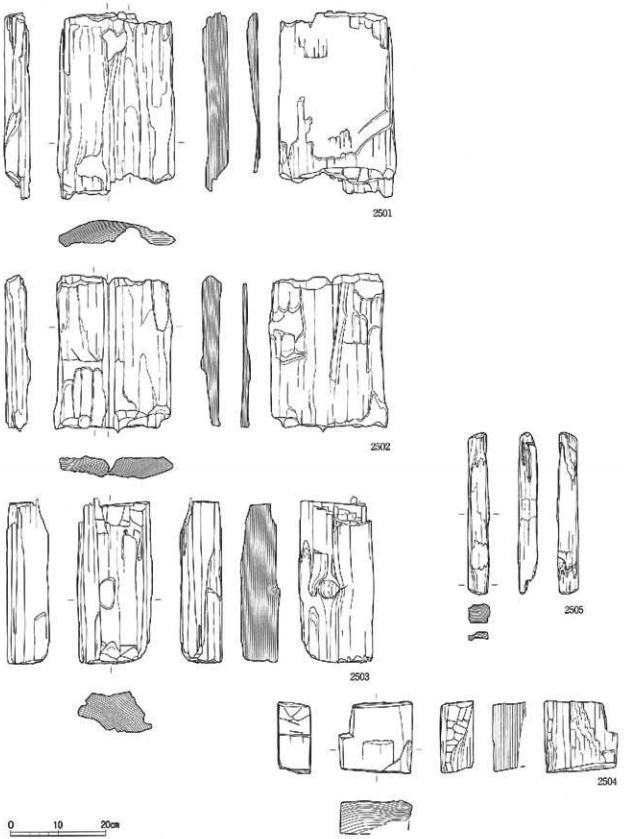
縮尺1／3



中世の土器類－白磁：2301、珠洲：2302～2311
近世の土器類－越中瀬戸：2401・2402

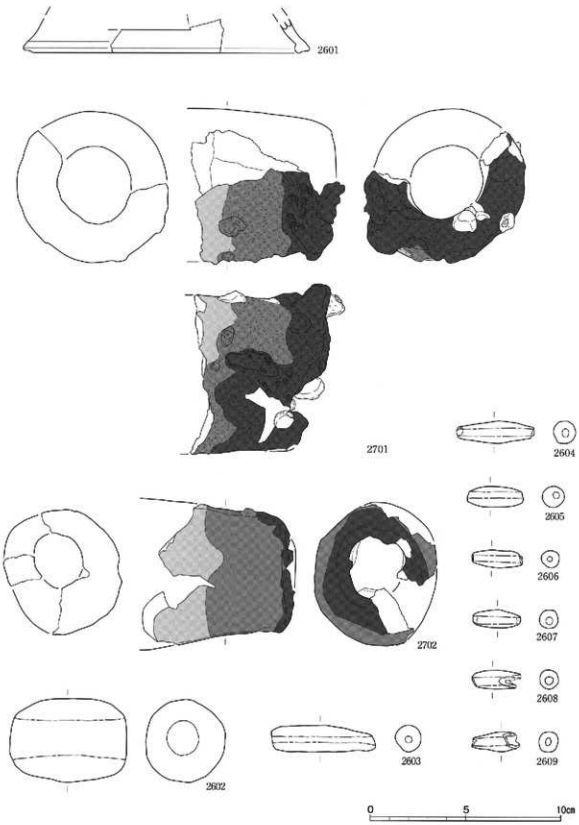
縮尺1／3

図面五〇　遺物実測図　東木津遺跡吉岡地区　木製品



木製品－板状品：2501～2503、部材：2504、棒状品：2505

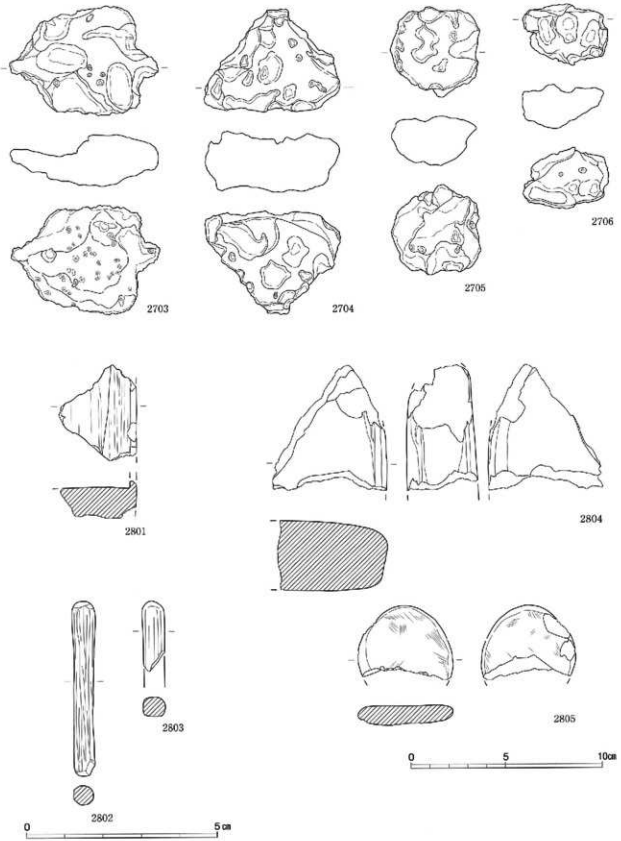
縮尺１／８



円面硯：2601、轆羽口：2701・2702、土錘：2602～2609

縮尺１／２

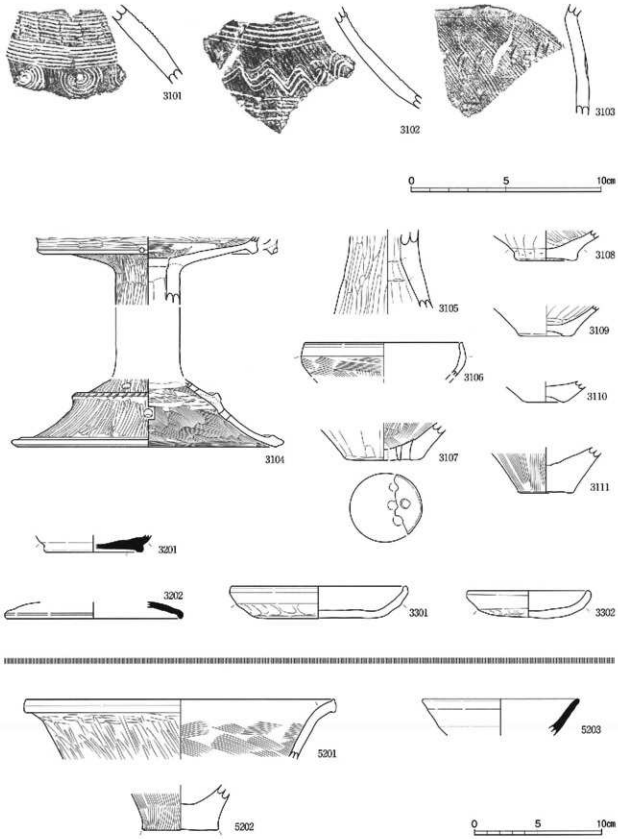
図面五二　遺物実測図　東木津遺跡古岡地区　鉄・石製品



鍛冶関連遺物－椀形滓：2703～2706
石製品－石鏃：2801、棒状石製品：2802・2803、砥石：2804、2805

縮尺実大、1／2

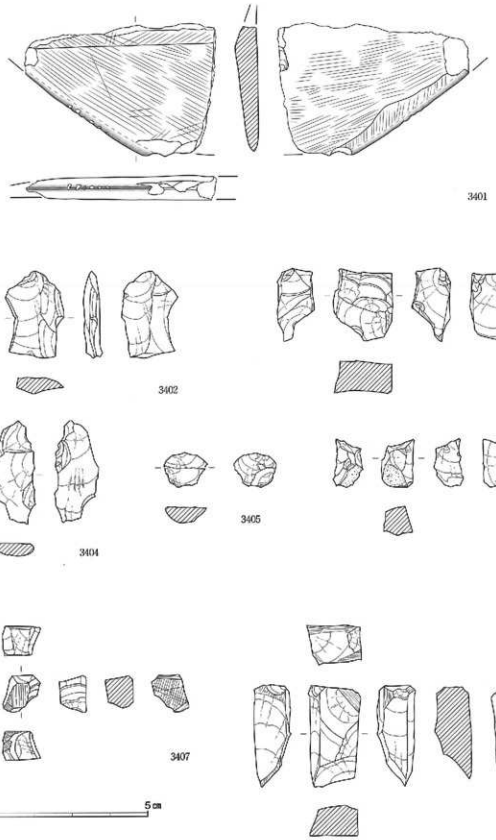
図面五三　遺物実測図　井口本江遺跡巽林地区、ア・ライズ地区　土器類



弥生土器：3101～3111・5201・5202
古代の須恵器：3201・3202・5203、中世の土師器：3301・3302

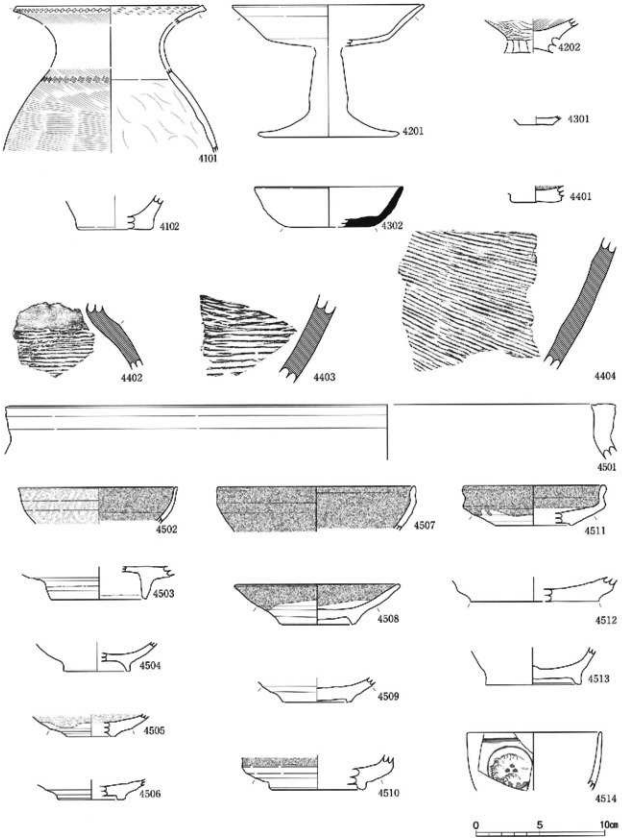
縮尺１／２、１／３

図面五四　遺物実測図　井口本江遺跡栗林地区　石製品



石包丁：3401、剝片：3402～3406、未製品：3407・3408　　縮尺実大

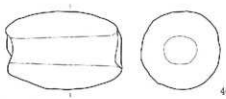
図面五五　遺物実測図　中曽根西遺跡区画整理地区　土器類

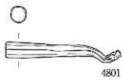


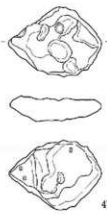
弥生土器：4101・4102、古墳時代の土器類：4201・4202、古代の土器類：4301・4302
中世の土器類：4401～4404、近世の土器類：4501～4514

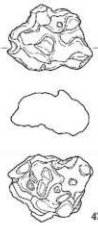
縮尺１／３

図面五六　遺物実測図　中曽根西遺跡区画整理地区　土製品等


4601


4801


4701


4702

0　5　10cm

4802

4803

0　5cm

土製品－土錘：4601、鍛冶関連遺物－椀形滓：4701・4702、
銅製品－煙管：4801、銅銭：4802・4803

縮尺実大、1／2

図　　版

図 版 目 次

図版01　遺構写真　瑞龍寺遺跡富山不動産地区
1．調査地区遠景（北東）
2．調査地区遠景（北北東）
図版02　遺構写真　瑞龍寺遺跡富山不動産地区
1．調査地区全景（南）
2．調査地区全景（西）
図版03　遺構写真　瑞龍寺遺跡富山不動産地区
1．神社址ＳＢ01全景（直上）
2．神社址ＳＢ01全景（南）
図版04　遺構写真　瑞龍寺遺跡富山不動産地区
1．地形址ＳＢ01－ｓｂ01全景（南東）
2．地形址ＳＢ01－ｓｂ01全景（東）
図版05　遺構写真　瑞龍寺遺跡富山不動産地区
1．道路址ＳＢ01－ｓｔ01、掘え方列
ＳＢ01－ｓａ01・02検出状態（北東）
2．道路址ＳＢ01－ｓｔ01、掘え方列
ＳＢ01－ｓａ01・02Ｐ２断割全景（南東）
図版06　遺構写真　瑞龍寺遺跡富山不動産地区
1．丸瓦りＳＵ05～07、土坑ＳＫ01（南西）
2．瓦溜りＳＵ05～07、溝ＳＤ04（西）
図版07　遺構写真　瑞龍寺遺跡富山不動産地区
1．瓦溜りＳＵ01・02検出状態（北東）
2．瓦溜りＳＵ03・溝ＳＤ03検出状態
（北北東）
図版08　遺構写真　瑞龍寺遺跡富山不動産地区
1．土坑ＳＫ04検出状態（北西）
2．溝ＳＤ04確認状態（北東）
図版09　遺構写真　瑞龍寺遺跡富山不動産地区
1．溝ＳＤ02確認状態（西南西）
2．溝ＳＤ07確認状態（西）
図版10　遺構写真　瑞龍寺遺跡富山不動産地区
1．瓦溜りＳＵ04検出状態（南西）
2．溝ＳＤ05確認状態（東南東）
図版11　遺構写真　瑞龍寺遺跡富山不動産地区
1．横石ＳＳ01・集石ＳＳ02検出状態（南）
2．横石ＳＳ01・集石ＳＳ02検出状態（北）
図版12　遺構写真　瑞龍寺遺跡富山不動産地区
1．巴紋軒丸瓦（1301）出土状態（北）
2．熨し丸瓦（刻印・「十」1317）
出土状態（北東）
3．熨し平瓦（刻印・「十」1310）
出土状態（北西）
図版13　遺構写真　瑞龍寺遺跡富山不動産地区
1．赤釉陶丸瓦（1325）出土状態（北東）
2．黒釉陶平瓦（1329）出土状態（北）
3．ガラス瓶（1701）出土状態（西）
図版14　遺構写真　東木津遺跡吉岡地区
1．吉岡１地区全景（南西）
2．吉岡２地区全景（直上）
図版15　遺構写真　東木津遺跡吉岡地区
1．吉岡２地区全景（北東）
2．吉岡１地区１号トレンチ遺構検出状態
（南西）
図版16　遺構写真　東木津遺跡吉岡地区
1．吉岡１地区２号トレンチ遺構検出状態
（南西）
2．吉岡２地区中央部遺構検出状態（北西）
図版17　遺構写真　東木津遺跡吉岡地区
1．吉岡２地区南東部遺構検出状態（北東）
2．吉岡１地区１号トレンチセクション（南西）
図版18　遺構写真　東木津遺跡吉岡地区
1．掘立柱建物址ＳＢ07検出状態（南西）
2．掘立柱建物址ＳＢ08検出状態（東）
3．掘立柱建物址ＳＢ09検出状態（北東）
図版19　遺構写真　東木津遺跡吉岡地区
1．掘立柱建物址ＳＢ05－Ｐ６
礎板出土状態（南）
2．掘立柱建物址ＳＢ05－Ｐ６
礎板出土状態（南西）
図版20　遺構写真　東木津遺跡吉岡地区
1．掘立柱建物址ＳＢ05－Ｐ６セクション
（北西）
2．土坑ＳＫ20完掘状態（南東）
3．土坑ＳＫ20遺物出土状態（南東）
図版21　遺構写真　東木津遺跡吉岡地区
1．土坑ＳＫ22炭化物検出状態（北）
2．土坑ＳＫ23遺物出土状態（西）
3．土坑ＳＫ23遺物（2110）出土状態（南西）
図版22　遺構写真　東木津遺跡吉岡地区
1．溝ＳＤ13検出状態（北西）
2．溝ＳＤ14遺物出土状態（北西）
3．溝ＳＤ18遺物出土状態（南東）
図版23　遺構写真　東木津遺跡吉岡地区
1．溝ＳＤ21～25検出状態（北東）
2．溝ＳＤ24・25検出状態（西）

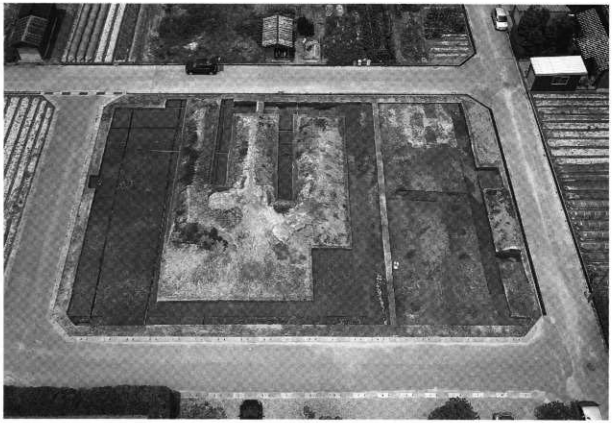
図版24　遺構写真　東木津遺跡吉岡地区
1．吉岡１地区第Ⅳ層遺物出土状態（北西）
2．吉岡２地区第Ⅴ層遺物出土状態（北）
3．吉岡２地区第Ⅴ～Ⅵ層遺物出土状態（南西）
図版25　遺構写真　井口本江遺跡栗林地区
1．調査地区全景（北東）
2．調査地区全景（南東）
図版26　遺構写真　井口本江遺跡栗林地区
1．東側調査地区全景（北東）
2．西側調査地区全景（南西）
図版27　遺構写真　井口本江遺跡栗林地区
1．土坑ＳＫ06検出状態（東南東）
2．土坑ＳＫ06完掘状態（南）
図版28　遺構写真　井口本江遺跡栗林地区
1．溝ＳＤ01検出状態（南）
2．溝ＳＤ01完掘状態（北）
図版29　遺構写真　中曽根西遺跡区画整理地区
1．Ａ区全景（南西）
2．Ｂ区全景（西）
図版30　遺構写真　中曽根西遺跡区画整理地区
1．Ｂ01トレンチ遺構検出状態（北西）
2．Ｂ02・04トレンチ遺構検出状態（西）
図版31　遺構写真　中曽根西遺跡区画整理地区
1．Ｂ07トレンチ遺構検出状態（北西）
2．Ｂ14トレンチ遺構検出状態（南東）
図版32　遺構写真　中曽根西遺跡区画整理地区
1．Ｂ17トレンチ溝ＳＤ07～10検出状態（南西）
2．Ｂ18トレンチ道路址ＳＦ01検出状態（北西）
図版33　遺構写真　中曽根西遺跡区画整理地区
1．Ｂ04トレンチ第Ⅲ層越中瀬戸（4508）出土状態（北西）
2．Ｂ15トレンチ第Ⅲ層越中瀬戸（4509）出土状態（北東）
図版34　遺構写真　中曽根西遺跡区画整理地区
1．Ｃ区全景（南東）
2．Ｃ01トレンチ遺構検出状態（北西）
図版35　遺構写真　中曽根西遺跡区画整理地区
1．Ｄ02トレンチ遺構検出状態（東）
2．Ｄ03トレンチ遺構検出状態（東）
図版36　遺構写真　中曽根西遺跡区画整理地区
1．Ｃ02トレンチ遺構検出状態（南西）
2．Ｄ区全景（西）
図版37　遺構写真　中曽根西遺跡区画整理地区
1．Ｅ区全景（南東）
2．土器集中遺構ＳＸ01遺物出土状態（南東）
図版38　遺構写真　中曽根西遺跡区画整理地区
1．Ｅ01トレンチ北横セクション（南西）
2．Ｆ区全景（北西）
図版39　遺物写真　瑞龍寺遺跡富山不動産地区　土器類
1．中近世の土器・陶磁器類外面
2．中近世の土器・陶磁器類内面
図版40　遺物写真　瑞龍寺遺跡富山不動産地区　瓦
1．近世の燻し瓦－巴紋軒丸瓦・軒丸瓦
均整唐草紋軒平瓦
2．近世の燻し瓦－平瓦
図版41　遺物写真　瑞龍寺遺跡富山不動産地区　瓦
1．近世の燻し瓦－丸瓦凸面
2．近世の燻し瓦－丸瓦凹面
図版42　遺物写真　瑞龍寺遺跡富山不動産地区　瓦
1．近世の燻し瓦－菊丸瓦
2．近世の燻し瓦－輪違い瓦・鬼瓦
図版43　遺物写真　瑞龍寺遺跡富山不動産地区　瓦
近世の赤釉薬瓦－丸瓦・平瓦、黒釉薬瓦－平瓦
図版44　遺物写真　瑞龍寺遺跡富山不動産地区　鉄製品等
1．鉄製品
2．銅製品・石製品
図版45　遺物写真　東木津遺跡吉岡地区　土器類
1．古代の土器類－土師器
2．古代の土器類－須恵器
3．中世の土器類
図版46　遺物写真　東木津遺跡吉岡地区　土器類
1．古代の須恵器
2．古代の須恵器
図版47　遺物写真　東木津遺跡吉岡地区　土器類
1．古代の土器類－土師器・製塩土器
2．古代の土器類－須恵器
図版48　遺物写真　東木津遺跡吉岡地区　土器類
1．古代の土器類－須恵器
2．古代の土器類－須恵器、灰釉・緑釉陶器
図版49　遺物写真　東木津遺跡吉岡地区　土器類他
1．中近世の土器類
2．円面硯・土錘・石製品
図版50　遺物写真　東木津遺跡吉岡地区　木製品
1．木製品表面
2．木製品裏面
図版51　遺物写真　東木津遺跡吉岡地区　鉄製品
1．鞴羽口・椀形滓
2．鍛冶関連遺物・植物遺存体
図版52　遺物写真　井口本江遺跡栗林地区　土器類
井口本江遺跡ア・ライズ地区　土器類
1．弥生土器
2．古代の土器・中世の土師器
3．土師器　ア・ライズ地区
図版53　遺物写真　井口本江遺跡栗林地区　石製品
中曽根西遺跡区画整理地区　鉄製品
1．井口本江遺跡　石製品・剥片・未製品
2．中曽根西遺跡　銅製品・土製品・鍛冶関連遺物
図版54　遺物写真　中曽根西遺跡区画整理地区　土器類
1．弥生土器
2．須恵器・珠洲
3．近世陶磁器外面、内面

図版〇一　遺構写真　瑞龍寺遺跡富山不動産地区

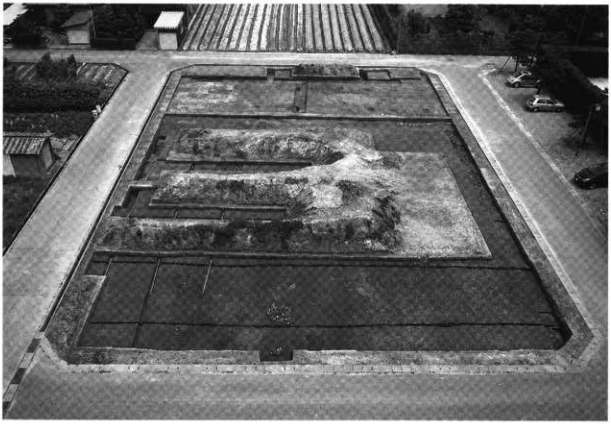
1．調査地区大遠景（北東）

2．調査地区遠景（北北東）

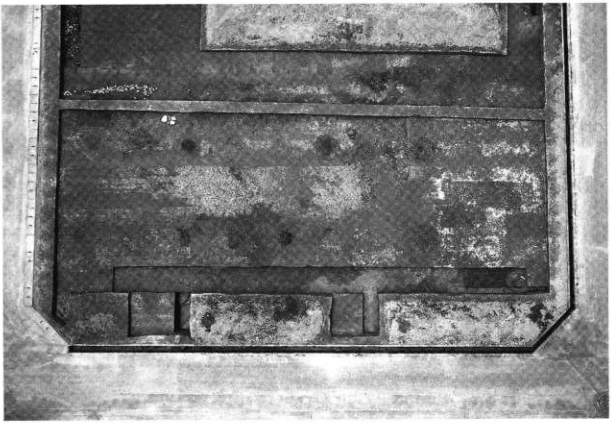
図版〇二　遺構写真　瑞龍寺遺跡富山不動産地区



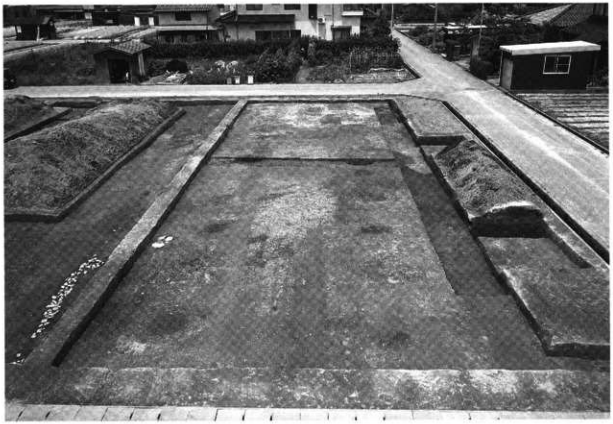
1．調査地区全景（南）



2．調査地区全景（西）



1．神社址ＳＢ01全景（真上）



2．神社址ＳＢ01全景（南）

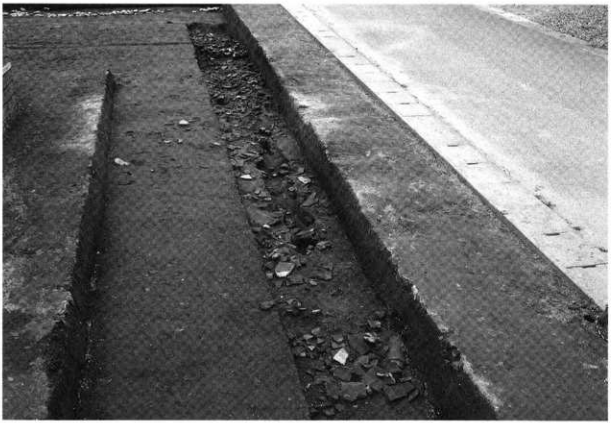
1．地形址ＳＢ01－ｓｂ01全景（南東）

2．地形址ＳＢ01－ｓｂ01全景（東）

1．地形址ＳＢ01－ｓｔ01、据え方列ＳＢ01－ｓａ01・02検出状態（北東）

2．地形址ＳＢ01－ｓｔ01、据え方列ＳＢ01－ｓａ01・02Ｐ２断割全景（南東）

1．瓦溜りＳＵ05～07、土坑ＳＫ01（南西）

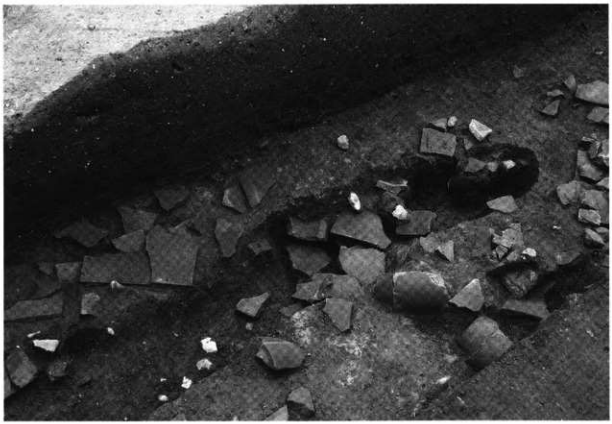


2．瓦溜りＳＵ05～07、溝ＳＤ04（西）

1．瓦溜りＳＵ01・02検出状態（北東）

2．瓦溜りＳＵ03・溝ＳＤ03検出状態（北北東）

1．土坑ＳＫ04検出状態（北西）



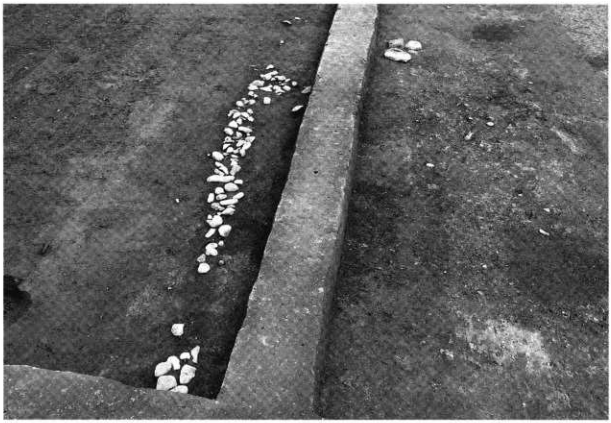
2．溝ＳＤ04確認状態（北東）

1．溝ＳＤ02確認状態（西南西）

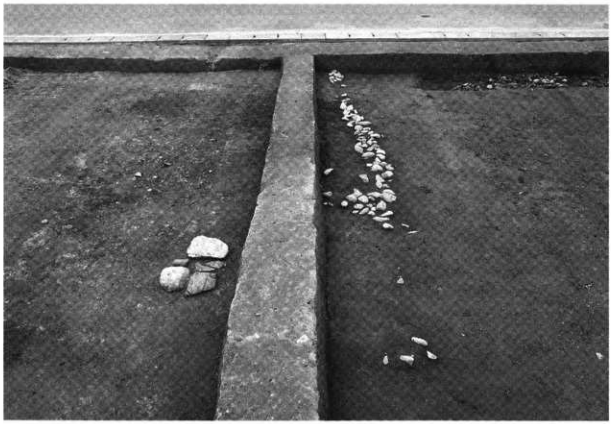
2．溝ＳＤ07確認状態（西）

1．瓦溜りＳＵ04検出状態（南西）

2．溝ＳＤ05確認状態（東南東）



1．根石ＳＳ01・集石ＳＳ02検出状態（南）



2．根石ＳＳ01・集石ＳＳ02検出状態（北）

図版一二　遺構写真　瑞龍寺遺跡富山不動産地区

1．巴紋軒丸瓦（1301）
出土状態（北）

2．燻し丸瓦（刻印・上
1317）出土状態（北東）

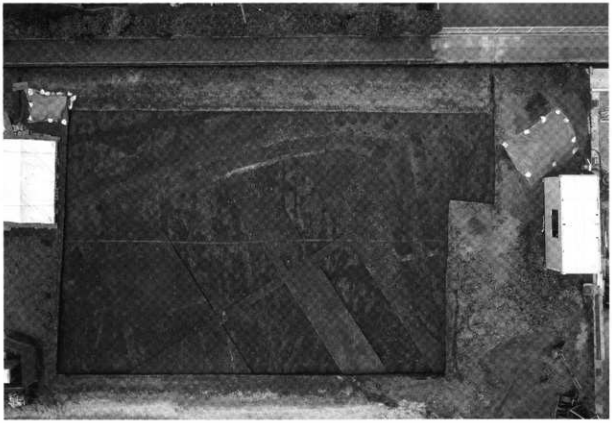
3．燻し平瓦（刻印・上
1310）出土状態（北西）

1．赤釉薬丸瓦（1325）
出土状態（北東）

2．黒釉薬平瓦（1329）
出土状態（北）

3．ガラス瓶（1701）
出土状態（西）

1．吉岡1地区全景（南西）



2．吉岡2地区全景（直上）

1．吉岡２地区全景（北東）

2．吉岡１地区１号トレンチ遺構検出状態（南西）

図版一六　遺構写真　東木津遺跡吉岡地区

1．吉岡１地区２号トレンチ遺構検出状態（南西）

2．吉岡２地区中央部遺構検出状態（北西）

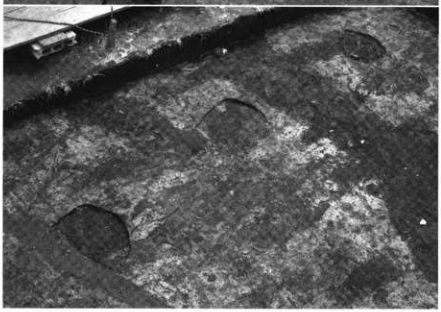
1．吉岡２地区南東部遺構検出状態（北東）

2．吉岡１地区１号トレンチセクション（南西）

図版一八　遺構写真　東木津遺跡古岡地区

1．掘立柱建物址ＳＢ07
検出状態（南西）

2．掘立柱建物址ＳＢ08
検出状態（東）



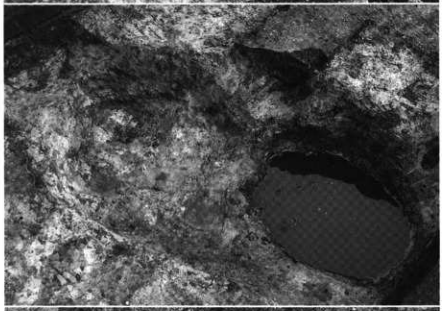
3．掘立柱建物址ＳＢ09
検出状態（北東）

1．掘立柱建物址ＳＢ05－Ｐ６礎板出土状態（南）

2．掘立柱建物址ＳＢ05－Ｐ６礎板出土状態（南西）

図版二〇　遺構写真　東木津遺跡吉岡地区

1．掘立柱建物址ＳＢ05－Ｐ6セクション（北西）

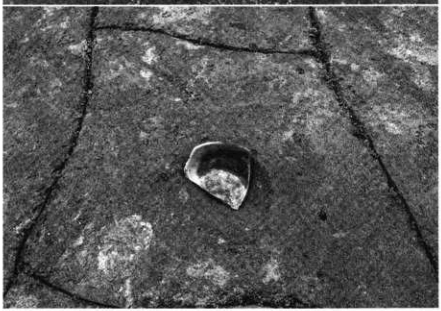


2．土坑ＳＫ20完掘状態（南東）

3．土坑ＳＫ20遺物出土状態（南東）

1．土坑ＳＫ22炭化物
検出状態（北）

2．土坑ＳＫ23遺物出土状態
（西）



3．土坑ＳＫ25遺物（2110）
出土状態（南西）

図版二二　遺構写真　東木津遺跡古岡地区

1．溝ＳＤ13検出状態
（北西）

2．溝ＳＤ14遺物出土状態
（北西）

3．溝ＳＤ18遺物出土状態
（南東）

1．溝ＳＤ21～25検出状態（北東）

2．溝ＳＤ24・25検出状態（西）

1．吉岡１地区第Ⅳ層遺物出土状態（北西）

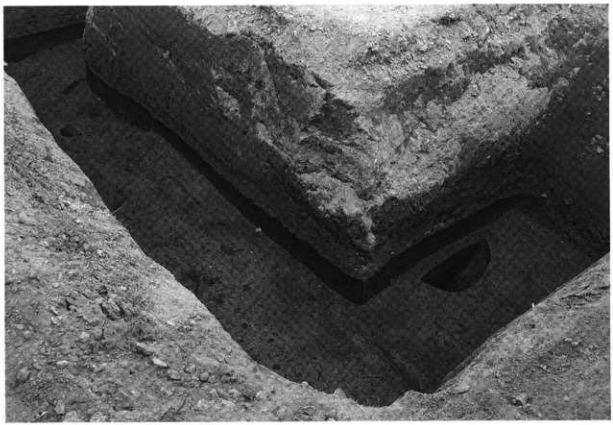
2．吉岡２地区第Ⅴ層遺物出土状態（北）

3．吉岡２地区第Ⅴ～Ⅵ層遺物出土状態（南西）

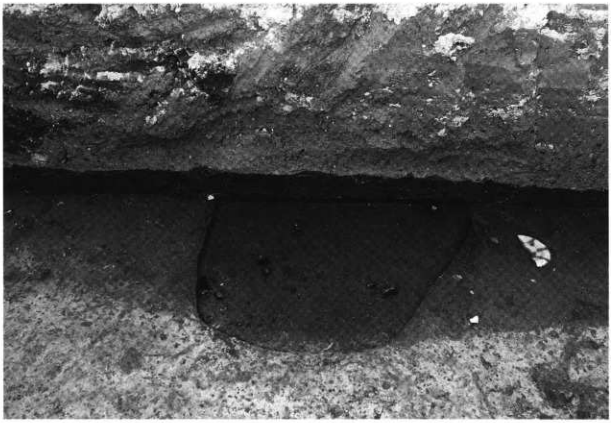
1．調査地区全景（北東）

2．調査地区全景（南東）

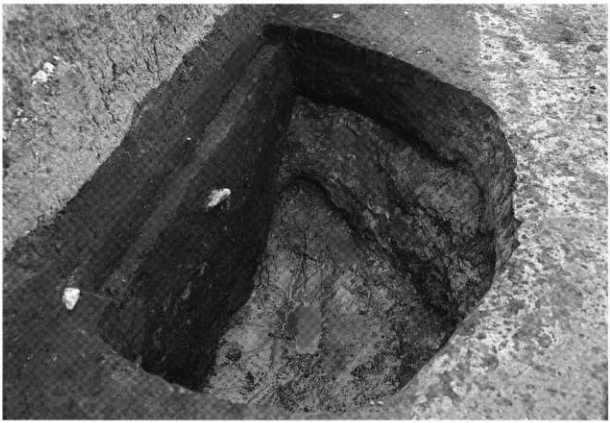
1．東側調査地区全景（北東）



2．西側調査地区全景（南西）



1．土坑ＳＫ06検出状態（東南東）



2．土坑ＳＫ06完掘状態（南）

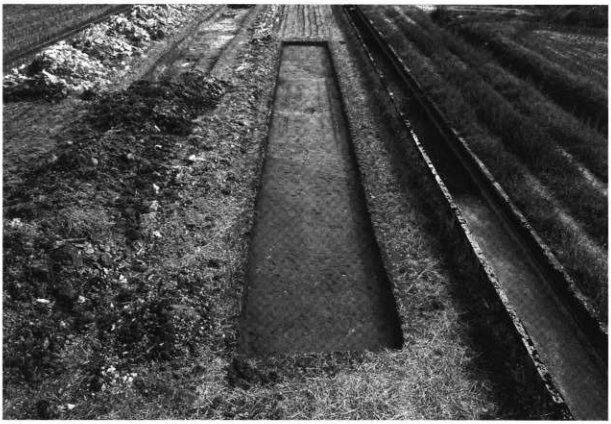
1．溝ＳＤ01検出状態（南）

2．溝ＳＤ01完掘状態（北）

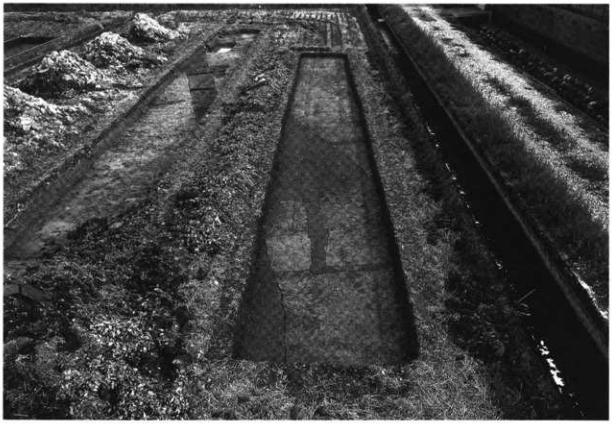
1．A区全景（南西）

2．B区全景（西）

図版三〇　遺構写真　中曽根西遺跡区画整理地区

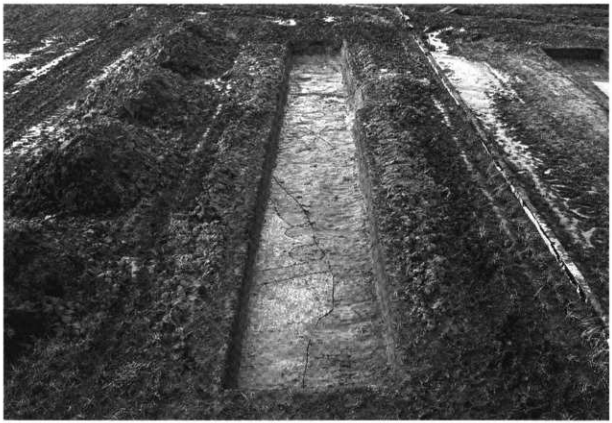


1．B01トレンチ遺構検出状態（北西）

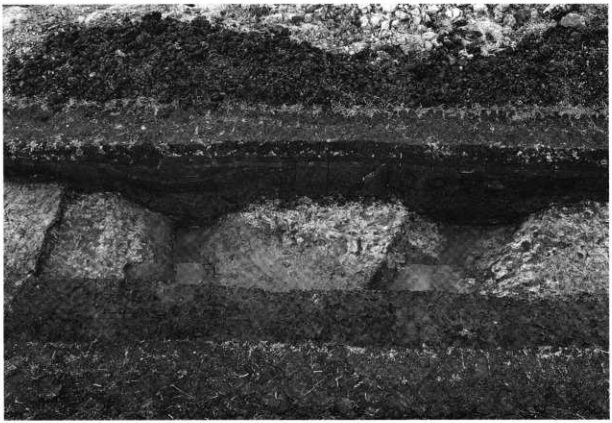


2．B02・04トレンチ遺構検出状態（西）

1．B07トレンチ遺構検出状態（北西）

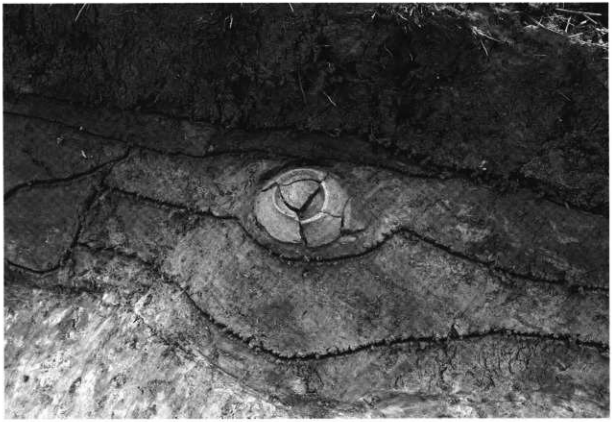


2．B14トレンチ遺構検出状態（南東）

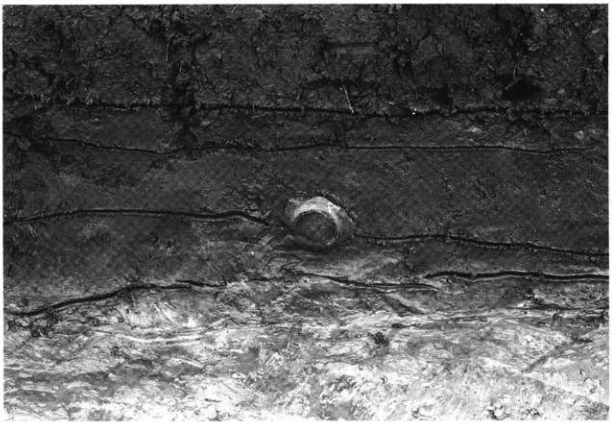


1．B17トレンチ溝ＳＤ07～10検出状態（南西）

2．B18トレンチ道路址ＳＦ01検出状態（北西）



1．B04トレンチ第Ⅲ層越中瀬戸（4508）出土状態（北西）



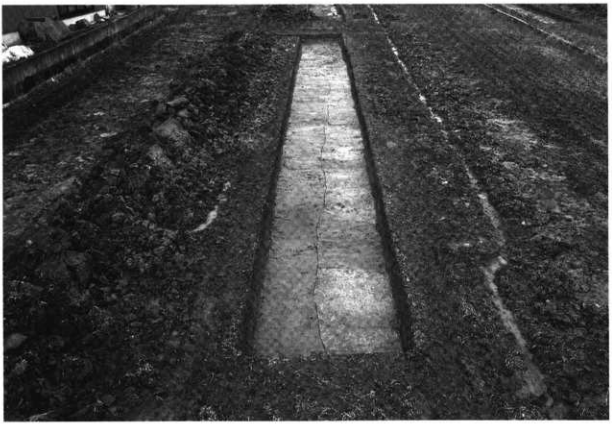
2．B15トレンチ第Ⅲ層越中瀬戸（4509）出土状態（北東）

図版三四　遺構写真　中曽根西遺跡区画整理地区

1．C区全景（南東）

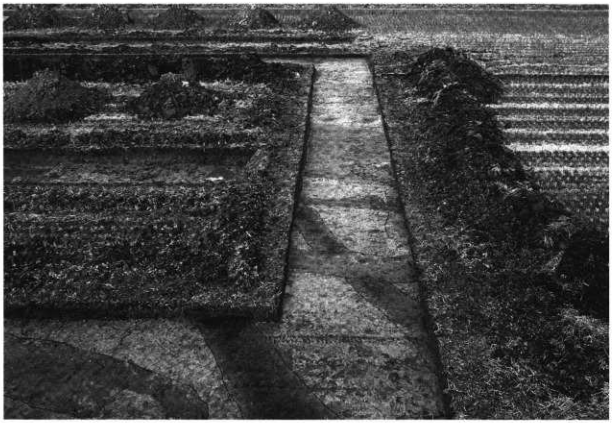
2．C01トレンチ遺構検出状態（北西）

1．D02トレンチ遺構検出状態（東）

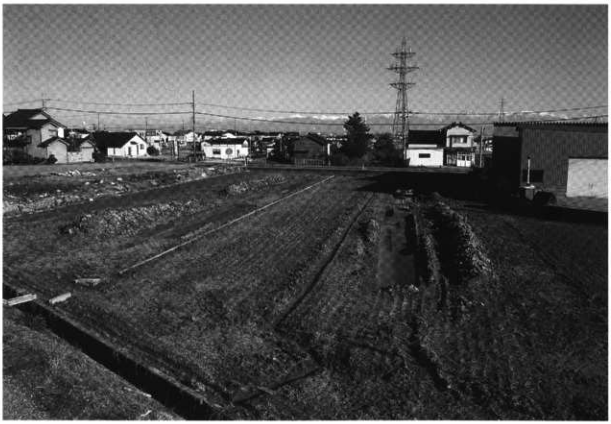


2．D03トレンチ遺構検出状態（東）

図版三六　遺構写真　中曽根西遺跡区画整理地区



1．C02トレンチ遺構検出状態（南西）



2．D区全景（西）

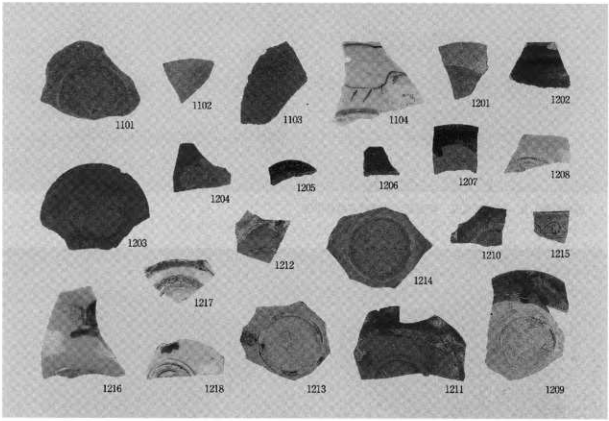
1．E区全景（南東）

2．土器集中遺構ＳＸ01遺構出土状態（南東）

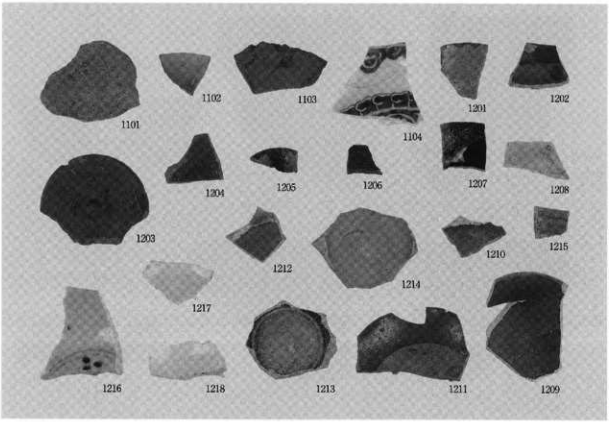
図版三八　遺構写真　中曽根西遺跡区画整理地区

1．E01トレンチ北壁セクション（南西）

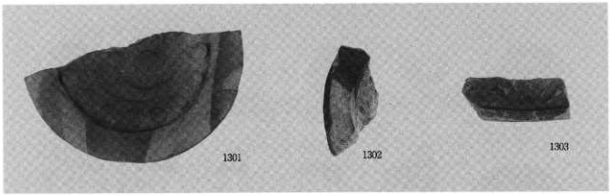
2．F区全景（北西）



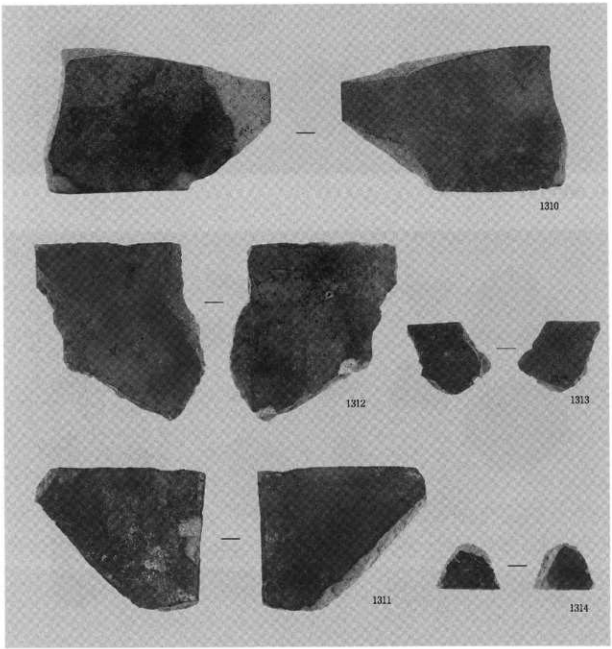
1．中近世の土器・陶磁器類外面



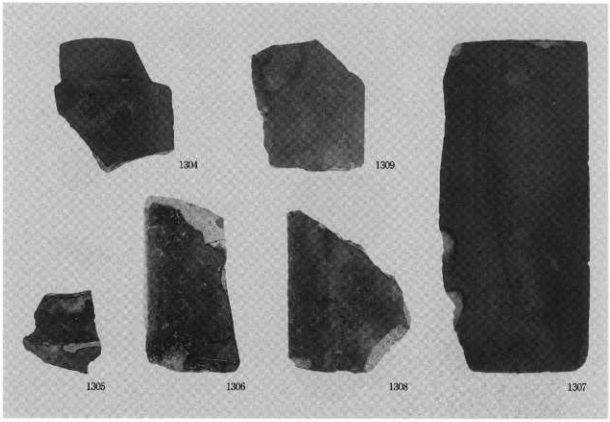
2．中近世の土器・陶磁器類内面



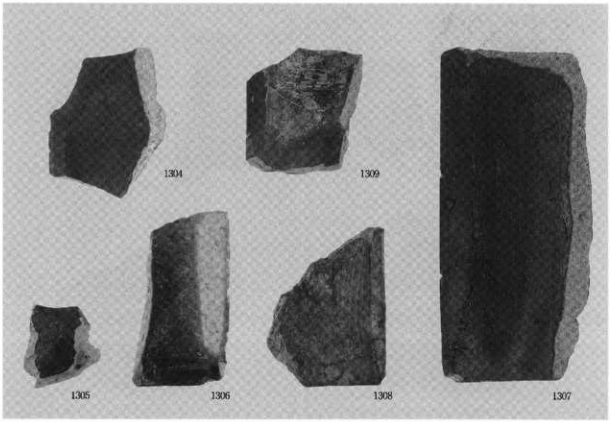
1．近世の燻し瓦－巴紋軒丸瓦・軒丸瓦・均整唐草紋軒平瓦



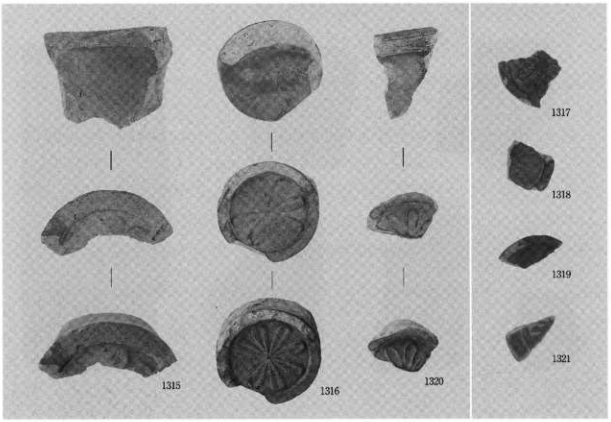
2．近世の燻し瓦－平瓦



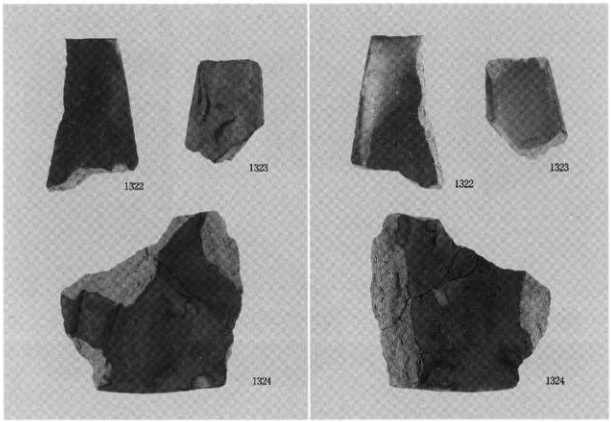
1．近世の燻し瓦－丸瓦凸面



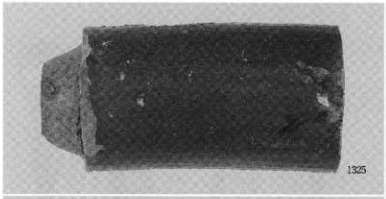
2．近世の燻し瓦－丸瓦凹面

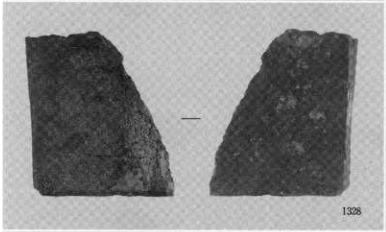


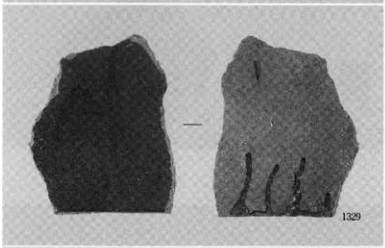
1．近世の燻し瓦－菊丸瓦

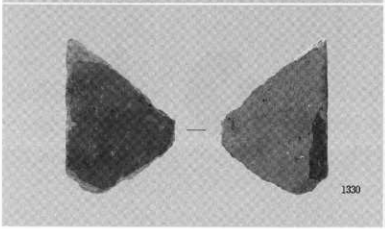


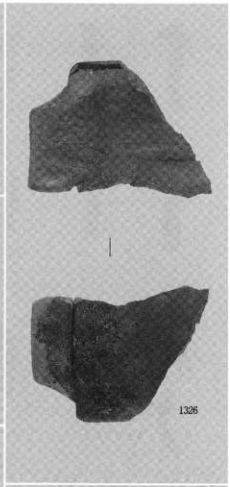
2．近世の燻し瓦－輪違い瓦・鬼瓦

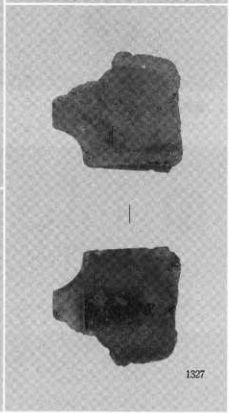






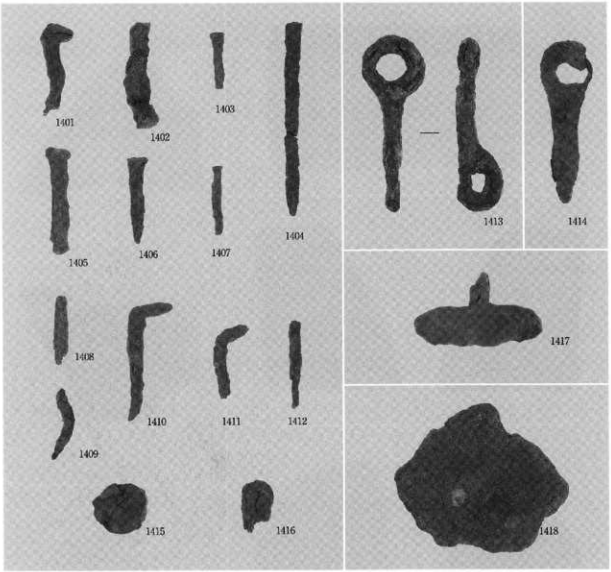




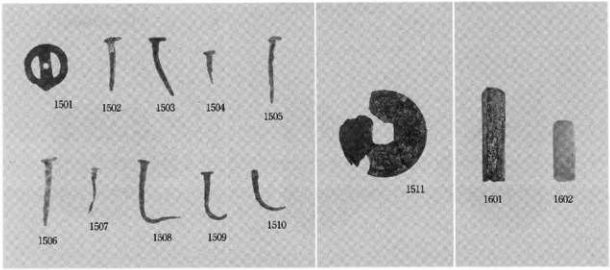


近世の赤釉薬瓦－丸瓦・平瓦、黒釉薬瓦－平瓦

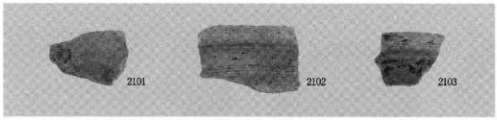
図版四四　遺物写真　瑞龍寺遺跡富山不動産地区　鉄製品等



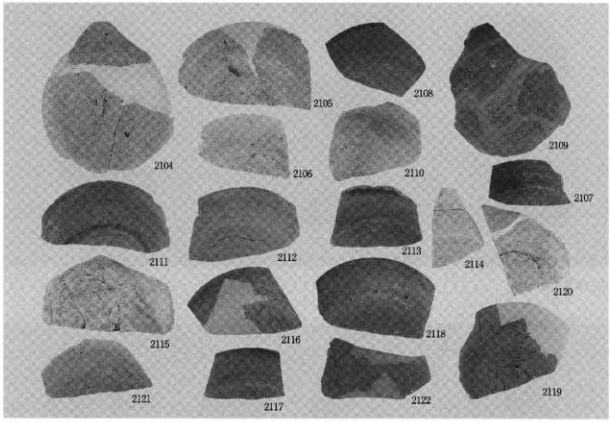
1．鉄製品



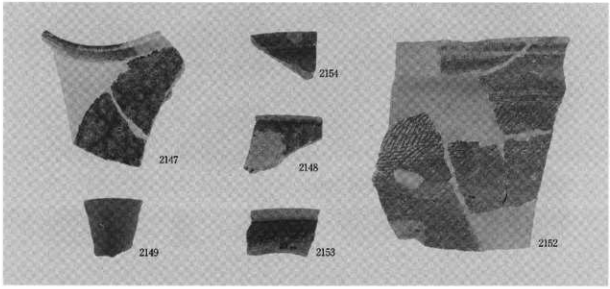
2．銅製品・石製品



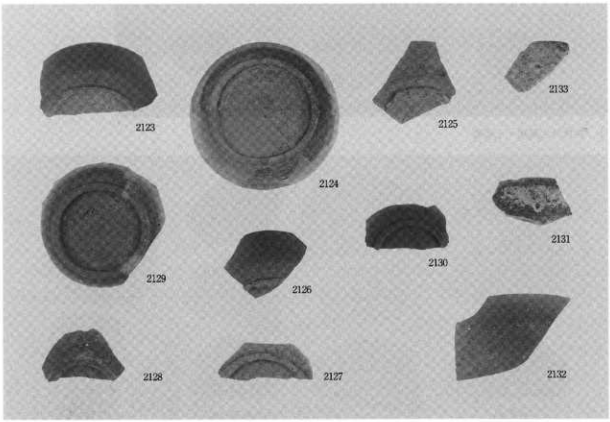
1．古代の土器類－土師器



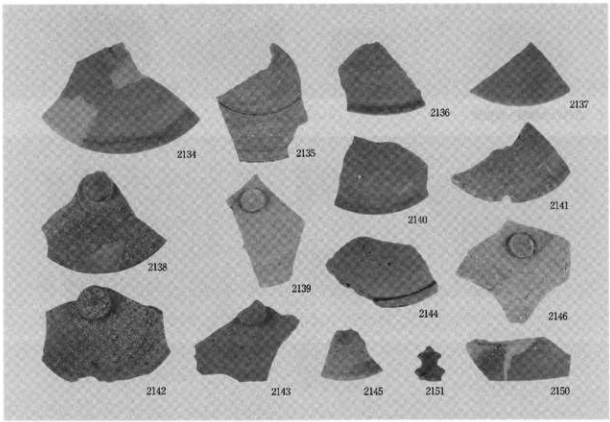
2．古代の土器類－須恵器



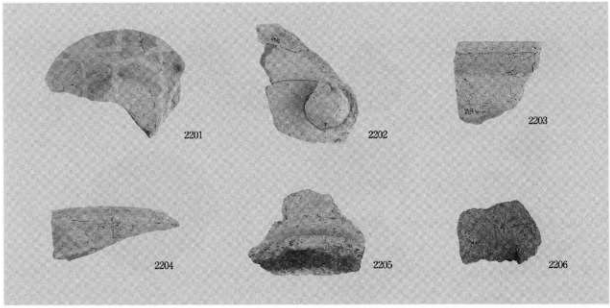
3．中世の土器類



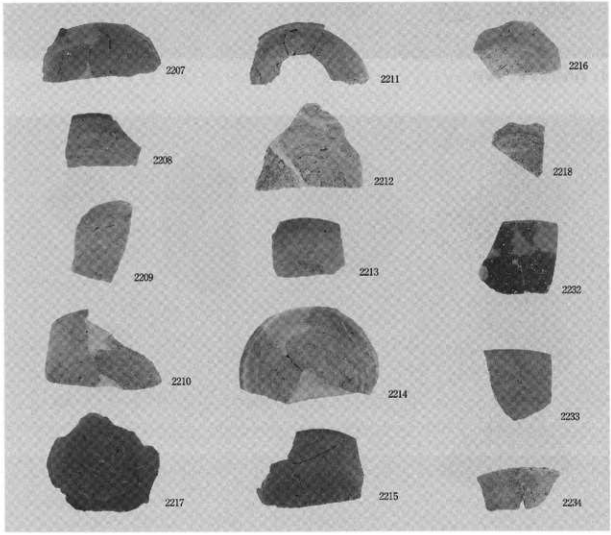
1．古代の須恵器



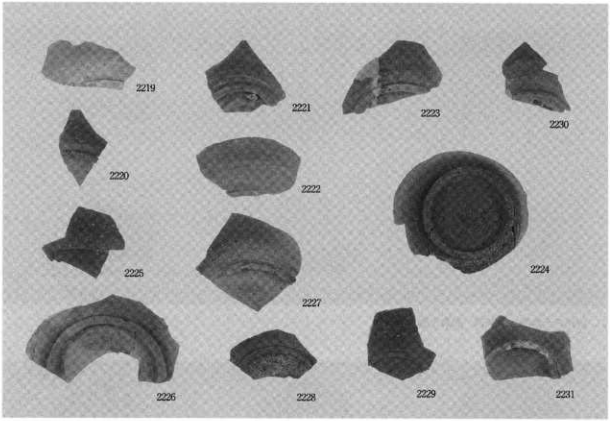
2．古代の須恵器



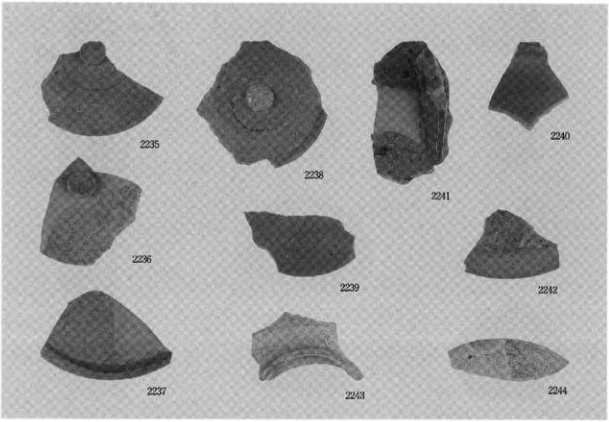
1．古代の土器類－土師器・製塩土器



2．古代の土器類－須恵器

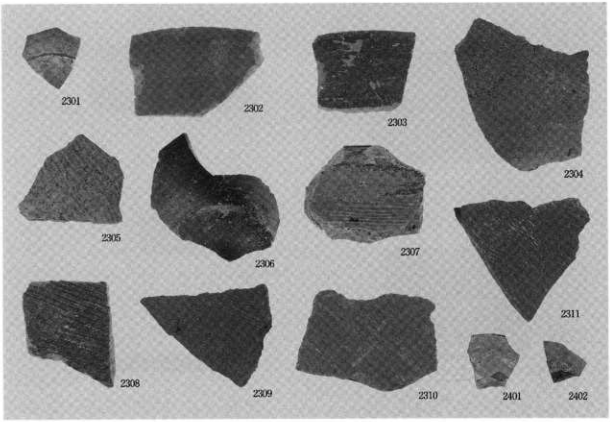


1．古代の土器類－須恵器

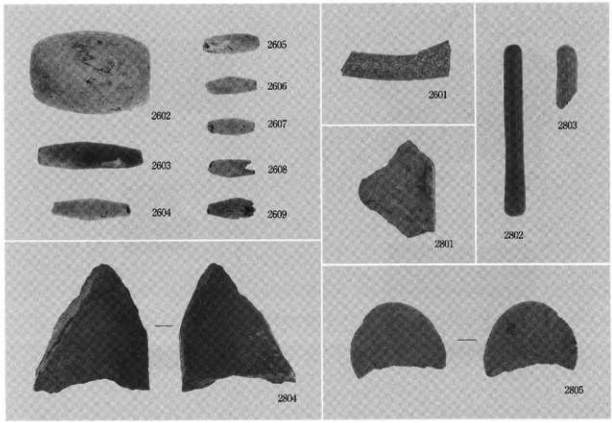


2．古代の土器類－須恵器、灰釉・緑釉陶器

図版四九　遺物写真　東木津遺跡吉岡地区　土器類他

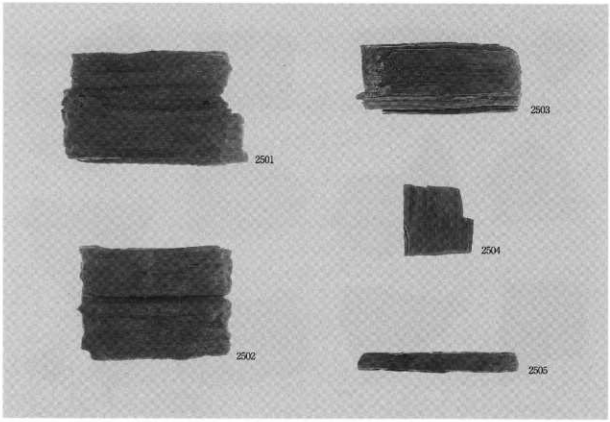


1．中近世の土器類

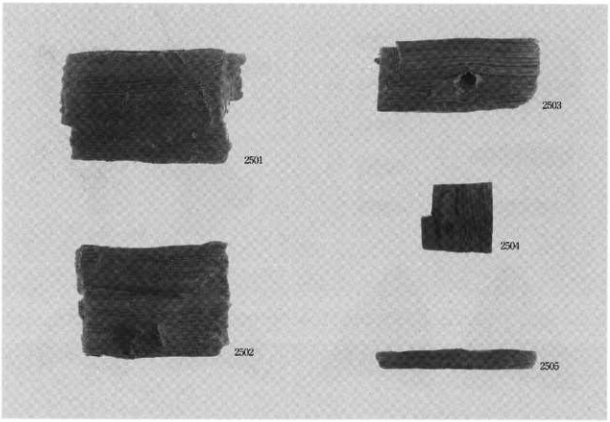


2．円面硯・土錘・石製品

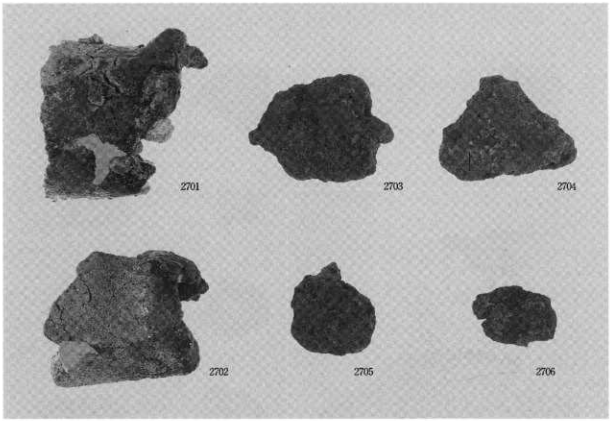
図版五〇　遺物写真　東木津遺跡古岡地区　木製品



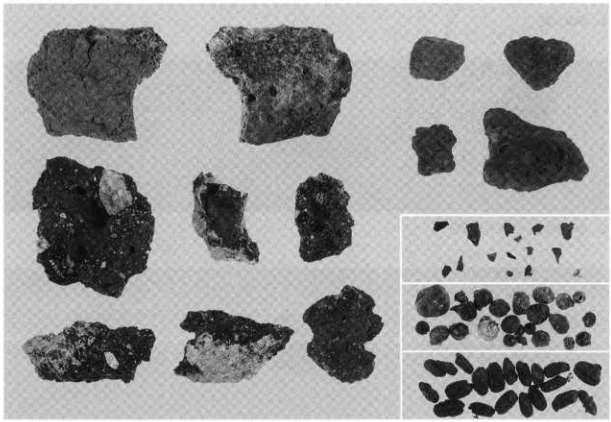
1．木製品表面



2．木製品裏面

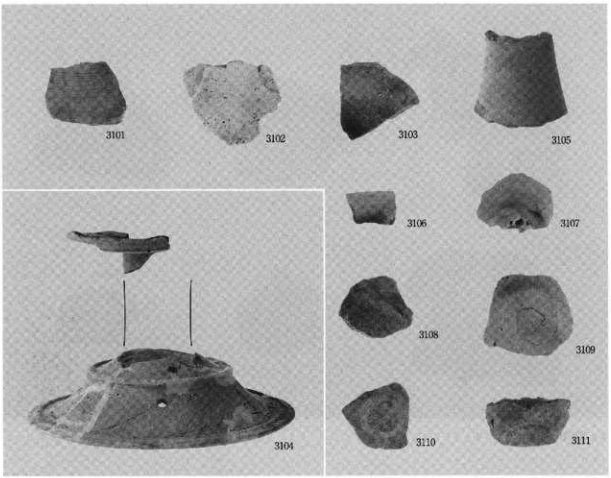


1．鞴羽口・椀形滓

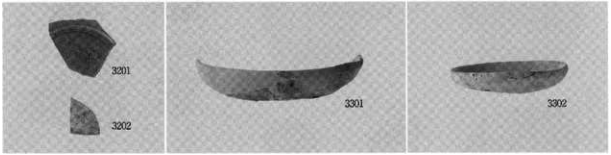


2．鍛冶関連遺物（鍛冶滓・炉壁・鍛造剥片・粒状滓）・植物遺存体（炭化米）

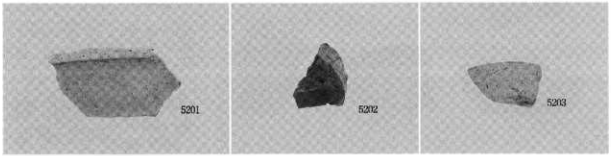
図版五二　遺物写真　井口本江遺跡栗林地区、ア・ライズ地区　土器類



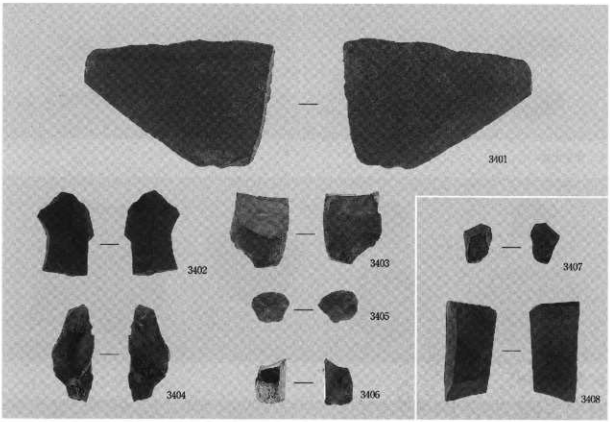
1．弥生土器



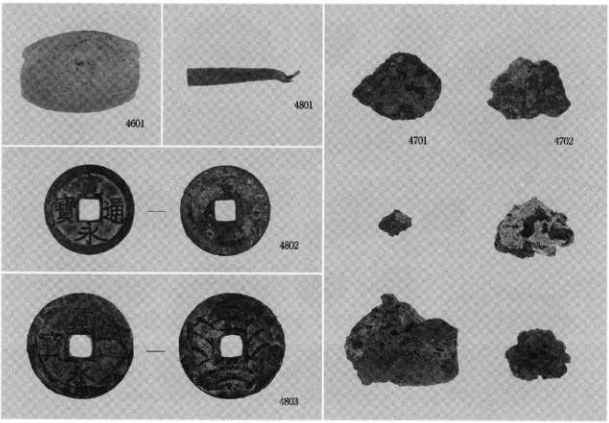
2．古代の土器・中世の土師器



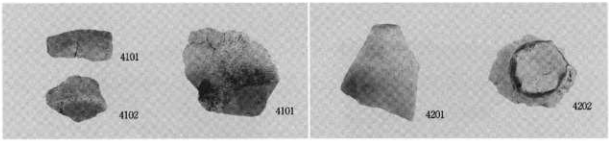
3．土師器　ア・ライズ地区



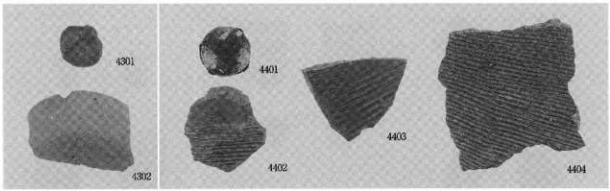
1．井口本江遺跡　石製品・剥片・未製品



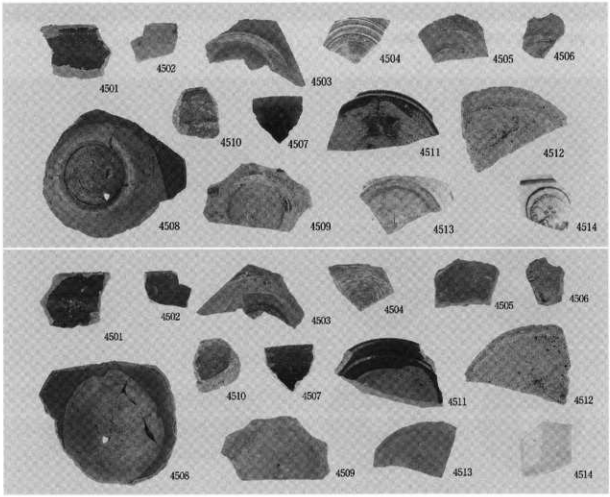
2．中曽根西遺跡　鋼製品・土製品・鍛冶関連遺物（椀形滓・鍛冶滓・炉壁）



1．弥生土器



2．須恵器・珠洲



3．近世陶磁器外面、内面

高岡市埋蔵文化財調査概報第68冊

市内遺跡調査概報XIX

発行者　高岡市教育委員会
富山県高岡市広小路7番50号

2010年2月26日

印刷所　株式会社トーザワ
富山県高岡市佐野新町1386－1